

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（191）

国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

さと まち
里 町 遺 跡

（伊佐市大口）

2017年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（羽月川と鳥神岡を臨む）

序 文

この報告書は、国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業に伴って、平成26年度に実施した伊佐市大口に所在する里町遺跡の発掘調査の記録です。

里町遺跡では縄文時代から近現代にかけての遺構・遺物が発見されました。中でも古代を中心とした土坑や溝状遺構等の遺構，土師器・須恵器や陶磁器類等の遺物が多数発見されました。

特筆すべきは、記銘のある越州窯系青磁の出土でした。9世紀初めの中国において生産されたもので、大変希少な発見となりました。

大口筋の道路は現在も熊本方面と鹿児島を結ぶ重要な幹線道路ですが、古代においても人の往来が盛んで、重要な公的施設があった可能性が考えられ、これらの時代の生活を研究する上で貴重な資料を提供することとなりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

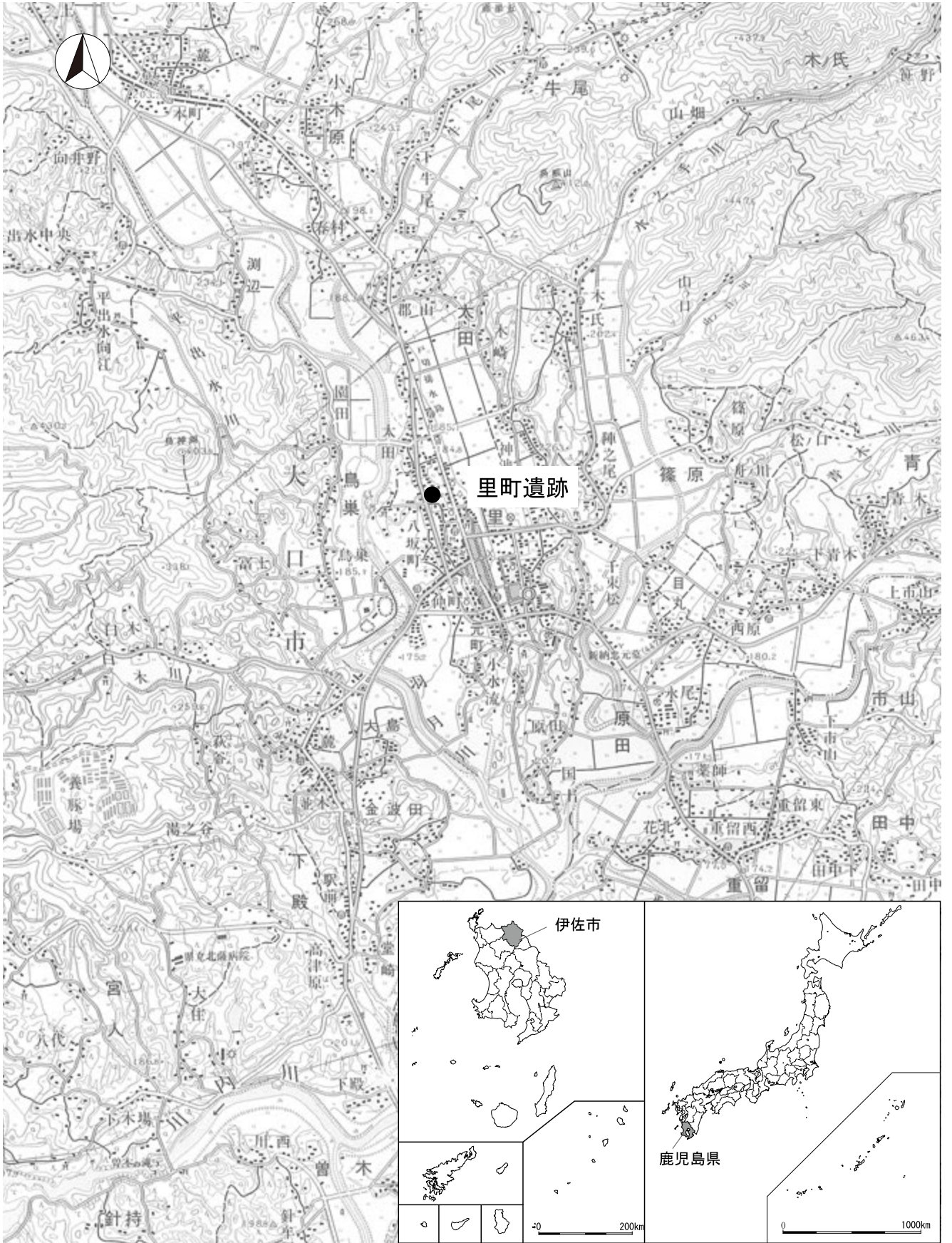
最後に、調査にあたり御協力をいただいた、始良伊佐地域振興局建設部、伊佐市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成29年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 福 山 徳 治

報 告 書 抄 録

ふりがな	さとまちいせき							
書名	里町遺跡							
副書名	国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	191							
編集者名	今村 結記 藤島 伸一郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2017年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さとまち 里町遺跡	かごしまけん 鹿児島県 いさし 伊佐市 おおぐち 大口	46224	224-22	32° 06' 89"	130° 60' 46"	試掘調査 20131015 本調査 20140421 ） 20140626	1,039	国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
里町遺跡	散布地	縄文時代後期～晩期	土坑8基 溝状遺構1条	打製石鏃・上加世田式土器		記銘のある越州窯青磁が出土		
	散布地	古墳時代		成川式土器				
	集落	古代		土師器・緑釉陶器・須恵器・越州窯青磁				
	集落	中世		土坑1基 溝状遺構1条 青磁・白磁・備前焼 滑石製石鍋・洪武通宝				
	散布地	近世		陶磁器				
散布地	近代	陶磁器・ガラス製品						
遺跡の概要	<p>縄文時代から近現代にかけての複合遺跡である。特に古代において8基の土坑と1条の溝状遺構が検出され、遺物は赤色高台を持つものを含む土師器、九州中西部から南西部において生産されたと考えられる須恵器、緑釉陶器や中国から搬入された越州窯青磁などが出土し、古代の流通を考える上で有効な資料が数多く出土した。</p> <p>中でも越州窯系青磁には記銘があり、国内だけではなく中国においても希少な資料であり、大変貴重な発見となった。現在も大口筋の幹線道路に近く、市街地の近隣に位置するこの地が、古来より重要な場所であったと考えられる。菱刈郡域と国内及び中国との交易の歴史を考える上で重要な成果を得ることができた。</p>							



里町遺跡位置図(1:50000)

例言

- 1 本書は国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業に伴う里町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県伊佐市大口に所在する。
- 3 発掘調査は、始良伊佐地域振興局土木建築課（事業主体）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は平成26年度に実施し、整理・報告書作成作業は平成28年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は「STM」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて真北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は南ふじたに委託した。

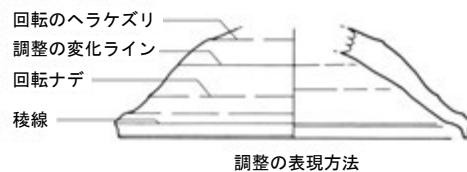
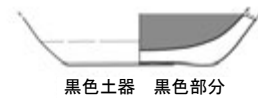
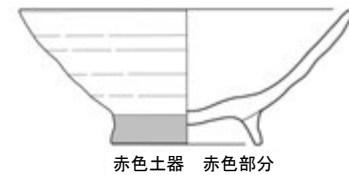
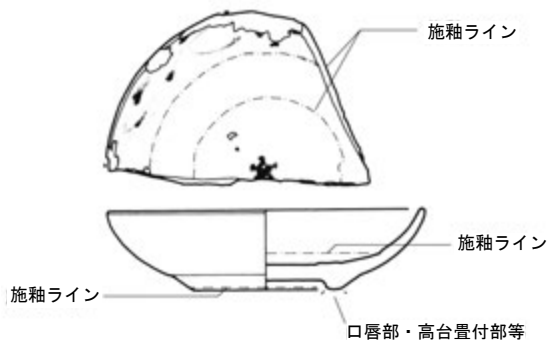
- 11 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは今村結記、藤島伸一郎が整理事業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、今村（結）、藤島が作業員の協力を得て行った。また、近世・近代陶磁器の実測・トレースの一部を榊九州文化財研究所に委託した。
- 13 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘・辻明啓が行った。
- 14 本書に係る胎土分析について、須恵器は鹿児島国際大学の中園聡教授に依頼し、土師器はパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
- 15 本書の編集は今村（結）・藤島が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第Ⅰ・Ⅱ章	藤島・今村（結）
第Ⅲ章	今村（結）・藤島・関明恵
第Ⅳ章	文頭に記載
第Ⅴ章	今村（結）・関
- 16 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。

凡例

- 1 観察表の表記凡例は次のとおりである。
 - (1) 「法量」において、括弧内に記載している数値は復元径の値である。
 - (2) 「胎土」における記号の表現は次のとおりである。

□…微量含む	△…少量含む
○…含む	◎…多量含む
- 2 本書で用いた陶磁器の表現は次のとおりである。



- 4 本書に用いた遺構の略号は次のとおりである。

「SD」	溝状遺構
「SK」	土坑
「SP」	ピット

目 次

序文

報告書抄録

例言・凡例

第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 試掘調査	1
第3節 本調査	1
第4節 整理・報告書作成	2

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第III章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	9
第2節 層序	9
第3節 調査の成果	11

第IV章 自然科学分析

第1節 里町遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	41
第2節 里町遺跡出土土師器の胎土分析	51

第V章 総括

写真図版	63
------	----

挿図目次

里町遺跡位置図(1:50000)	
第1図 周辺地形図及び試掘トレンチ配置図(1:1000)	3
第2図 グリッド配置図及び調査範囲(1:1000)	4
第3図 下層確認トレンチ配置図及びV層上面コンタ図(1:400)	4
第4図 1912年「大口」地形図(1:50000)	5
第5図 周辺遺跡位置図(1:25000)	7
第6図 基本土層柱状図	9
第7図 土層断面図	10
第8図 縄文時代出土遺物	11
第9図 古墳時代出土遺物	12
第10図 古代ピット内出土遺物	13
第11図 古代の遺構配置図	14
第12図 SD2及び出土遺物	15
第13図 SK1・2及び出土遺物	16
第14図 SK3及び出土遺物	17
第15図 SK4・5及び出土遺物	18
第16図 SK6及び出土遺物	19
第17図 SK7及び出土遺物	19
第18図 SK8	20
第19図 SK8出土遺物①	21
第20図 SK8出土遺物②	22
第21図 包含層(Ⅱ層)遺物出土状況	23
第22図 古代出土遺物①	24
第23図 古代出土遺物②	25
第24図 古代出土遺物③	26
第25図 中世の遺構配置図	29
第26図 SD1	30
第27図 SK9	30
第28図 中世の遺構内出土遺物	30
第29図 中世の出土遺物	31
第30図 近世の出土遺物①	32
第31図 近世の出土遺物②	33
第32図 近世の出土遺物③	34
第33図 近世の出土遺物④	35
第34図 近世の出土遺物⑤	36
第35図 近代以降の出土遺物①	37
第36図 近代以降の出土遺物②	38
第37図 近代以降の出土遺物③	40
第38図 時期不明の遺物	40
第39図 分析に用いた須恵器片	44
第40図 K-Ca, Rb-Sr分布図	45
第41図 元素ごとの各産地との比較	46
第42図 主成分分析結果	47
第43図 クラスター分析結果	48・49
第44図 蛍光X線定性スペクトル1	53
第45図 蛍光X線定性スペクトル2	54

第46図 蛍光X線定性スペクトル3	55
第47図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	57
第48図 胎土中の砂の粒径組成, 碎屑物・基質・孔隙の割合, 各粒度階における鉱物	58
第49図 胎土薄片①	59
第50図 胎土薄片②	60
第51図 須恵器甕叩き目当て具痕の分類	61

図版目次

巻頭図版 遺跡遠景(羽月川と鳥神岡を望む)	
写真図版1 遺構検出状況及び基本土層	63
写真図版2 SD2, SK1・2調査状況	64
写真図版3 SK3~6, SK9調査状況	65
写真図版4 SK7・8, SD1調査状況	66
写真図版5 縄文~古代遺物	67
写真図版6 古代出土遺物①	68
写真図版7 古代出土遺物②	69
写真図版8 古代出土遺物③	70
写真図版9 古代出土遺物④	71
写真図版10 古代出土遺物⑤	72
写真図版11 古代出土遺物⑥	73
写真図版12 中世出土遺物	74
写真図版13 近世出土遺物①	75
写真図版14 近世出土遺物②	76
写真図版15 近世・近代出土遺物	77
写真図版16 近代出土遺物	78

表目次

第1表 平成25年度 試掘調査結果	1
第2表 周辺遺跡地名表	8
第3表 縄文・古墳時代土器観察表	12
第4表 縄文・古墳時代石器観察表	12
第5表 古代土製品観察表	26
第6表 古代土師器観察表①	27
第7表 古代土師器観察表②	28
第8表 古代須恵器観察表	28
第9表 古代陶磁器観察表	28
第10表 古代石器観察表	28
第11表 中世遺構内出土遺物観察表	29
第12表 中世~近代遺物観察表①	38
第13表 中世~近代遺物観察表②	39
第14表 時期不明遺物観察表	40
第15表 試料と分析結果一覧	42・43
第16表 分析試料一覧	51
第17表 薄片観察結果	56
第18表 里町遺跡出土須恵器甕分類表	61
第19表 里町遺跡・岡野窯出土須恵器分類結果	61

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業に先立って、対象地域内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて県文化財課が、平成12年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に里町遺跡が所在することが判明した。

平成16年度に里北地区の都市計画事業が予定され、大口市都市計画課・大口市教育委員会（現伊佐市）で協議を行った結果、埋蔵文化財の保護と事業の推進をはかるために、里町遺跡の確認調査を実施した。里町遺跡の確認調査は、平成16年11月10日から11月25日までに実施され、15か所のトレンチ中5か所のトレンチから古代～中世の遺構・遺物を確認した。

里北地区の都市計画事業は平成17年4月に中止が決定したが、国道267号線（木ノ氏バイパス）道路改築事業は予定どおりの実施となった。平成25年10月には、道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において追加の試掘調査を実施することとした。

第 2 節 試掘調査

試掘調査は、県文化財課が埋文センター及び伊佐市教育委員会の協力を得て、平成25年10月15日に実施し、4か所のトレンチ中1か所のトレンチで遺構・遺物が確認され、本調査対象事業は1,039㎡となった。調査体制は以下のとおりである。

調査体制（平成25年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
始良・伊佐地域振興局土木建築課

調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県教育庁文化財課
課長 宇都 法道
調査企画 鹿児島県教育庁文化財課
課長補佐兼企画助成係長 喜平 和隆
主任文化財主事兼
埋蔵文化財係長 前迫 亮一
調査担当 鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事 馬籠 亮道
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員 今村 結記
調査協力者 伊佐市教育委員会社会教育課
事務主査 森田 誠
立会者 始良・伊佐地域振興局伊佐駐在
技術主査 伊地知明義

第 3 節 本調査

平成16年度の大口市の確認調査及び平成25年度の鹿児島県の試掘調査結果を受けて、本調査対象面積を1,039㎡とし、平成26年度に本調査を実施した。調査期間は4月21日（月）から6月26日（木）（実働30日）である。なお、9月10日（水）及び10月7日（火）には、消火槽や水道管が埋設されていた関係で調査できていなかったC～E-5・6区及びE-1区の立会調査を行ったが、遺構は確認されなかった。また、遺物は全てI層中からの出土であった。調査体制は以下のとおりである。

1 調査体制（平成26年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
始良・伊佐地域振興局土木建築課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 井ノ上秀文
調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長 中島 治
調査課長 前迫 亮一

第 1 表 平成25年度 試掘調査結果

トレンチ番号	規模	造成土・旧表土厚	造成土・旧表土下の層	調査最下層	調査深度	調査結果
1 トレンチ	1.5m×4m	40cm	IIIc	V	149cm	遺構・遺物なし
2 トレンチ	1.5m×3m	90cm	IIIc	V	162cm	遺構・遺物なし
3 トレンチ	1.5m×5m	94cm	IIIb	V	148cm	遺構・遺物なし
4 トレンチ	8m×2m	35cm	IIIb	IIIb	44cm	造成土中から古代土師器等が出土 溝状遺構・土坑等の検出

第一調査係長 大久保浩二
調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員 今村 結記
文化財研究員 眞邊 彩
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長 有馬 博文

2 調査の経過

発掘調査の経過については、日誌抄を週ごとに集約して記載する。

4月16日(水)～18日(金)

環境整備, 表土剥ぎ (E-1, D-1～4区)

4月21日(月)～25日(金)

表土剥ぎ (C・D-4・5区), Ib層上面の精査及び掘り下げ(C～E-1～5区)

5月7日(水)～9日(金)

Ib層掘り下げ (C・D-2～4区), SK1調査

5月12日(月)～16日(金)

Ib層掘り下げ, III～V層上面の精査 (C・D-3～5区)

5月19日(月)～23日(金)

III層上面の精査 (C・D-4～5区), 攪乱範囲の掘り下げ (C・D-3～5区), SD1, SK8調査

5月26日(月)～28日(水)

ピットの平面図及び土層断面図作成, SD1, SK8調査

6月2日(月)～6日(水)

攪乱部分の掘り下げ及び測量, 5トレンチ掘り下げ, SK2～8及びSD2調査, ピット調査, 空撮準備

6月9日(月)～13日(金)

空撮, SD2, SK3・5・6・7・8調査, 攪乱部分測量, 6・7トレンチ掘り下げ, 表土剥ぎ (C・D-1～3区)
6月16日(月)～20日(金)

III～V層上面の精査 (C・D-1～3区), 表土剥ぎ (C・D-2・3区) D-1～5区ピット調査, SK3・4・7及びSD2調査, C-4・5区II層掘り下げ, 遺物取り上げ, C-3区精査, 8～10トレンチ掘り下げ, 攪乱範囲・調査区等の測量

6月23日(月)～26日(木)

8・9トレンチ土層断面図作成, コンタ図作成, 埋め戻し

9月10日(水)

C-5区, D-5・6区の現道下調査

10月7日(火)

E-1区の仕切り弁・消火槽等撤去の立ち会い調査

第4節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成28年4月13日～平成28年12月22日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

1 作成体制(平成28年度)

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
始良・伊佐地域振興局土木建築課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 福山 徳治
調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼調査課長 前迫 亮一
総務課長 高田 浩
第一調査係長 大久保浩二
作成担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事 藤島伸一郎
文化財研究員 今村 結記
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長 脇野 幸一
調査指導 鹿児島国際大学
国際文化学部教授 中園 聡
ラ・サール学園
教 諭 永山 修一

2 整理作業の経過

整理作業の経過については、月ごとに集約して記載する。

4月 遺物水洗い・注記

5月 遺物注記・接合, 土層断面図作成, 陶磁器実測委託, 原稿執筆

6月 遺物接合・実測, 遺構図面チェック及びトレース, 原稿執筆

7月 遺物実測・拓本・トレース, 須恵器胎土分析委託, 原稿執筆, 整理指導(鹿児島国際大学中園教授)

8月 遺物実測・拓本・トレース, 土師器胎土分析委託, 原稿執筆, 整理指導(ラ・サール学園永山教諭)

9月 レイアウト, 写真編集, 原稿執筆

10月 遺物・遺構レイアウト, 写真編集, 原稿執筆

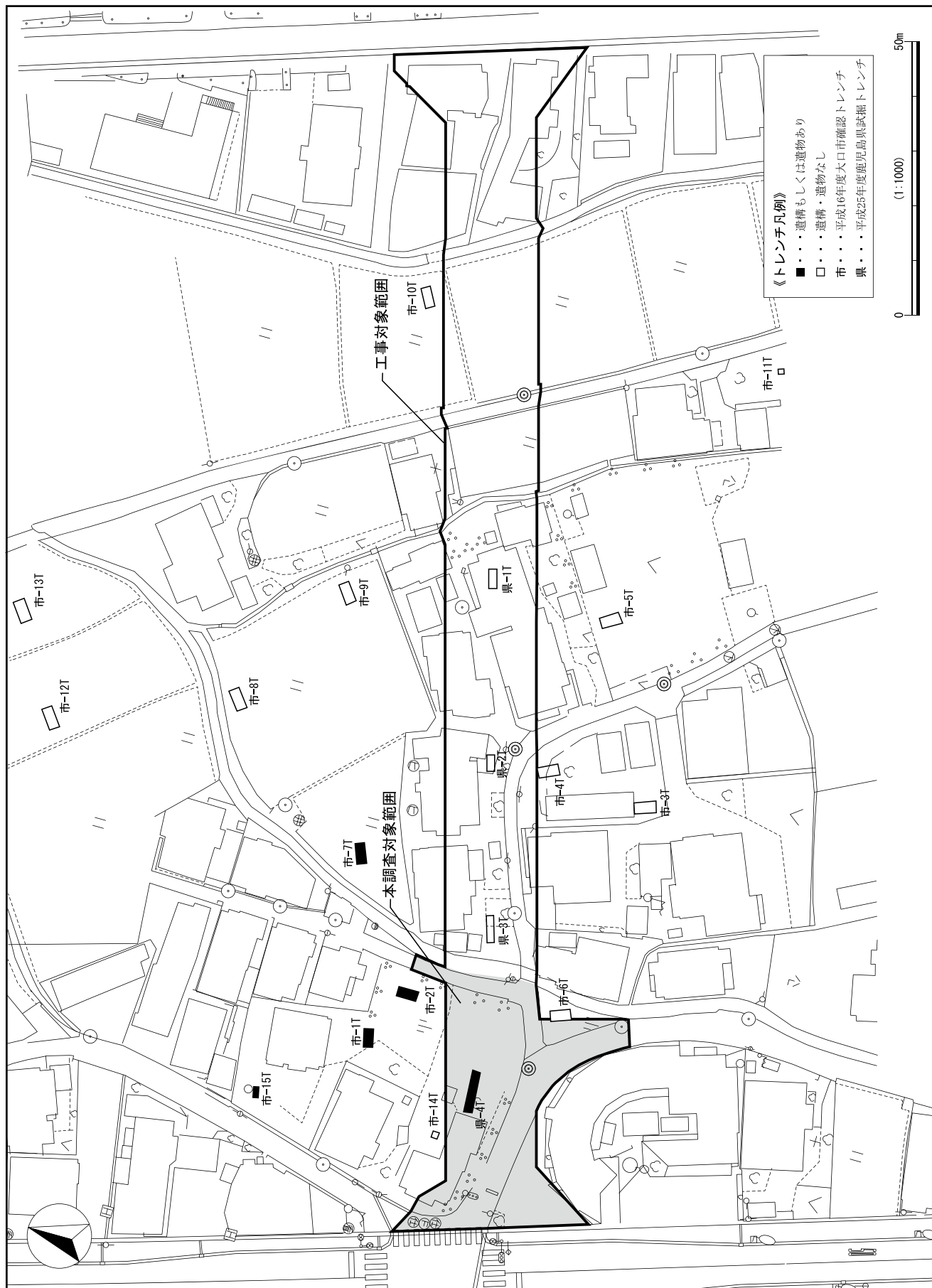
11月 原稿修正, 遺物レイアウト, 実測図修正, 観察表作成, 写真撮影

12月 原稿修正, レイアウト修正, 入札

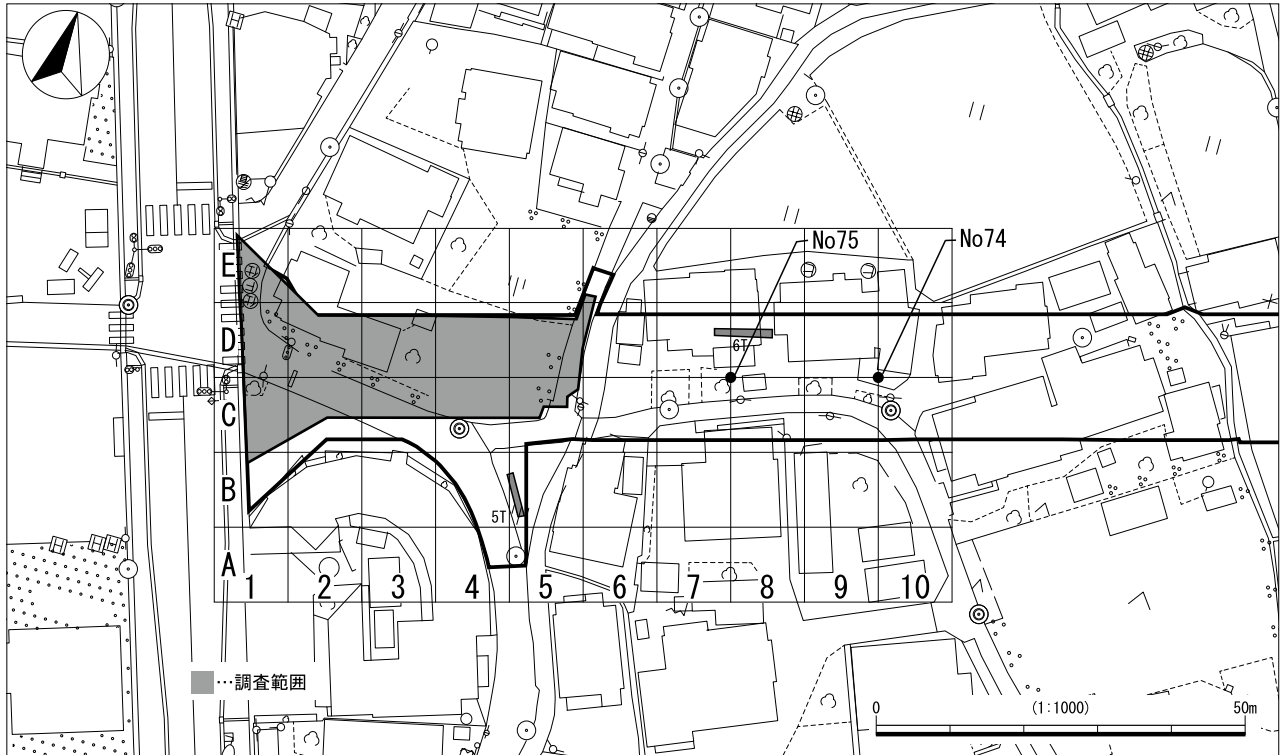
1月 原稿チェック及び修正, 遺物収納

2月 報告書印刷, 写真等片付け

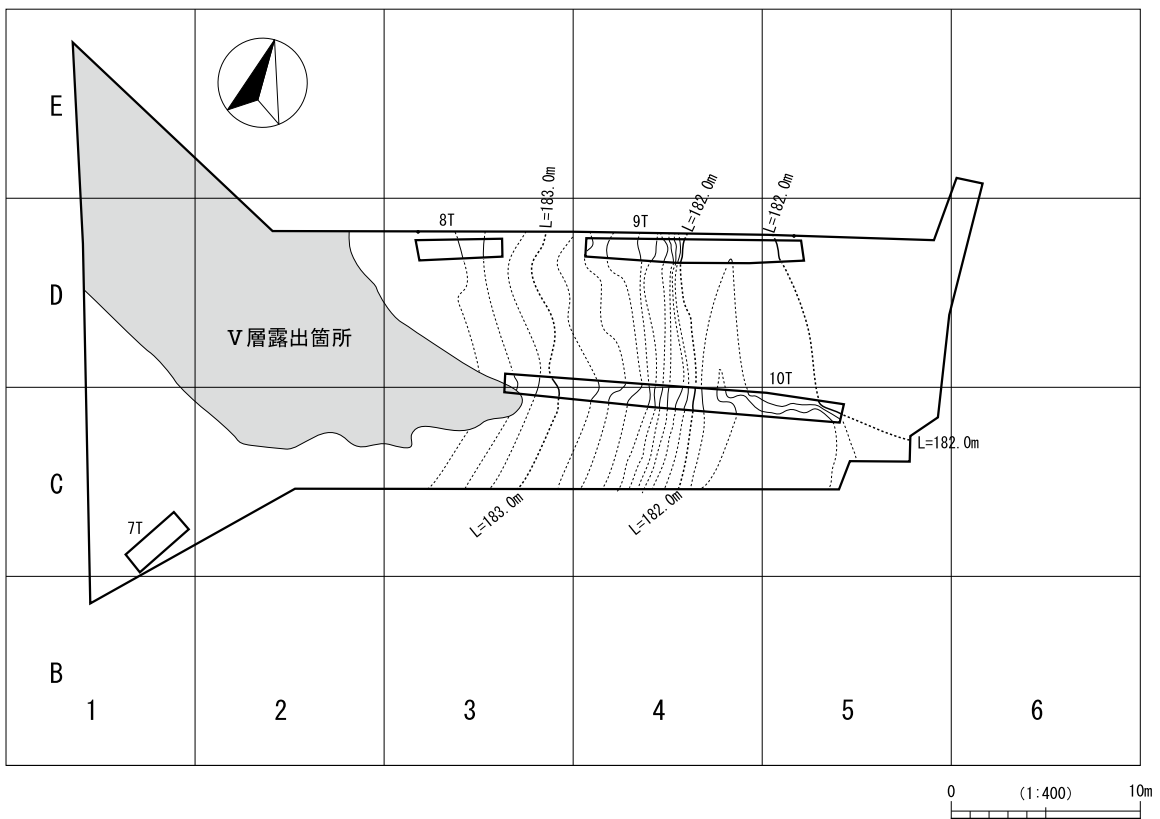
3月 報告書納品



第1図 周辺地形図及び試掘トレンチ配置図 (1:1000)



第2図 グリッド配置図及び調査範囲(1:1000)



第3図 下層確認トレンチ配置図及びV層上面コンタ図(1:400)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

里町遺跡は鹿児島県伊佐市大口里に所在する。遺跡の所在する伊佐市は、面積は492km²で、県内の北部に位置し、熊本県水俣市や人吉市、宮崎県えびの市に接している。鹿児島県で唯一海に面していない市で、周囲を九州山系の山々に囲まれた大口盆地がその中心となっている。大口盆地の南部を東西に川内川が流れ、それに向かう支流が多数みられ、その河岸段丘上に多くの遺跡が立地しており、里町遺跡もその一つである。

里町遺跡は標高約180mの羽月川左岸の沖積地に位置する。羽月川は川内川の支流の1つで、遺跡の南約5.5kmの地点で川内川に合流する。遺跡は伊佐市中心地の元町地区に隣接しており、周辺には宅地が広がり、河川に近い箇所は水田となっている。

1912(明治45)年の「大口」5万分の1地形図(第4図)において遺跡の周辺をみると、南北に直線状になる幹線道路沿いにあり、東西は水田が広がっている。沖積地の南側は市街地となっており、中心地に近い幹線道路沿いに位置していることがわかる。

第2節 歴史的環境

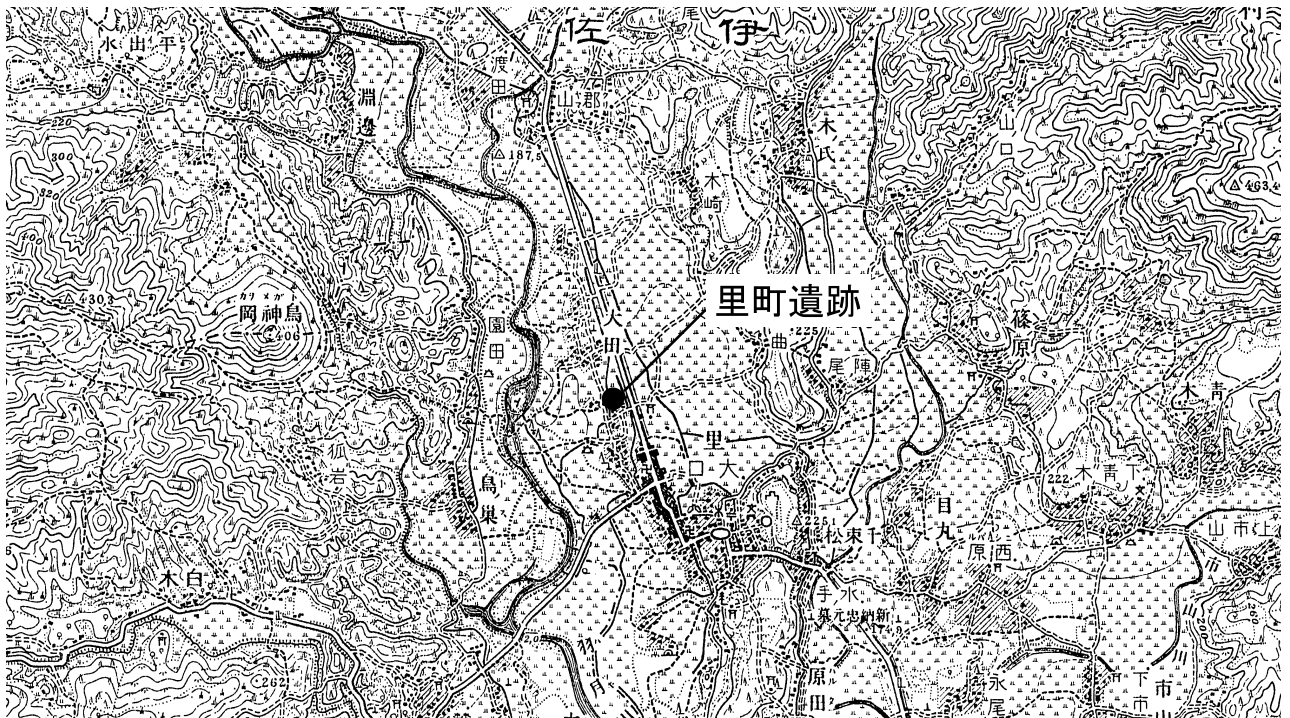
伊佐市においては、旧大口市と旧菱刈町を合わせて267か所が「周知の遺跡」として登録されている。以下に、時代ごとの概要及び交通について述べる。

旧石器時代の遺跡は、ナイフ形石器や黒曜石の剥片類

を中心とする7万点を超える多量の遺物が出土した小原野遺跡、黒曜石の原産地遺跡である日東遺跡、ナイフ形石器・剥片尖頭器・細石器が出土した郡山遺跡、旧石器時代末期の細石器文化期に属する遺物が多く出土した新開原遺跡などがある。特徴として、黒曜石の産出地周辺の山地で発見される遺跡が多い。

縄文時代の遺跡について、草創期の遺跡は市内ではまだ見つかっていない。早期の遺跡は多く、土器の標式遺跡となっている手向山遺跡や塞ノ神遺跡のほか、松尾山遺跡・小原野遺跡・勝毛遺跡などがある。前期の遺跡は、曾畑式土器分類の第三類にあたる、以前は日勝山式土器と呼ばれる土器の標式遺跡であった日勝山遺跡や辻町遺跡・瀬ノ上遺跡がある。中期の遺跡は並木式土器の標式遺跡である並木遺跡や島巡遺跡、勝毛遺跡がある。後期の遺跡は、西平式土器が多数出土した並木口遺跡や大牟田遺跡がある。晩期の遺跡は、辻町遺跡や島巡遺跡、上尾下遺跡、新開原遺跡などがあり、黒川式土器などが出土している。また、下殿瀬ノ上遺跡では、埋設土器が検出されている。

弥生時代の遺跡については、重弧文が特徴の免田式土器が出土した大住遺跡・焼山遺跡・浜場遺跡があり、本遺跡でも昭和9年に採集されたことが報告されている。また石包丁や磨製石鎌・抉入石斧などが下青木遺跡や大住遺跡で出土している。下鶴遺跡では県内の弥生時代の武器形青銅器で2例目となる銅戈が出土した。



第4図 1912年「大口」地形図(1:50000)

古墳時代の遺跡について、この地域では高塚古墳が見られず、南九州独自の墓制である地下式板石積石室墓・地下式横穴墓が多数発見されており、2つの墓制が重なる地域である。多数見られる例として、約140基の地下式板石積石室墓と10基の地下式横穴墓が検出された瀬ノ上・平田遺跡、34基の地下式板石積石室墓が確認されて市の史跡公園となっている大住遺跡、90基以上の地下式板石積石室墓が現地保存されている焼山遺跡がある。特に本遺跡に近い墓として、東方の約1km離れた丘陵南端にあり、それぞれ地下式横穴墓1・2基が検出されている陣之尾遺跡・成就寺遺跡、本遺跡の北西側約1kmに位置し、地下式板石積石室墓7基が検出されている大田地下式横穴がある。また住居跡が島巡遺跡・米置遺跡・山下遺跡から1軒ずつ検出されている。特に下鶴遺跡では堅穴住居跡が93軒と多数出土している。古墳時代の遺跡は多く、現在も稲作が大変盛んな地域であることから、この時代より農業が盛んで、多くの人々が居住していたと考えられる。

古代について、奈良時代の歴史を記録した『続日本紀』によると、713(和銅6)年4月に「日向国の4郡を割いて大隅国を置く」とあり、この年に大隅国が成立した。また、同書の755(天平勝宝7)年5月の条に、大隅国菱刈村の浮浪人930人余りのものが郡家(郡の役所)を建てることを要求し、朝廷はこれを許可したとの記録があり、この年に菱刈郡が設けられている。10世紀前半に作られた『倭名類聚抄』には、平安時代の菱刈郡は「比志加里」と記され、羽野・亡野(出野)・大水・菱刈の4郷からなるとされており、現在の里町遺跡周辺は大水郷の一部と推測される。このように、古代において律令体制下に組み込まれていったことがわかる。この時期の遺跡として、島巡遺跡や永峰遺跡があり、平安時代頃の土師器・須恵器の甕等が出土している。また津栗野遺跡・岡野遺跡・大迫遺跡では、人形や馬形の形代を須恵器などに入れて埋納している。また市内各地から火葬墓に伴う蔵骨器が見つかっており、この時代から仏教文化が浸透していたことが推測される。この北薩地域では、土師器の高台に体部と異なる赤色粘土を用いた土師器が多数出土しており、その代表例として大峰遺跡がある。また、県内でも例の少ないこの時期の窯跡として、4基の須恵器窯跡をもつ岡野古窯跡がある。本遺跡西側の河岸段丘下には黒岩遺跡があり、須恵器や土師器など、里町遺跡とほぼ共通する遺物が出土している。

中世について、菱刈郡は旧大口市にあたる牛屎院と、旧菱刈町にあたる太良院の両院となり、牛屎院は牛屎氏に、太良院は菱刈氏に支配される。このころ、薩摩国の守護兼地頭職として、島津氏が入国してくる。その後、牛屎院を長く支配していた牛屎氏は、菱刈氏・相良氏に追われて飯野(現在のえびの市)に移り、牛山城(大口

城)は菱刈氏・相良氏の根拠地として島津氏と勢力を争い、その城主も変転を遂げる。戦国時代に入ると島津氏が優勢となり、大口城を攻勢し、1569(永禄12)年には島津氏に対し、菱刈氏・相良氏は和議降伏する。その年、牛屎院の地頭職に新納忠元が任命され、以後、近世末まで島津氏による統治が行われる。中世の遺跡として、新平田遺跡や平泉城跡があり、新平田遺跡では、32棟以上の掘立柱建物跡、7基の堅穴建物跡と1500個以上の柱穴・土坑が確認されており、遺物としては土師器が主体を占め、青磁や白磁などの輸入陶磁器や樺万丈窯産の須恵器に類似した甕、滑石製石鍋などが出土している。平泉城跡では、標高240mの3か所の曲輪を中心に、やや低い6か所の曲輪からなる、多郭式中世山城の形態をもつ。遺物としては青磁や白磁の碗・皿など、輸入陶磁器が多く出土している。

中世末から近世にかけての遺構として、関白陣跡があり、豊臣秀吉が大口地頭の新納忠元を引見した陣営の場所と伝えられており、全長3kmを超える土塁・石塁・溝が発見されている。

近世について、江戸時代の1636(寛永13)年の入来家文書によると、大口地方の人口は、大口郷・山野郷・羽月郷・曾木郷をあわせて7300人ほどであったと言われる。近世の遺跡として、広徳寺古墓と王城古墓があり、中から人骨と副葬品の古銭が出土している。

近代の遺構として、曾木発電所遺構がある。この発電所は、1900(明治42)年に建設されたもので、総面積2207.7㎡の一部3階建てと2階建てのレンガ造りの建造物であり、現在は鶴田ダムの湖底に沈んでおり、夏場などに姿を現す。

交通網をみると、陸上交通では主要街道の一つである大口筋(始良市加治木町・霧島市横川町・伊佐市を経て水俣を通る)が近世より通っており、本遺跡はその道路沿いにあたる。中世以前の交通路に関する明確な記録は見られない。

参考文献

- 大口市郷土誌編さん委員会 1981 『大口市郷土誌 上巻』
- 大口市郷土誌編さん委員会 2006 『大口市の埋蔵文化財』
- 鹿児島県大口市教育委員会 2006 『関白陣跡 里町遺跡』
- 伊佐市教育委員会 2010 『下殿瀬ノ上遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『陣之尾遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 『下鶴遺跡』
- 平凡社 1998 『日本歴史地名大系第47巻 鹿児島県の地名』
- 学生社 1936 『考古学雑誌第26巻第6号』



第5図 周辺遺跡位置図(1:25000)

第2表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	地形	所在地	時代	主な遺構・遺物	備考
1	小城	台地	伊佐市大口牛尾小城	縄文・古墳	土器, 黒曜石	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
2	春村地下式横穴	台地	伊佐市大口小木原字春村	古墳	地下式横穴墓, 鉄剣, 鉄鏃	『鹿児島県文化財調査報告書』(4)
3	牛尾小学校	丘陵	伊佐市大口牛尾・牛尾小学校	縄文(早～後)	押型文, 塞ノ神式, 阿高式, 出水式	『鹿児島県考古学会紀要』1
4	木崎原	台地	伊佐市大口牛尾木崎原	縄文	土器, 黒曜石	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
5	木崎原	丘陵	伊佐市大口牛尾木崎原	縄文(早・前)	押型文, 轟式, 塞ノ神式, 石匙, 石斧, 石鏃	『考古学雑誌』22-10
6	平泉城跡	台地	伊佐市大口平出水字城脇	中世	空堀, 井戸, 曲輪, 陶磁器, 古銭	『平泉城跡』大口市埋文報(1) 『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報(43)
7	馬場A	沖積地	伊佐市大口平出水馬場	縄文～古墳, 中世, 近世	掘立柱建物跡, 青磁, 土師器, 須恵器	『馬場A遺跡・馬場B遺跡・辻町遺跡』大口市埋文報(13) 『馬場A遺跡・辻町1遺跡・辻町2遺跡』大口市埋文報(15)
8	王城跡	丘陵	伊佐市大口平出水王城	中世, 近世	人骨, 古銭, 水晶玉, 五輪塔片	『広徳寺跡古墳・王城古墳』大口市埋文報(4) 『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報(43)
9	淵辺城跡	丘陵	伊佐市大口篠原陣ノ尾	中世	空堀	『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報(43)
10	郡山城跡	台地	伊佐市大口郡山	旧石器, 縄文(早・後), 中世	ナイフ形石器, 細石器, 塞ノ神式, 土師器	『郡山遺跡』大口市埋文報(14)
11	大儀司	舌状台地	伊佐市大口大田大儀司	縄文	土器, 黒曜石	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
12	軍神ノ上	台地	伊佐市大口大田軍神ノ上	縄文	土器, 黒曜石	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
13	上松B	平地	伊佐市大口鳥巢上松	古墳		平成2年分布調査
14	上松A	平地	伊佐市大口鳥巢上松	古墳		平成2年分布調査
15	鳥巢城跡	丘陵	伊佐市大口鳥巢	中世		『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報(43)
16	松原神社	丘陵	伊佐市大口羽月鳥巢松原神社	縄文	石匙, 石鏃, 土器片	
17	黒岩	河岸段丘	伊佐市大口大田黒岩	中世	土師器, 須恵器	『黒岩遺跡他』大口市埋文報(25)
18	大田地下式横穴	平地	伊佐市大口大田横手町	古墳	地下式板石積石室墓, 鉄鏃	『考古学雑誌』26-6
19	里町	沖積地	伊佐市大口里町	縄文(後・晩), 弥生(後期～終末), 古墳, 古代～近代	石鏃, 重弧文土器, 土師器, 須恵器, 青磁, 白磁, 染付	『史観』第7冊 『関白陣跡 里町遺跡』大口市埋文報(26) 本報告書
20	成就寺地下式横穴	台地	伊佐市大口里成就寺	古墳	地下式横穴墓, 鉄剣, 鉄鏃, 人骨	『鹿児島県文化財調査報告書』(4)
21	陣之尾城跡	舌状丘陵	伊佐市大口篠原陣之尾	縄文(早・晩), 古墳, 中世, 近世	集石, 地下式横穴墓, 押型文, 平椀式, 中原式	『陣之尾遺跡』県セ発掘報(134)
22	芳ヶ迫	平地	伊佐市大口木ノ氏芳ヶ迫	古墳	土器片	平成13年分布調査
23	松木原	丘陵	伊佐市大口羽月鳥巢松下原豆付	縄文(早・前), 古墳	押型文, 轟式, 石鏃, 須恵器	『古代文化』2-2
24	四郎兵丘	台地	伊佐市大口羽月鳥巢四郎兵丘	縄文(早・中)	押型文, 塞ノ神式, 阿高式	『古代文化』2-2, 8-6
25	手向山	丘陵	伊佐市大口羽月鳥巢手向山	縄文(早・前)	押型文, 轟式	『考古学雑誌』22-10
26	牛山城跡	丘陵	伊佐市大口里上ノ馬場	中世～近世初期	空堀, 土塁, 石塁	『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報(43)
27	殿後	微高地	伊佐市大口白木殿後	縄文, 中世	土器, 黒曜石, 青磁, 染付	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
28	萩谷	舌状台地	伊佐市大口羽月萩谷	縄文, 古墳	土器, 黒曜石	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VII)』県埋文報(73)
29	羽月城跡	丘陵	伊佐市大口下殿野頭	中世	空堀	別名 藤尾城, 高山城
30	徳ヶ島	平地	伊佐市大口大島字徳ヶ島	古墳	土器片	平成元年分布調査
31	後牟田	平地	伊佐市大口大島字後牟田	古墳		平成元年分布調査
32	長ミトイ	平地	伊佐市大口大島字長ミトイ	古墳	土器片	平成元年分布調査
33	提原	平地	伊佐市大口羽月下殿提原	縄文(早・前)	塞ノ神式, 石鏃, 押型文	『考古学雑誌』8-6
34	原田	平地	伊佐市大口原田	古墳		平成2年分布調査
35	丸尾山	台地	伊佐市大口原田丸尾山	縄文	土器片	平成12年分布調査
36	忠元神社附近	台地	伊佐市大口原田忠元丘	弥生・古墳	弥生土器, 勾玉, 管玉, 地下式横穴墓, 須恵器, 土師器, 霰玉	『黒岩遺跡他』大口市埋文報(25) 『考古学雑誌』22-10
37	諏訪野地下式横穴	台地	伊佐市大口里諏訪山	古墳	地下式横穴墓, 鉄剣, 鉄鏃, 人骨	『考古学雑誌』26-6 『諏訪野地下式土壇3号』大口市埋文報(2) 『諏訪野地下式土壇3号』大口市埋文報(3)
38	国ノ十		伊佐市			
39	引田	台地	伊佐市大口金汲田字引田	古墳	土器片	

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査区の設定は、木ノ氏バイパス建設用センター杭である「No.74」(世界測地系 X=-103924.055, Y=-37148.430)と「No.75」(同X=-103929.428, Y=-37167.695)をそれぞれ任意の座標 (No.74 X=30, Y=90) (No.75 X=30, Y=70)とし、10m間隔のグリッドを設定した(第2図)。

調査の方法は、重機により表土及び造成土を除去した後、人力による発掘を進めた。調査区の大半は削平を受け、遺物包含層(Ⅱ層)は調査区中央南側にわずかに残存している状態であった。表土及び造成土の遺物については、グリッドごとを一括で取り上げた。包含層中の遺物の取り上げは光波測量で行った。

Ⅱ層下位の遺物包含層の有無を確認するために7~10Tを設定し掘り下げを行ったが、包含層及び遺物は確認されなかった。なお、平成25年度に行われた確認調査を補足する目的で5・6Tを設定して調査を行ったが、遺構・遺物は確認されず、確認調査で設定した本調査範囲の妥当性を追認する結果となった。また、本調査範囲とした歩道建設部分については、掘削面と遺構・遺物間に概ね30cm以上の保護層が確保されるため、本調査範囲から除外した。

2 遺構の検出と認定

表土及び造成土を除去した面で精査を行い、遺構の検出を行った。本遺跡では古代~中世、近・現代の遺構が混在した状況で検出された。

遺構の認定については、出土遺物と埋土から、灰白色

粘質土のものを攪乱(近・現代)と判断し、掘り下げ後に攪乱範囲の測量を行った。それ以外の埋土の遺構については、検出状況の写真撮影後に調査を行い、埋土土層や出土遺物から近世以前の遺構かどうかの判断を行った。認定された遺構は、種類ごとに略号を付け、検出順に番号を付けて遺構名称として用いた。遺構の略号については凡例に記載のとおりである。遺構内遺物の取り上げについては、床面直上の遺物は番号を付け、埋土中の遺物は一括で取り上げを行った。

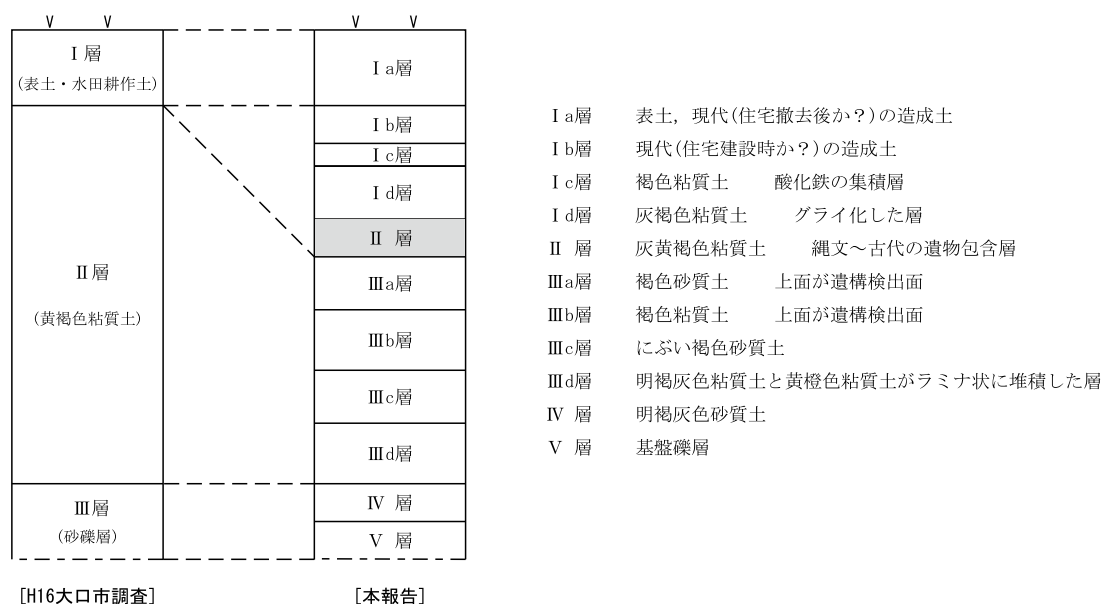
3 整理作業の方法

注記は、注記記号「STM」を頭に、包含層資料は続けて「区」、「層」、「遺物番号」の順に記入した。遺構内資料は注記記号の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し、その後に遺物番号を記入した。

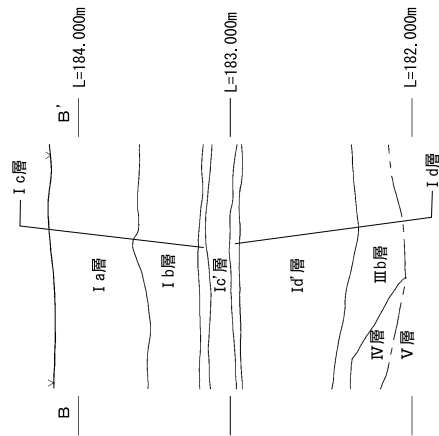
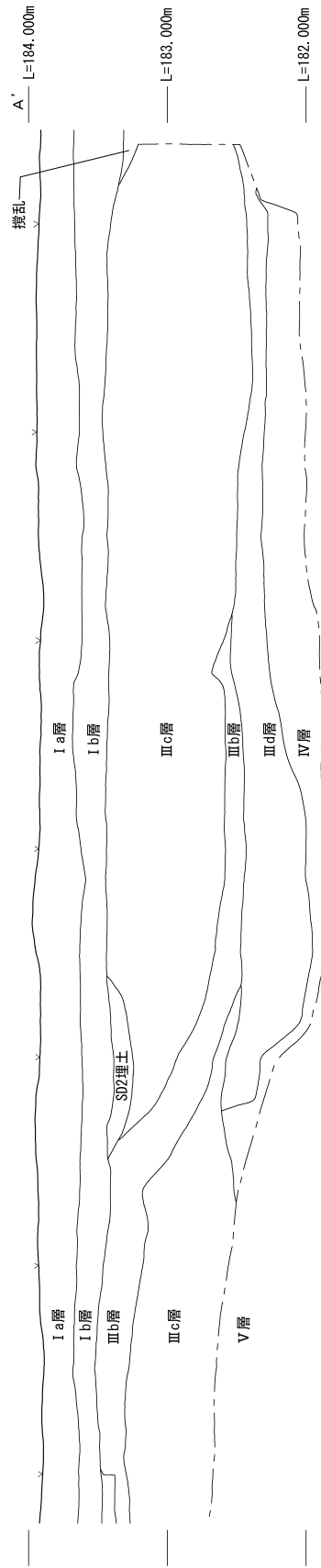
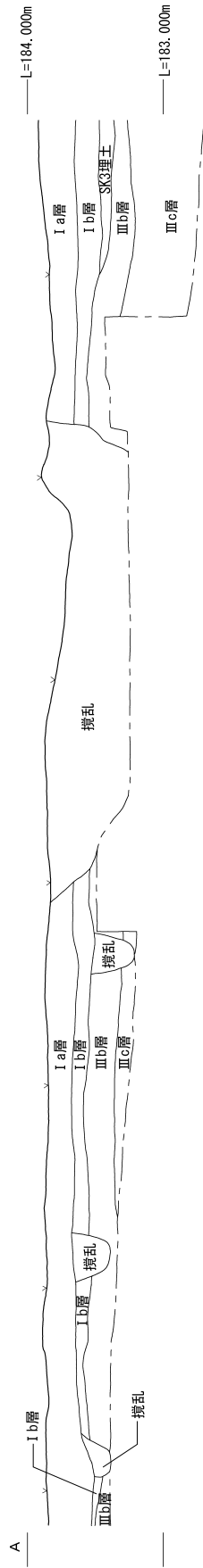
遺物の接合は、陶磁器や土師器、須恵器、土器などを区分し、接合を進めた。ただし、割れ口が摩滅し接合できないものも多数みられた。

第2節 層序

里町遺跡の層序は第6図のとおりである。Ⅰ層は表土、現代の造成土及び旧水田耕作土である。a~d層に細分可能である。Ⅱ層は縄文時代~古代の遺物包含層である。Ⅲ層はおおよそ100cmほど堆積しており、a~d層に細分可能である。Ⅳ層は明褐色の砂質土、Ⅴ層は羽月川の河川堆積物と思われる基盤礫層である。Ⅴ層上面での旧地形は、西側から東側へ下る地形であったことが推測される(第3図)。

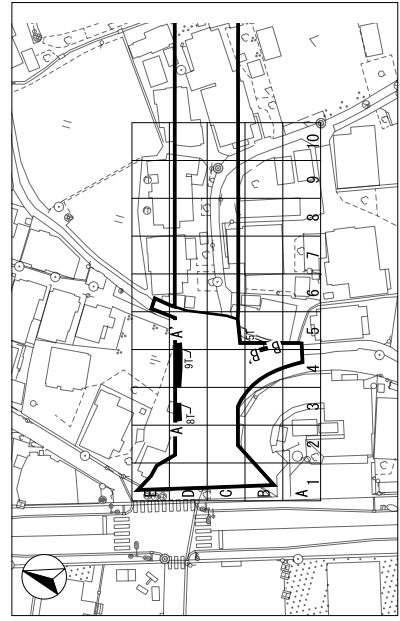


第6図 基本土層柱状図



※ 5トレンチではIc層とId層が細分できたため、Ic'層とI d'層を設定した。

I c'層・・・褐灰色粘質土 (7.5VR5/1)
 I d'層・・・灰オリーブ粘質土 (7.5V6/2)
 I d層に比べ粒子が細かい。



第7図 土層断面図

第3節 調査の成果

1 縄文時代の調査

(1) 調査の概要

遺構はみられず、遺物については、Ⅱ層や造成土から土器17点、石器10点が出土した。うち土器2点、石器4点を図化した。土器は色調や胎土から、後・晩期のものと考えられる。

(2) 遺物 (第8図)

1は深鉢の口縁部から胴部の一部であり、くの字に屈曲する。屈曲部の稜は明瞭である。2は後期と思われる深鉢の胴部の一部であり、内面に横方向の貝殻条痕がみられる。

3～4は石鏃である。3は小型で刃部が直線状でなくやや膨らみをもち、抉り部分は見られない。4は先端部分を欠損しているが、二等辺三角形の形状であったと考えられる。表面は風化し、ぬめりのある黒色を呈す。抉り部分は浅い。5は石鏃の未製品か二次加工のある剥片であり、微細な剥離はあるが、整形された痕跡はない。6は器種不明であるが、石匙に近い形状であり、側面部を丁寧に加工している。7は敲石で、側面に剥離跡が残る。

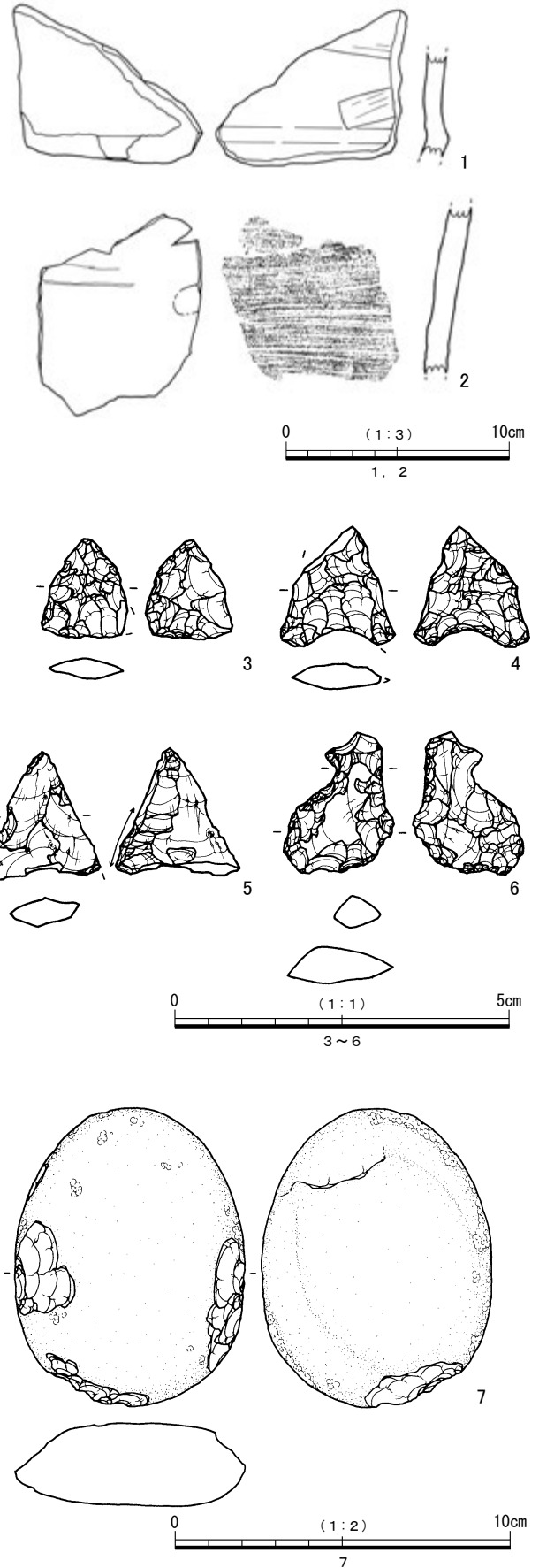
2 古墳時代の調査

(1) 調査の概要

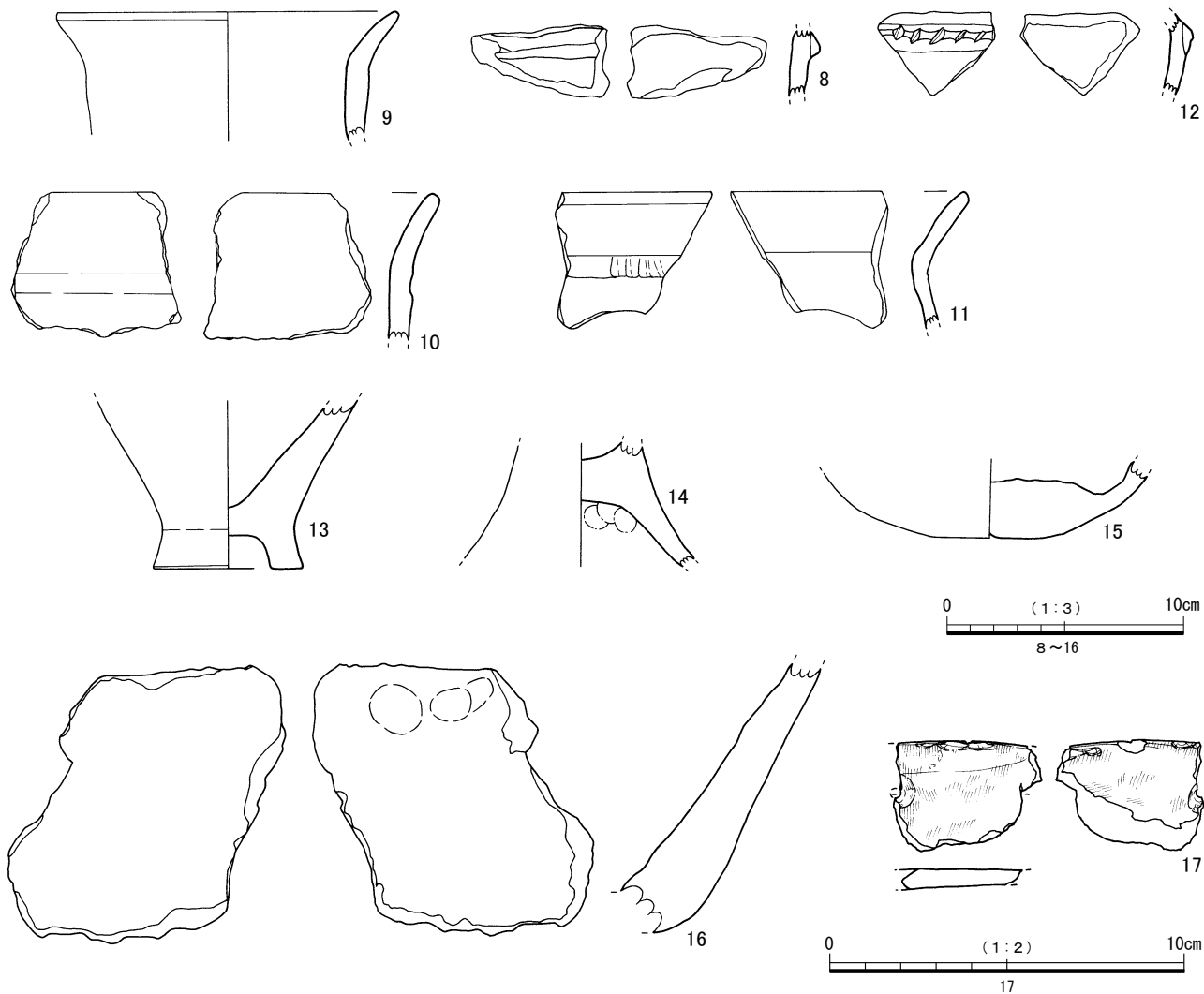
遺構はなく、遺物はIb・Ⅱ層などから土器37点、石器1点が出土し、うち土器9点、石器1点を図化した。

(2) 遺物 (第9図)

8は甕か壺の胴部で、断面三角形の突帯を貼り付けており、外面が黒色を帯び、摩耗している。9～11は甕の口縁部から胴部である。9は外面はヨコナデでやや風化している。内部が黒色のサンドイッチ状の破断面である。10はくの字状にゆるやかに外反し、はっきりとした稜はみられない。外面の屈曲部に横ナデ痕跡がみられる。11はくの字状に屈折し外反する。外面の胴部との境目には縦方向の刷毛目の痕跡が残る。12は甕か壺の胴部であり、やや角度の広い断面三角形の突帯に約8mmの間隔で斜めに刻み目を入れている。外面は灰白色で内部はやや黒色を帯びた浅黄橙色である。13は甕の脚台から胴部の一部であり、内面が褐灰色で外面は橙色であるが上部に黒色部分も見られる。脚台は短く、床との接地面は平坦となる。14は甕の底部から脚部であり、内外面は赤橙色であるが、底部内面は薄い黒色部分もみられる。脚部内面に回転させながら指で押さえた跡が観察される。15は壺の底部である。丸底で、内面に輪積み痕と思われる痕跡が残っている。16は壺の底部の裾から胴部で、内面は灰白色が強く、外面と明瞭な差がある。表面の風化が激しい。17は石包丁の一部で、穿孔部分は半分のみ残存し、刃部は全て欠損している。正面・裏面は大変滑らかで、研磨されたと考えられる。



第8図 縄文時代出土遺物



第9図 古墳時代出土遺物

第3表 縄文・古墳時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区遺構名	層位	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		胎土			備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	小礫	
8	1	一括	D-2	I b	深鉢	胴部	-	-	-	ミガキ	ヨコナデ	黒褐5YR3/1	にぶい橙5YR7/4	◎	□	□	
	2	一括	C-5	カクラン	深鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	赤灰2.5YR4/1	赤黒2.5YR2/1	△	△	◎	
9	8	一括	C-4	II	壺・壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	褐灰10YR5/1	橙5YR6/6	△	□	◎	突帯
	9	一括	C-5	カクラン	壺	口縁～胴部	14.0	-	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR5/3	にぶい橙7.5YR7/3	□	○	◎	
	10	63	C-5	II	壺	口縁～胴部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	赤褐5YR4/6	にぶい橙5YR6/4	□		○	
	11	一括	C-4	II	壺	口縁～胴部	-	-	-	ハケメ	ナデ	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4	△	△	○	
	12	257	C-5	II	壺・壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白7.5YR8/1	浅黄橙7.5YR8/3	△	△	◎	突帯
	13	17	C-4	II	壺	胴～脚部	-	(6.0)	-	ナデ	指押さえ	橙7.5YR7/3	褐灰7.5YR4/1	○		○	
	14	一括	SK4	埋土	壺	底～脚部	-	-	-	ナデ	指押さえ	赤橙10R6/6	赤橙10R6/6	△	△	○	
	15	一括	C-4	II	壺	底部	-	4.5	-	ナデ	ナデ, 指押さえ	にぶい橙2.5YR6/4	橙2.5YR6/8	△	□	○	
16	一括	C-4	II	壺	胴部	-	-	-	ナデ	指押さえ	橙5YR7/6	灰白5YR8/1	△	△	◎		

第4表 縄文・古墳時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区遺構名	層位	器種	石材	法量				備考
							最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
8	3	一括	C-5	カクラン	石鏃	頁岩	1.55	1.34	0.33	0.54	
	4	一括	C-4	I b	石鏃	黒曜石 (不明)	1.85	1.75	0.40	1.04	
	5	197	C-4	II	石鏃・剥片	黒曜石 (日東)	2.0	1.90	0.40	1.11	
	6	一括	D-4	カクラン	異形石器	チャート	2.22	1.69	0.56	1.90	
	7	一括	SD1	埋土	敲石	安山岩	8.92	6.88	2.44	205.0	中世の溝状遺構内出土
9	17	一括	D-5	I b	石包丁	粘板岩	3.05	4.02	0.56	9.15	

3 古代の調査

(1) 調査の概要

古代の遺構は、溝状遺構1条、土坑8基、ピット30基が検出された。ピットについては古代～中世に該当するもので、それぞれの時期に特定ができなかった12基についても古代の遺構配置図(第11図)に掲載した。

古代の遺物は、包含層であるⅡ層からの出土が少なく、Ⅰ層や攪乱埋土から出土したものも掲載した。

(2) 遺構

ア ピット (第10図)

古代の遺物が出土したピットは、SP1～4, 8, 10, 11, 13, 15, 17～21, 23～25, 27～31, 33, 34, 36～41の30基である。掘立柱建物跡の抽出はできなかった。

ピット内から176点の遺物が出土した。内、土師器5点、須恵器2点、土製品2点、石器1点を図化した。18は、SP1から出土した内黒土師器埴である。19・20はSP2から出土した土錘である。21～23はSP3から出土した。21は土師器坏の底部で、円盤状に突出する。22は土師器甕の口縁部である。23は砥石である。正面中央は使用による凹みが確認できる。24はSP27から出土した須恵器甕の胴部である。25はSP33から出土した土師器坏もしくは埴の口縁部である。26・27はSP39から出土した。26は土師器甕の口縁部である。27は須恵器甕の胴部である。

イ 溝状遺構 SD2 (第12図)

D3区, D4区で検出された。北東-南西方向を走行する。断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は長さ

13m, 最大幅0.76m, 検出面からの深さは最大で0.48mである。市が行った確認調査の際, 2トレンチで検出された溝状遺構と同一遺構の可能性はある。床面のレベルは, 各地点ほぼ同レベルである。埋土は, 自然堆積で, 砂粒の堆積や硬化面は認められなかった。そのため, 用途は水路や道路とは考えにくい。可能性としては, 区画溝の用途が考えられる。SD1と切り合い関係にあり, 本遺構はSD1より古い。

本遺構内から570点の遺物が出土した。内, 土師器4点, 須恵器3点, 土製品1点を図化した。28～31は土師器である。28は甕の口縁部である。29は埴である。30は坏もしくは埴の口縁部である。31は坏の底部で, 円盤状に突出する。32～34は須恵器である。32・33は甕の胴部である。34は蓋で, 端部が下方へわずかに垂下する。

ウ 土坑

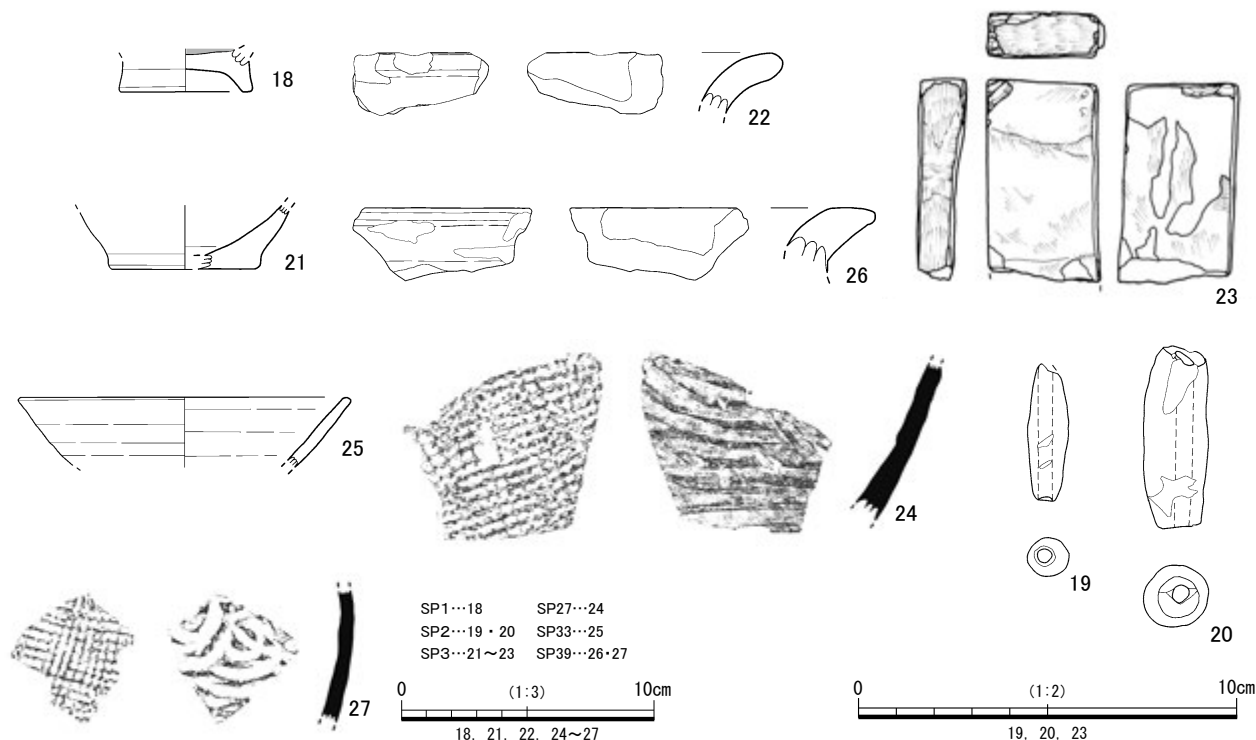
SK1 (第13図, 第13図36, 37)

E1区で検出された。平面形態は楕円形, 断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は長軸0.55m, 短軸0.33m, 検出面からの深さ0.16mである。規模的にピットの可能性も考えられたが周囲でピットが検出されず, 柱痕等も確認できなかったことから土坑と判断した。埋土は, 自然堆積である。用途は不明である。

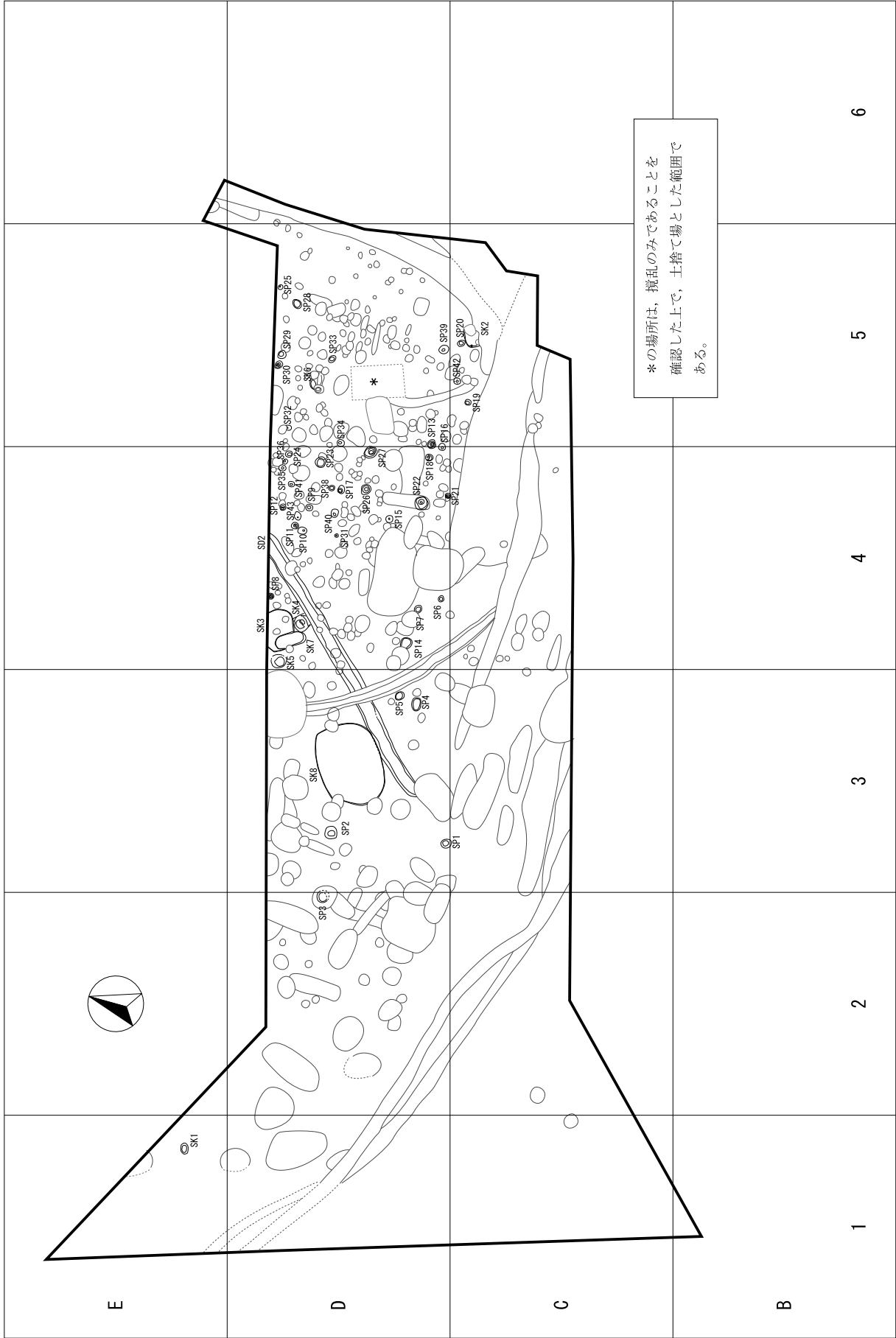
本遺構内から土師器7点が出土し, 内2点を図化した。36は坏の底部である。37は坏もしくは埴の口縁部である。

SK2 (第13図, 第13図38)

C5区で検出された。平面形態は不整楕円形, 断面形態は皿状を呈する。南側及び東側は攪乱により消失して

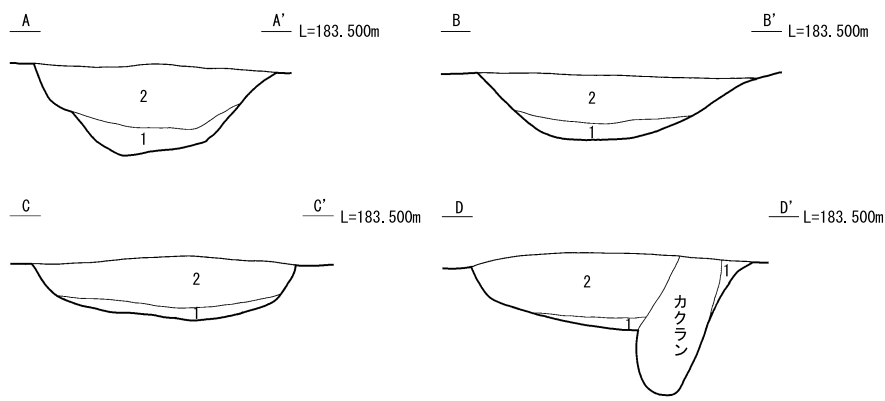
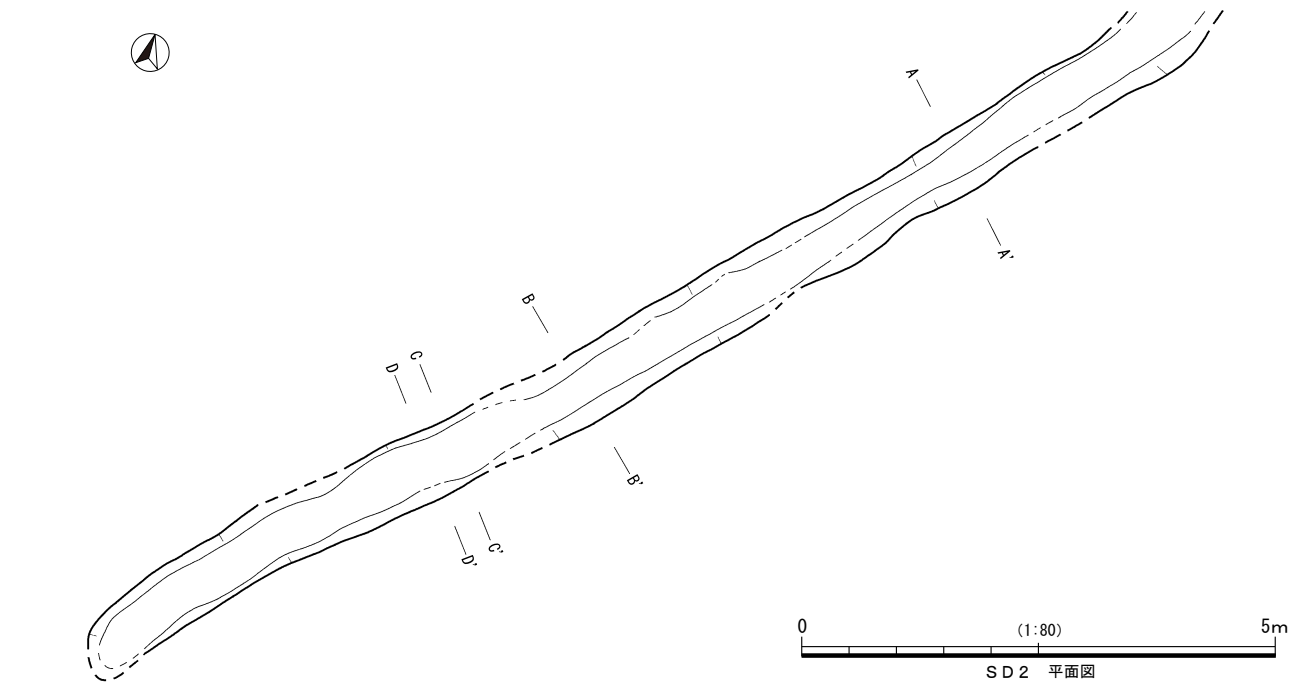


第10図 古代ピット内出土遺物

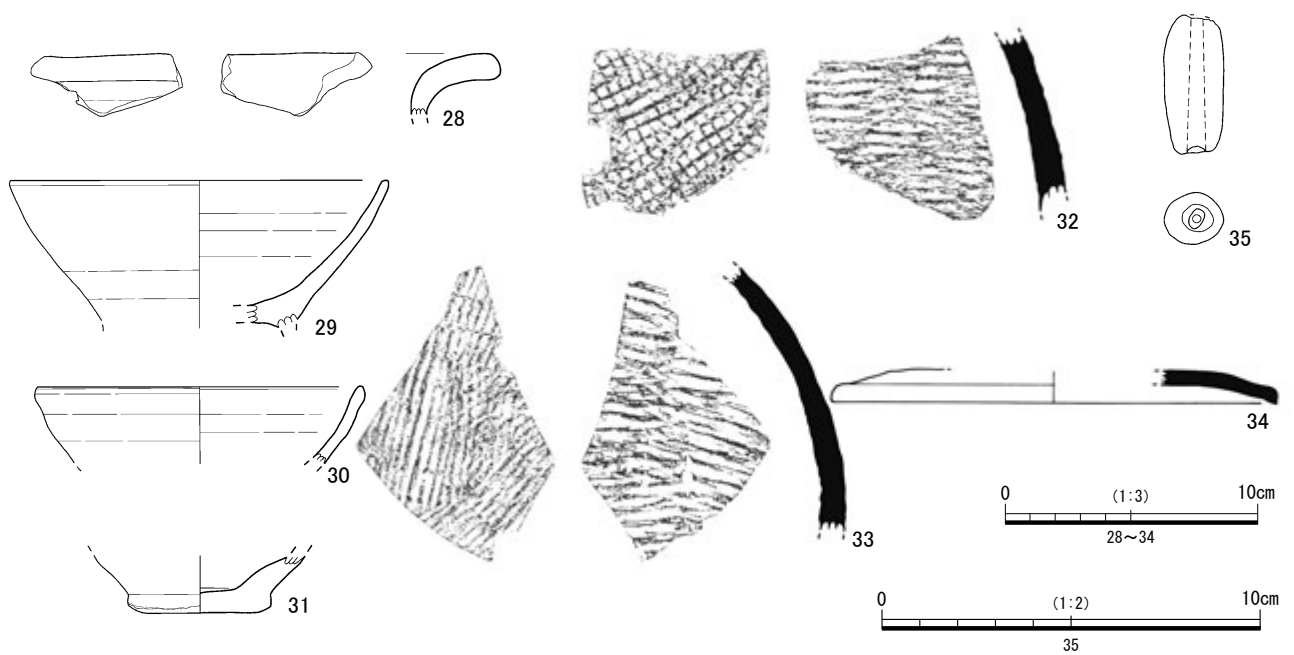


*の場所は、攪乱のみであることを確認した上で、土捨て場とした範囲である。

第11図 古代遺構配置図



- 1 黒褐色砂質土 (Hue7. 5YR3/2)
しまりあり。粘性あり。
直径3mm程度の黄褐色ブロック (鉄分か) を含む。
- 2 暗褐色砂質土 (Hue7. 5YR3/3)
しまりあり。粘性あり。
直径5mm~1cm程度の黄褐色ブロック (鉄分か) を含む。



第12図 SD 2 及び出土遺物

いる。遺構の規模は長軸残存長0.71m、短軸残存長0.73m、検出面からの深さ0.07mである。人為的に埋め戻した埋土であり、かつ土師器小壺が意図的に配置したような状況で出土したことから、土坑墓の可能性が考えられる。

本遺構内から13点の遺物が出土し、うち土師器1点を図化した。38は小壺である。須恵器模倣と思われる。

SK3 (第14図)

D4区で検出された。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。北側は調査区外のため、未調査である。遺構の規模は長軸1.9m、短軸残存長1.21m、検出面からの深さ0.10mである。出土遺物量も多く、廃棄土坑の用途が考えられる。SK4・7と切り合い関係にあり、本遺構はSK4より新しく、SK7より古い。

本遺構内から167点の遺物が出土し、うち土師器6点、須恵器1点を図化した。39~44は土師器である。39~41は赤色高台付埴である。42は坏もしくは埴の口縁部である。43は内黒土師器埴である。44は甕の頸~胴部である。45は須恵器甕の胴部で、当て具の痕跡が残る。

SK4 (第15図, 第15図46~52)

D4区で検出された。平面形態は不整楕円形、断面形態は箱形を呈する。中央部が深く、両側はテラス状になっている。中央部底面の南東側はさらに1段深くなっている。遺構の規模は長軸残存長0.82m、短軸残存長0.74m、検出面からの深さ0.76mである。床面の形態から柱穴の可能性も考えられる。ただし、明確な柱痕は確認できなかった。SK3・7、SD2と切り合い関係にあり、いずれの遺構よりも古い。

本遺構内から72点の遺物が出土し、内土師器5点、須恵器1点、石器1点を図化した。46~50は土師器であ

る。46は坏底部である。47は坏もしくは埴の口縁部である。48・49は赤色高台付埴である。50は甕の口縁部である。51は須恵器甕の胴部である。52は軽石製品である。全面に整形時の擦痕が認められる。

SK5 (第15図, 第15図53~62)

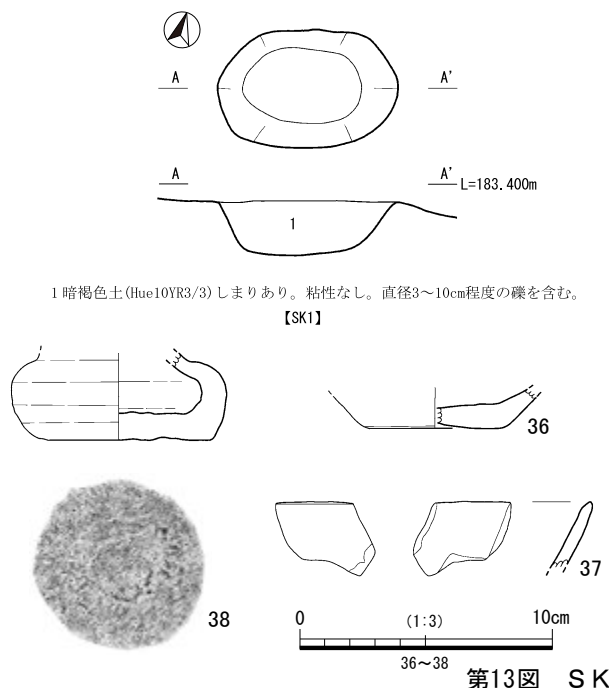
D4区で検出された。平面形態は不整円形、断面形態は箱形を呈する。遺構の規模は長軸0.70m、短軸0.60m、検出面からの深さ0.55mである。

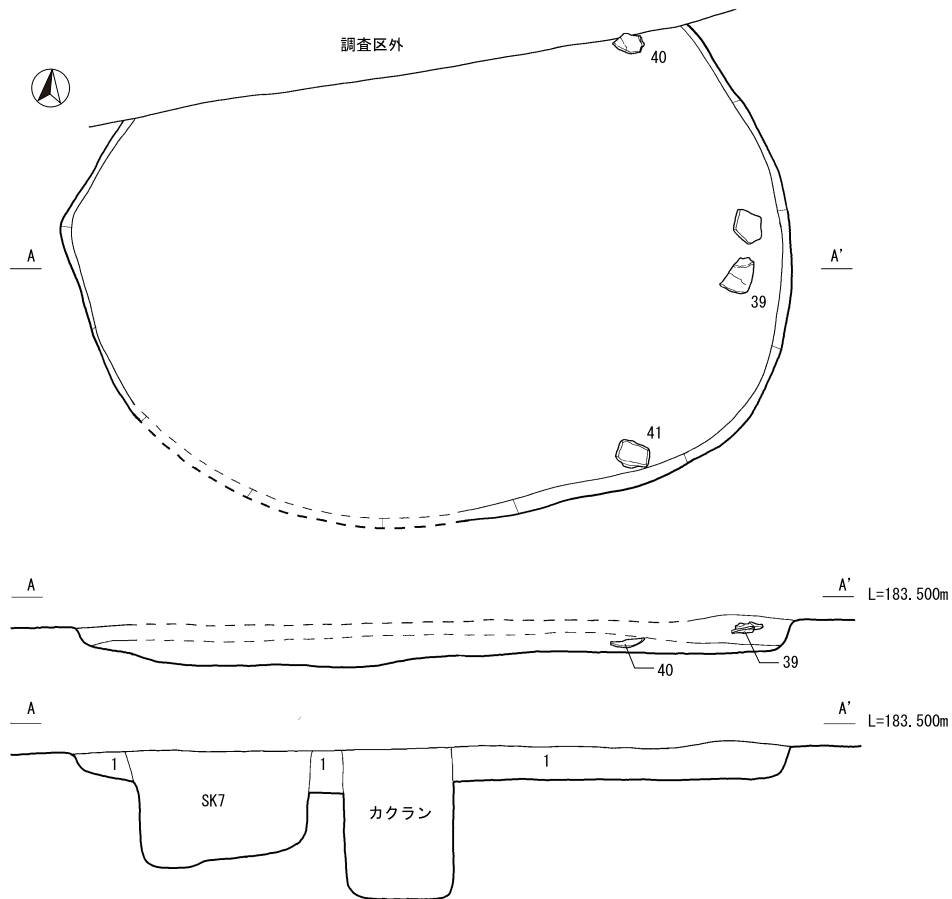
本遺構内から75点の遺物が出土し、うち土師器10点を図化した。53~57は坏底部である。円盤状に突出するもの(53・54)、やや丸みを帯びて底部から立ち上がるもの(55)、いわゆる充実高台をもつもの(56・57)の3タイプが出土している。58は坏もしくは埴の口縁部である。59は赤色高台付埴の底部である。60・61は内黒土師器である。62は坏底部を転用した紡錘車である。周囲に打ち欠き痕が確認できる。

SK6 (第16図)

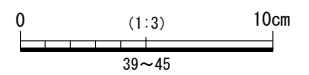
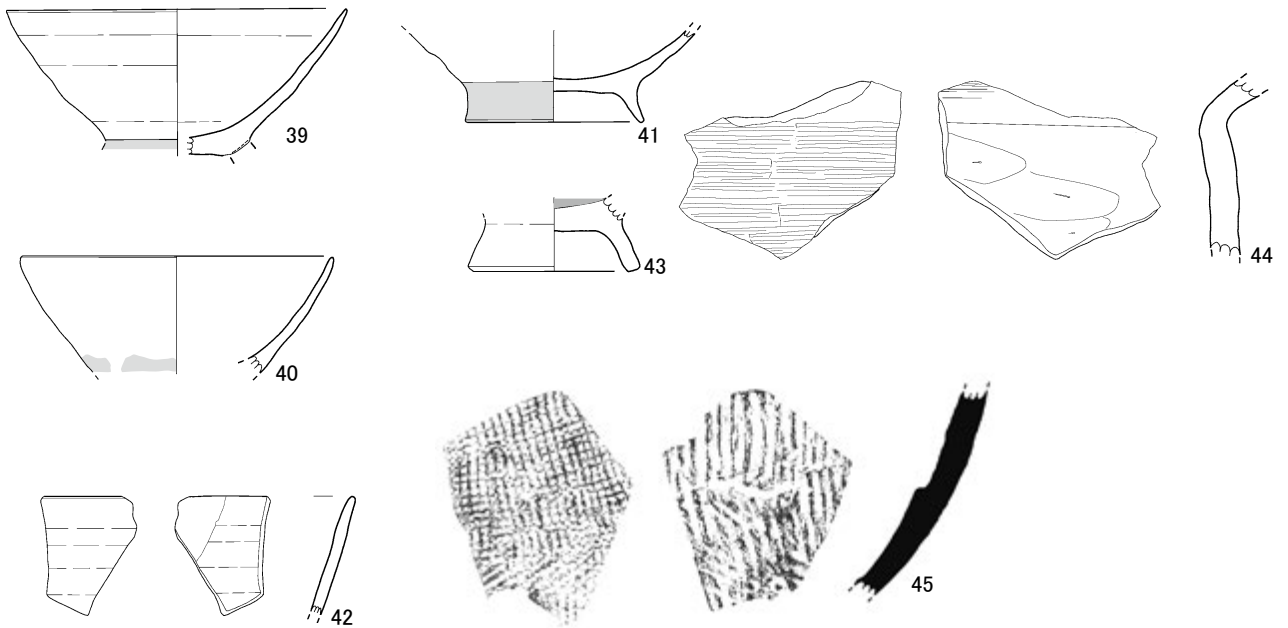
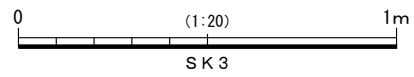
D5区で検出された。平面形態は攪乱等による消失から不明である。遺構の規模は長軸残存長0.55m、短軸残存長0.46m、検出面からの深さ0.05mである。埋土は暗褐色土の単層である。床面付近から土師器埴が2個体つぶれた状態で出土しており(第16図63・64)、意図的に配置された可能性から、土坑墓と推定される。SK9、SP37と切り合い関係にあり、いずれの遺構よりも古い。

本遺構内から21点の遺物が出土し、うち土師器5点、縄文土器1点を図化した。63・64は赤色高台付埴である。高台はやや長い。体部は直線的に外側へ開く。65・66は

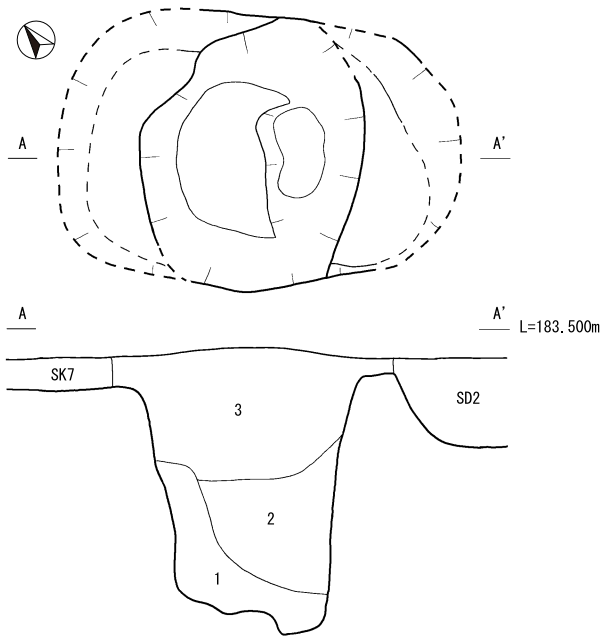




1 暗褐色土(Hue10YR3/3)しまりあり。粘性なし。直径1~5cm程度の褐色ブロックを含む。炭化物を微量含む。

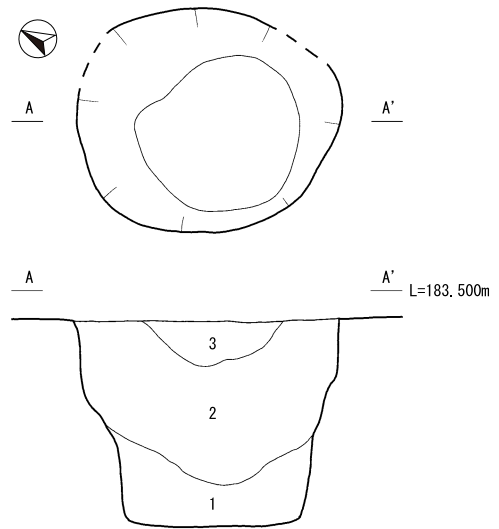


第14図 SK 3 及び出土遺物



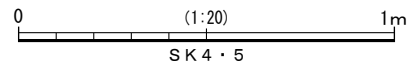
- 1 暗褐色土(Hue7.5YR3/3)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを多量含む。
- 2 暗褐色土(Hue7.5YR3/3)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土(Hue7.5YR2/2)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを多量含む。炭化物を少量含む。

【SK4】

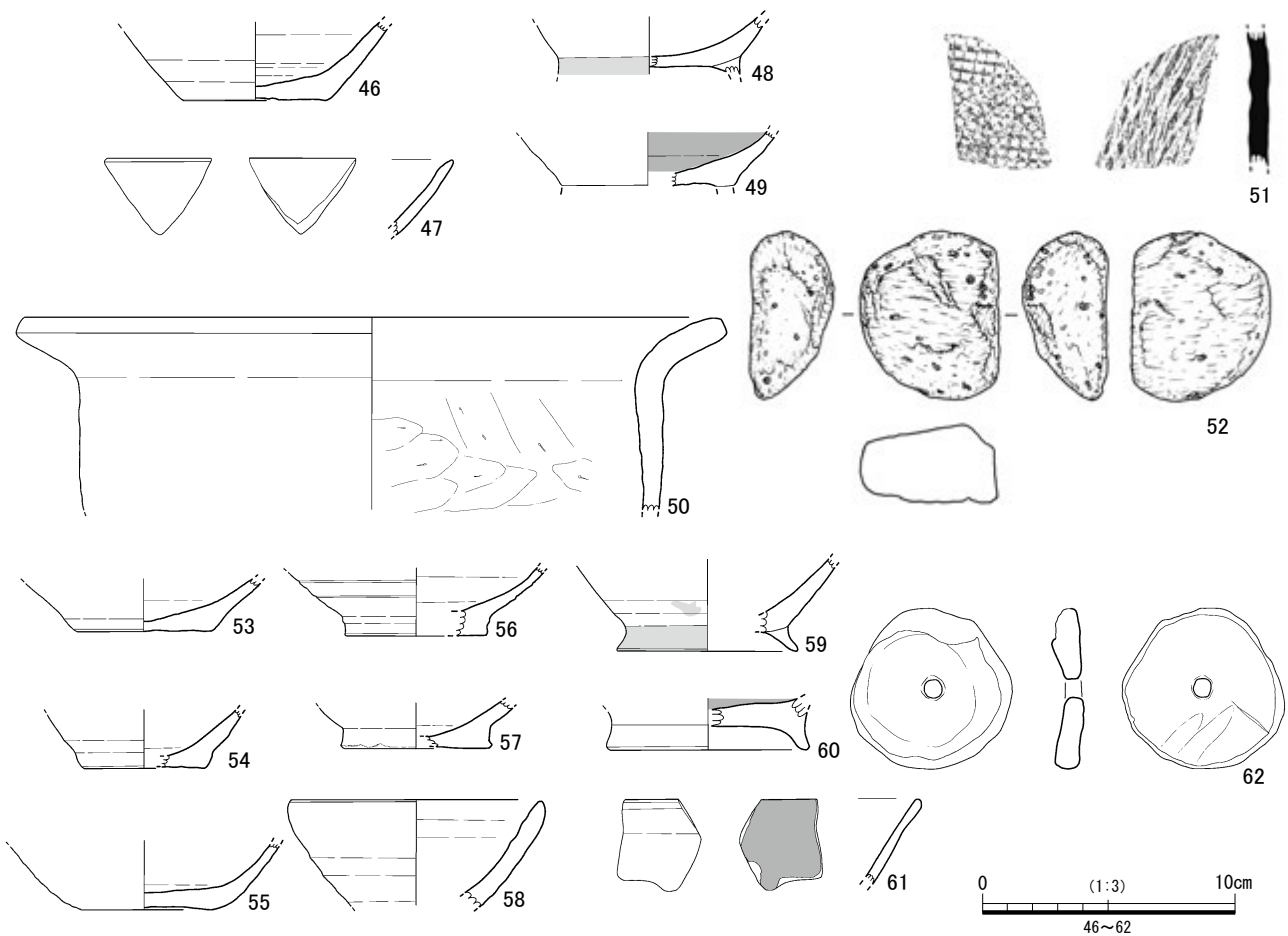


- 1 暗褐色土(Hue10YR3/3)しまりあり。粘性あり。
- 2 灰黄褐色土(Hue10YR4/2)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを含む。炭化物を少量含む。
- 3 灰褐色土(Hue7.5YR4/2)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを少量含む。

【SK5】



SK4・5



第15図 SK4・5及び出土遺物

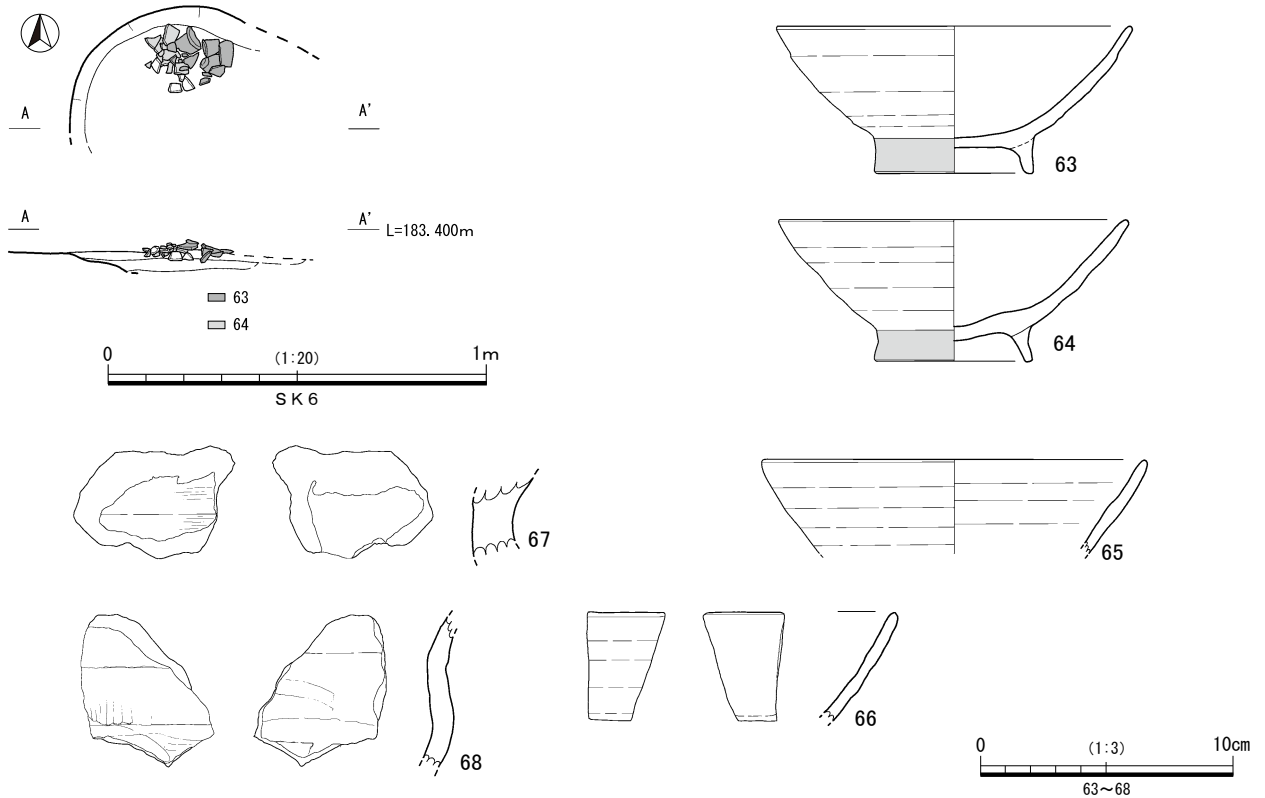
坏もしくは埴の口縁部である。67は甕の頸部である。68は混入した縄文土器の深鉢である。

SK 7 (第17図)

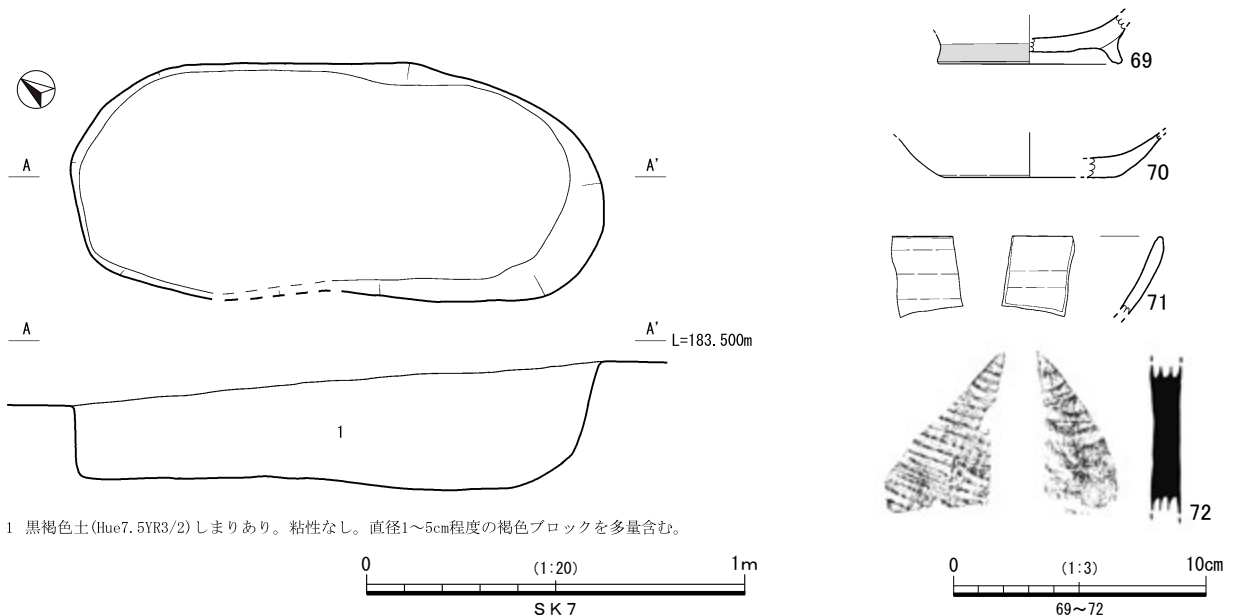
D 4 区で検出された。平面形態は楕円形、断面形態は箱形を呈する。遺構の規模は長軸1.4m、短軸0.63m、検出面からの深さ0.34mである。人為的に埋め戻した埋土である可能性がある。平面形態や埋土の状況から土坑

墓の可能性が考えられるが特異な出土状況は見られなかった。SK 3・4と切り合い関係にあり、本遺構はSK 3・4より新しい。

本遺構内から53点の遺物が出土し、うち土師器3点、須恵器1点を図化した。69は赤色高台付埴である。高台は短い。70は坏底部である。71は坏もしくは埴の口縁部である。72は須恵器甕の胴部である。



第16図 SK 6 及び出土遺物



1 黒褐色土(Hue7.5YR3/2)しまりあり。粘性なし。直径1~5cm程度の褐色ブロックを多量含む。

第17図 SK 7 及び出土遺物

SK8 (第18～20図)

D3区で検出された。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。遺構の規模は長軸3.76m、短軸残存長2.88m、検出面からの深さ0.26mである。北東側や西側の一部が攪乱により消失している。埋土中に少量の炭化物を含むが散在する状況であった。調査当初、遺構の規模から竪穴建物を想定していた。しかし、ピットや焼土、炭化物集中域等が確認されなかったことから最終的には大型土坑と判断した。出土遺物量も多いため、廃棄土坑の用途が考えられる。遺物は西側に破片の大きいものがまとまっており、西側から廃棄した可能性が考えられる。SK3と遺構の形態や遺物の出土状況の面で類似性が高い。

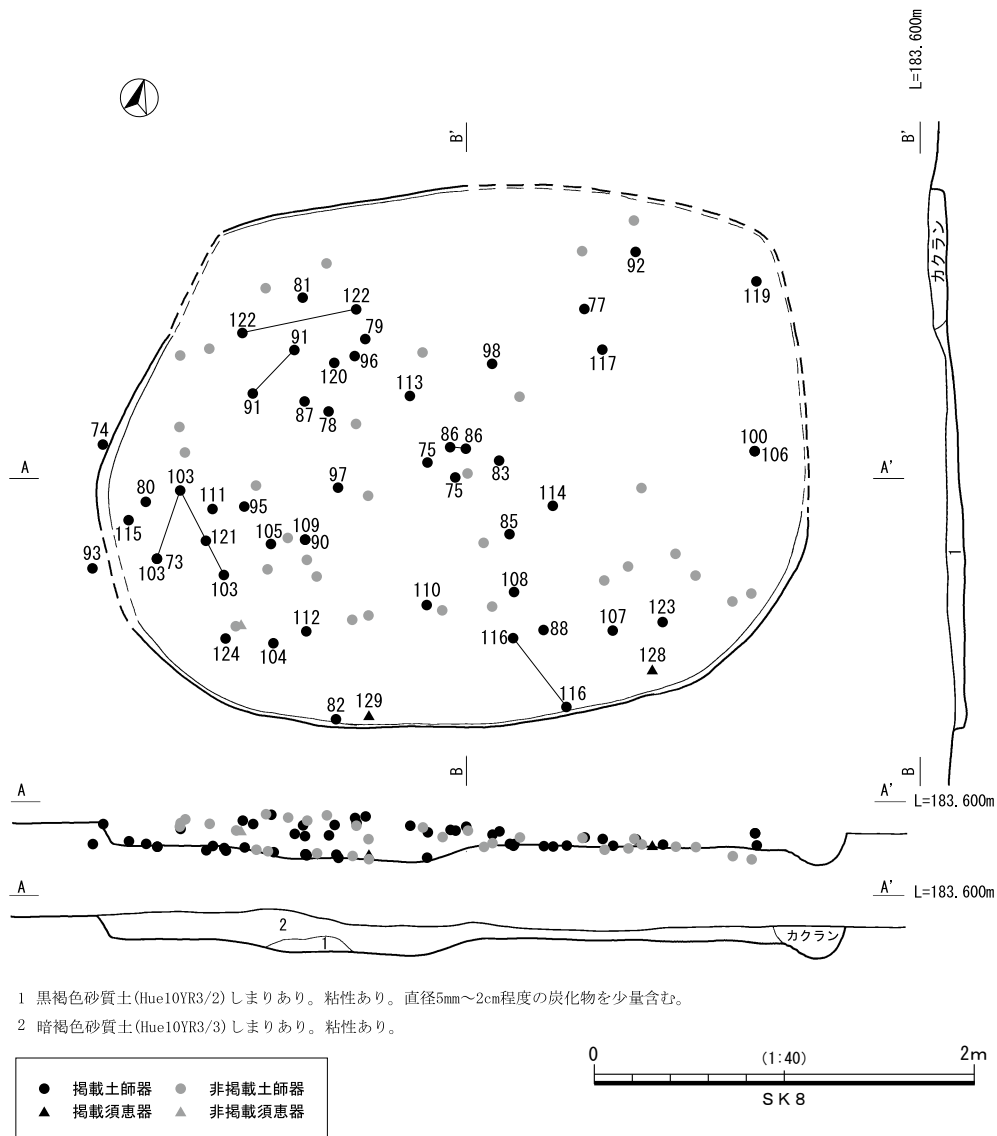
本遺構内からは1196点という多数の遺物が出土した。しかし、出土した遺物の多くは小破片であったため、図化できた遺物は土師器55点、須恵器2点にとどまった。

73～127は土師器である。73～97は坏である。73～80

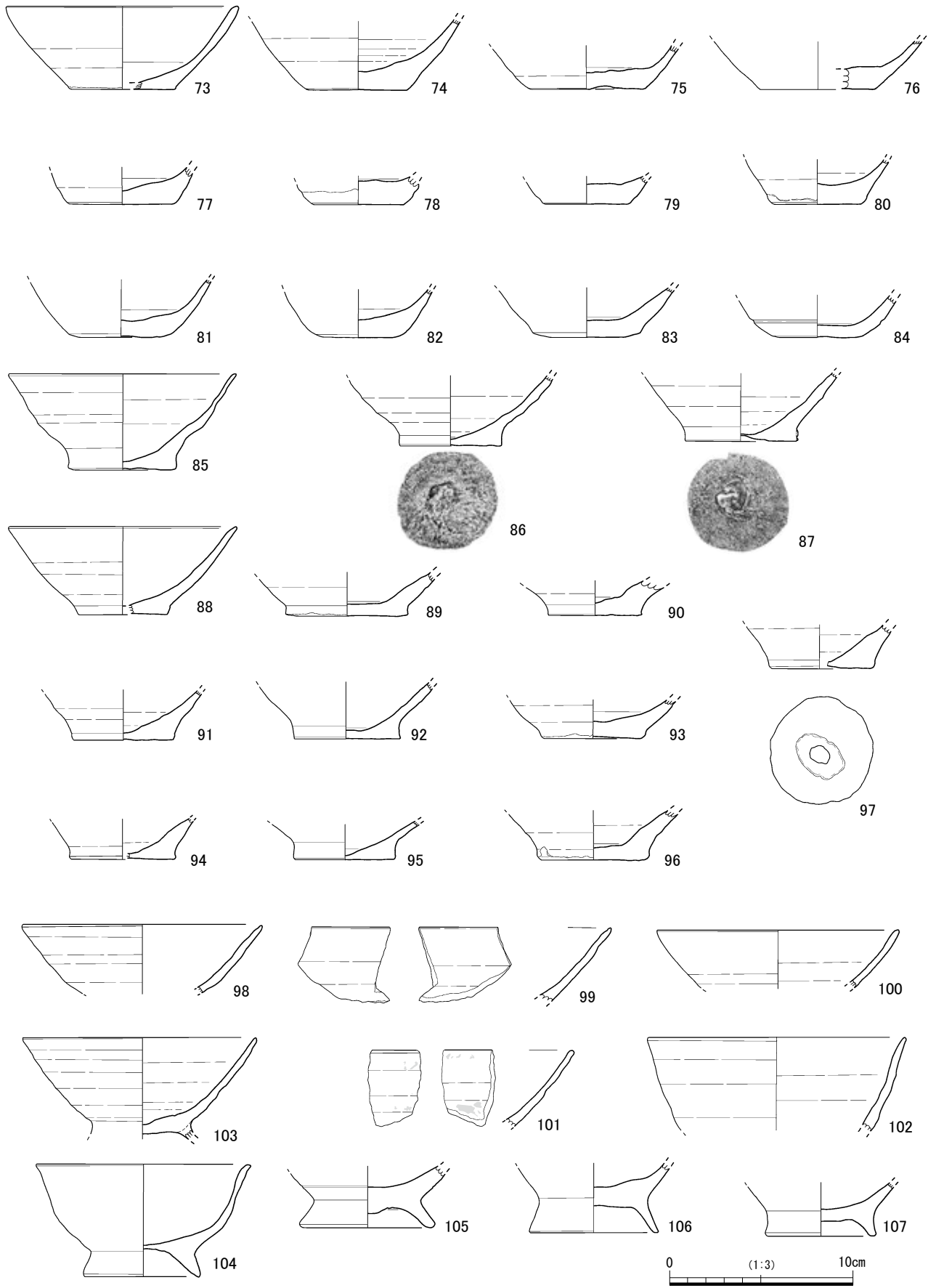
は底部に明確な稜をもち、直線的に立ち上がるものである。底径が5.1cm以上のもの(73～77)と5.0cm未満でやや小さいもの(78～80)がある。口縁部まで残存する73の体部は、中位でやや丸みを帯びるが概ね直線的である。81～84は底部からの立ち上がりやや丸みをもつものである。85～87はいわゆる「充実高台」をもつものである。85・86は器面に回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。体部は直線的である。88～97は底部が円盤状に突出するものである。88の体部は、中位でやや丸みを帯びるが概ね直線的である。97は底部中央に穿孔がある。紡錘車へ再加工する目的で穿孔したが、完成まで至らなかったものと思われる。

98～102は坏もしくは埴の口縁部である。いずれも外側へ直線的に開く体部である。101は内面に部分的に赤色顔料が観察できるため、内朱土師器の可能性はある。

103～115は埴である。体部は器面に回転ナデによる凹凸が明瞭に残り、直線的に外側へ開く器形のもの(103)



第18図 SK8



第19図 SK8出土遺物①

と内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反するもの(104)がある。高台は、長いものと(104~106)と短いもの(107~111)がある。

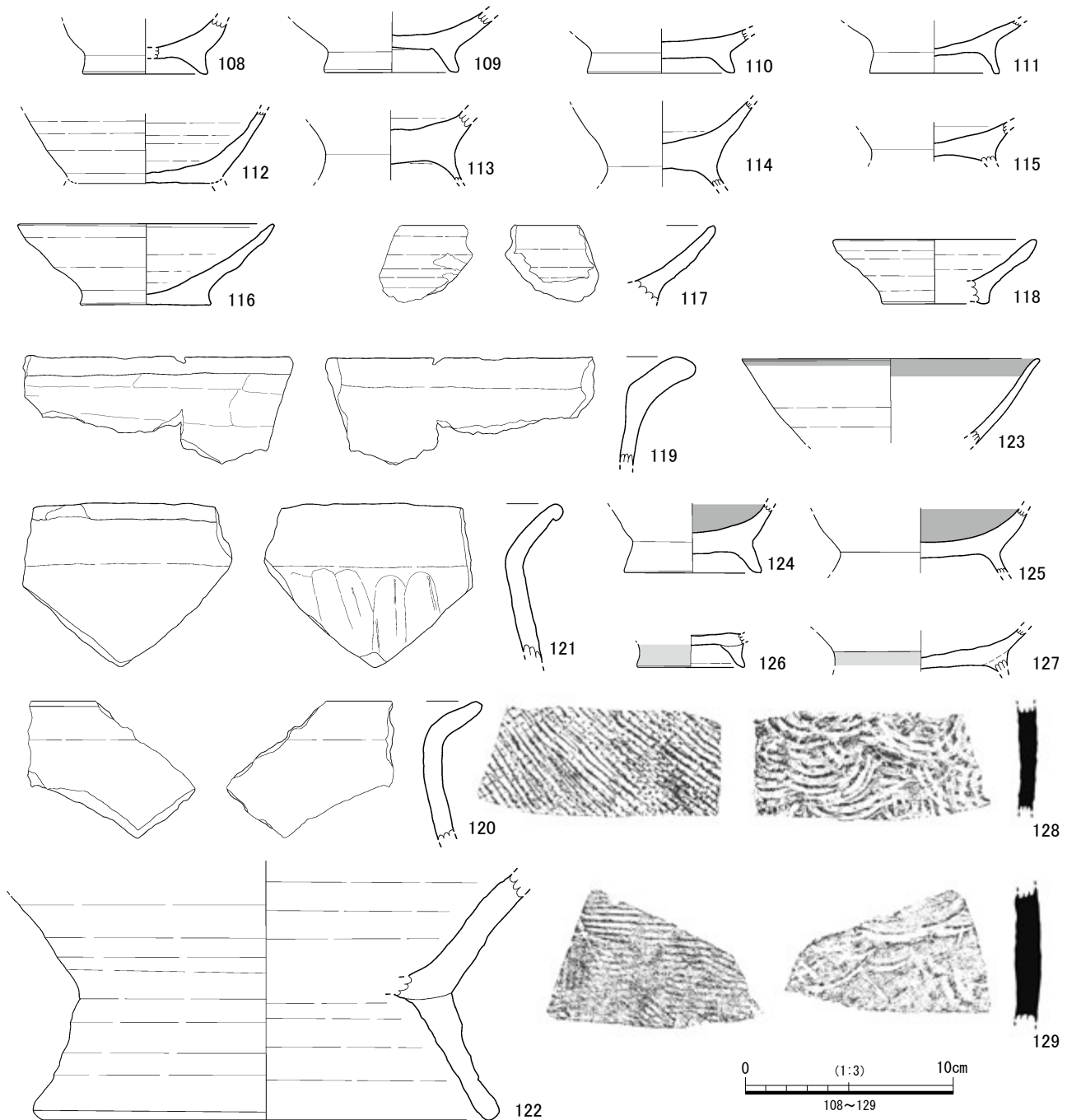
116~118はいわゆる「充実高台」をもつ皿である。116に比べ、118は全体的に法量がやや小さい。

119~121は甕の口縁部~胴部である。119・120は口縁部が短く、大きく外反する。121は口縁部がやや長く外反するが、119・120に比べやや立ち上がり気味である。口縁端部が肥厚する。断面はカマボコ状を呈する。やや硬質であり、窯で焼かれた製品の可能性がある。

122は台付鉢である。外面に調整による凹凸が明瞭に残る。復元径で底径が22.4cmある大型品である。

123~126は内黒土師器である。123は坏もしくは埴の口縁部、124~126は埴の底部である。123は直線的に外側へ開く器形である。126の高台は赤色高台である。127は赤色高台付埴である。

128・129は須恵器甕の胴部である。外面のタタキは平行、内面の当て具痕跡は同心円文である。128の外面は、大部分が擬格子状となっている。129は焼成が悪いためか灰白色の色調を呈す。



第20図 SK8出土遺物②

(3) 遺物

古代に該当する遺構以外から出土した遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器など835点であった。そのうち土師器・土製品37点、須恵器22点、陶磁器2点、石器2点を図化した。なお、中世の遺構であるSD1から出土した古代の遺物308点のうち、土師器6点、須恵器2点についてもここで報告する。

ア 土師器 (第22図)

130～132は坏である。130はいわゆる「充実高台」をもち、体部外面に回転ナデによる凹凸が明瞭に残り、直線的に外側へ開く器形である。131・132は底部が円盤状に突出するものである。

133～144は埴である。133～135は高台が長く、大きく外側へ開く。136～143は高台が短く、やや外側へ開く。144は底径が大きく、輪高台である。

145～149は内黒土師器である。145は坏、146～149は埴である。148は赤色高台をもつ。149は口縁部である。端部がやや外反する。150～152は赤色高台付埴である。153は内朱土師器坏である。底部が円盤状に突出する。

154は坏もしくは埴の口縁部である。155・156は蓋である。口縁端部を短く下方へ垂下させる。

157～161は甕である。157は口縁部がやや長く外反する。158～161は口縁部が短く、大きく外反する。162は鉢の底部である。163・164は甕または甕の把手である。形態は163は牛角状、164は半輪状である。165は紡錘車である。坏転用ではない。166は土錘である。

イ 須恵器 (第23図, 第24図176～188)

167～175は甕の胴部である。外面のタタキは平行と格子目、内面の当て具痕跡は平行と同心円文がみられる。167の内面に一部に当て具が深く入った痕がみられ、当て具の側面の一部が方形であることがわかる。169は内面の同心円文の当て具痕跡がほとんどをナデ消されている。170・171の内面の当て具痕跡は肩部付近が同心円文、

その下位が平行である。172は外面において2つの円状に土師質の部分が残っている。火の当たり具合の差異による色調の違いと考えられ、焼成時に他のものが重なっていた可能性がある。

176は蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。177は坏である。口縁端部がやや外反する。178は坏か埴の口縁部で、やはり口縁端部がやや外反する。179～182は埴の底部である。180は底部外面に墨書がみられるが文字の判別はできなかった。183は皿である。184は器種不明の口縁部である。鉢であろうか。内傾し、口縁端部が両端とも張り出す。上下逆で、底部が接合面で外れた壺や鉢の胴部下半部分の可能性も考えられる。

185は鉢の口縁部である。全面が土師質の色調である。186は壺で、頸部と肩部の接合部分に突帯を巡らせている。187は高坏の脚裾部で、裾部の先端が下方向へ屈曲する。

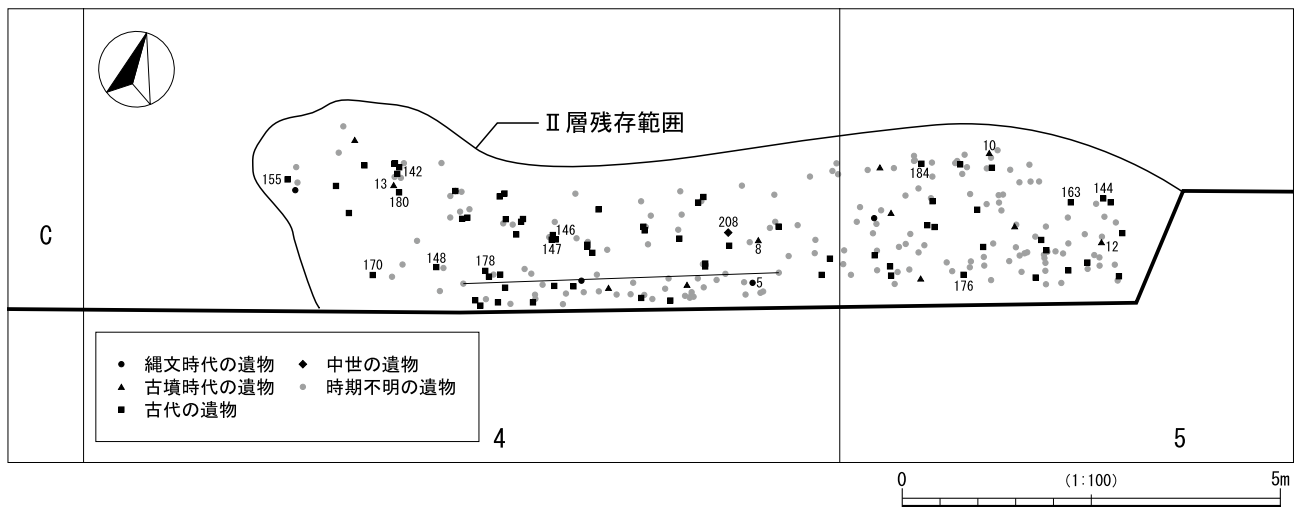
188は蓋の転用硯である。つまみ部は欠損している。内面は大変滑らかで光沢があり、墨の痕跡が残っている。189は甕と考えられる胴部の一部であり、周囲を打ち欠き、メンコ状に仕上げている。土師質の色調を呈し、整形技法も土師器の技法である。

ウ 陶磁器 (第24図190・191)

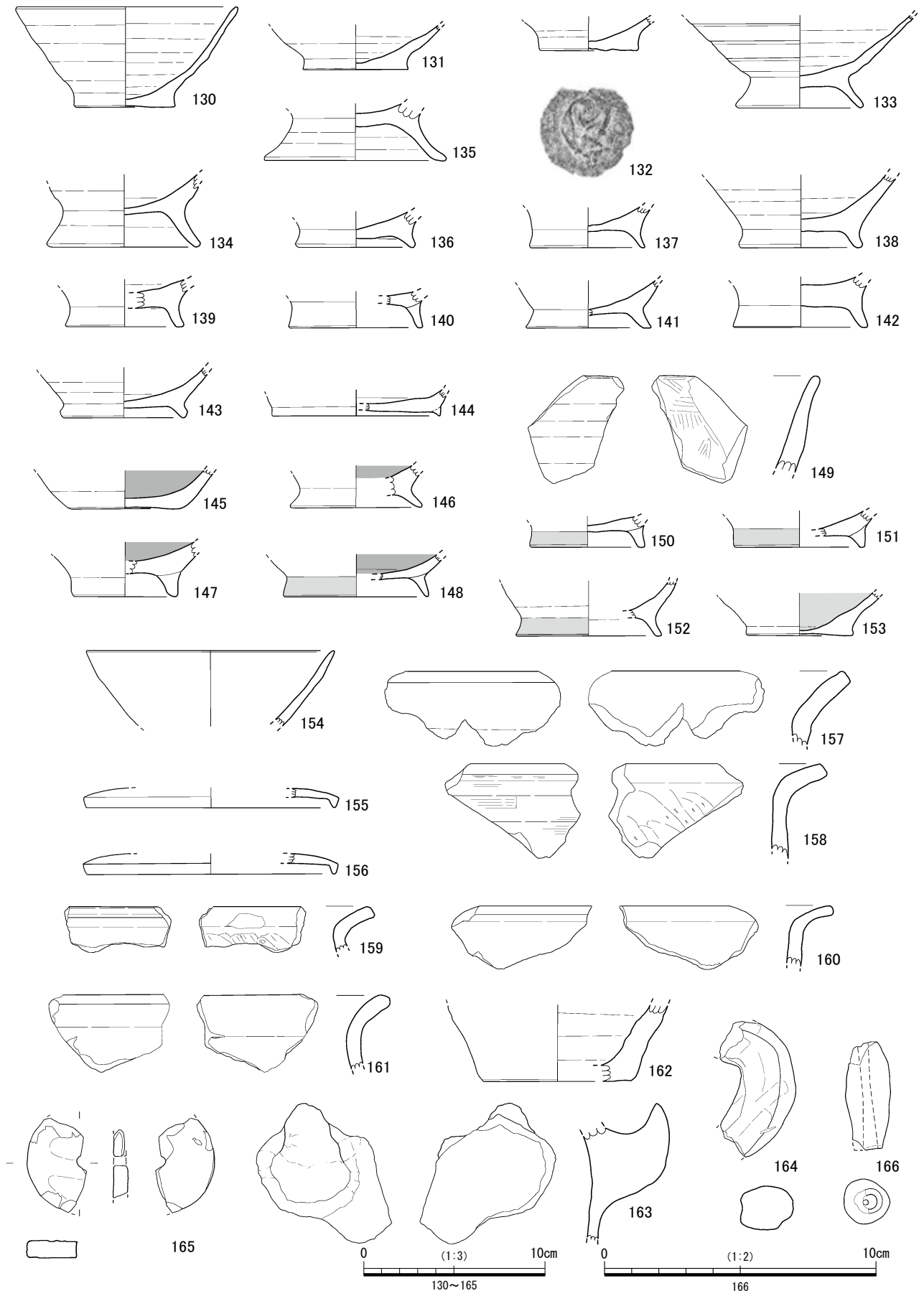
190は、防長系の緑釉陶器皿の底部である。素地は土師質で、高台は貼り付け高台である。191は、越州窯系青磁碗である。色調は器面全体が茶黄色を呈し、淡黄灰色の胎土を持つ。底部は蛇の目高台である。体部は直線的に外側へ開く。外面に刻書がある。文字は横位に二段あり、「七月」と「●時カ」の文字が刻まれている。

エ 石器 (第24図192・193)

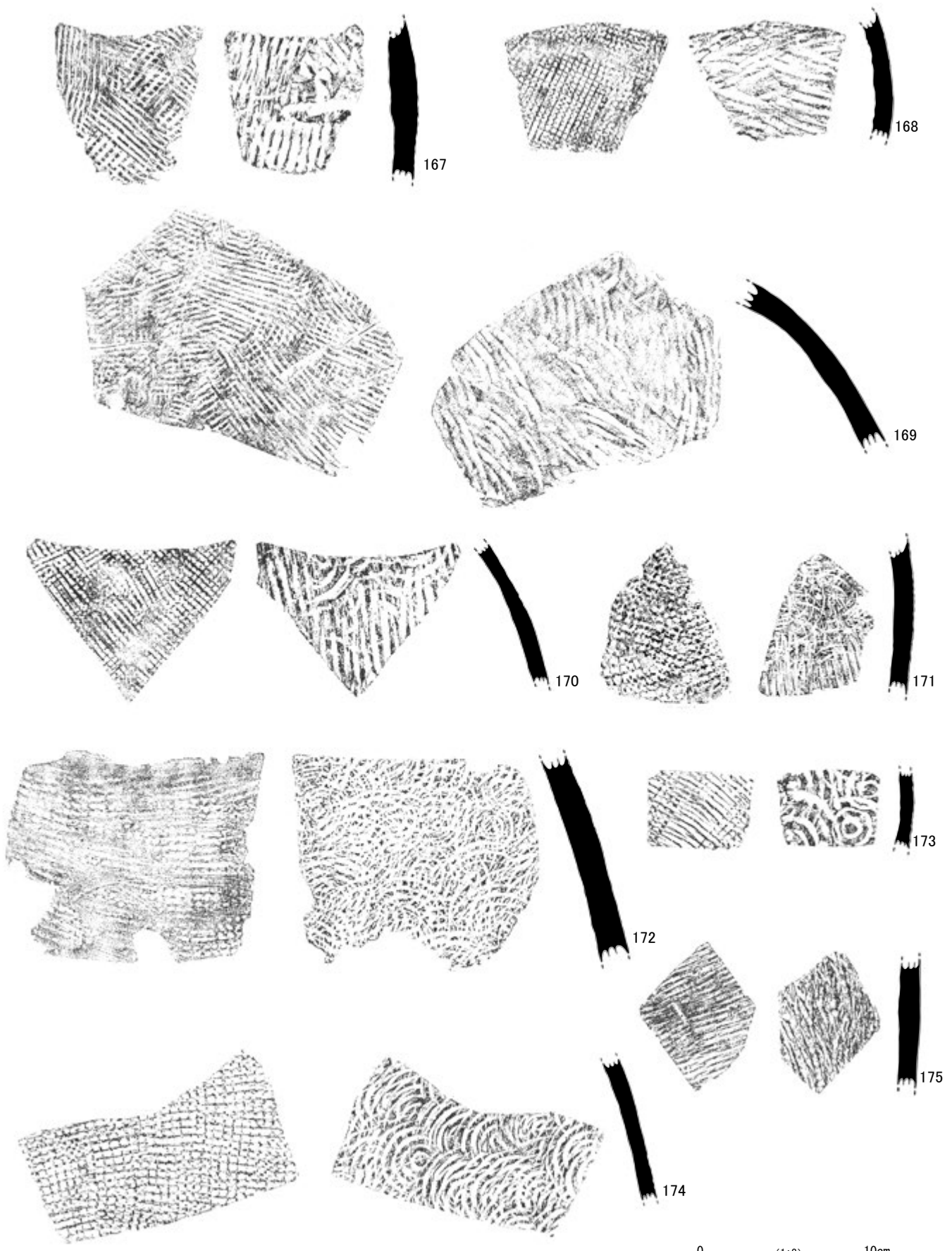
192は軽石製品である。全面に整形時の擦痕が確認できる。193は砂岩製の支脚である。欠損部分が多いがおそらく円柱状の形態と思われる。硬質のヘラ状により整形される。



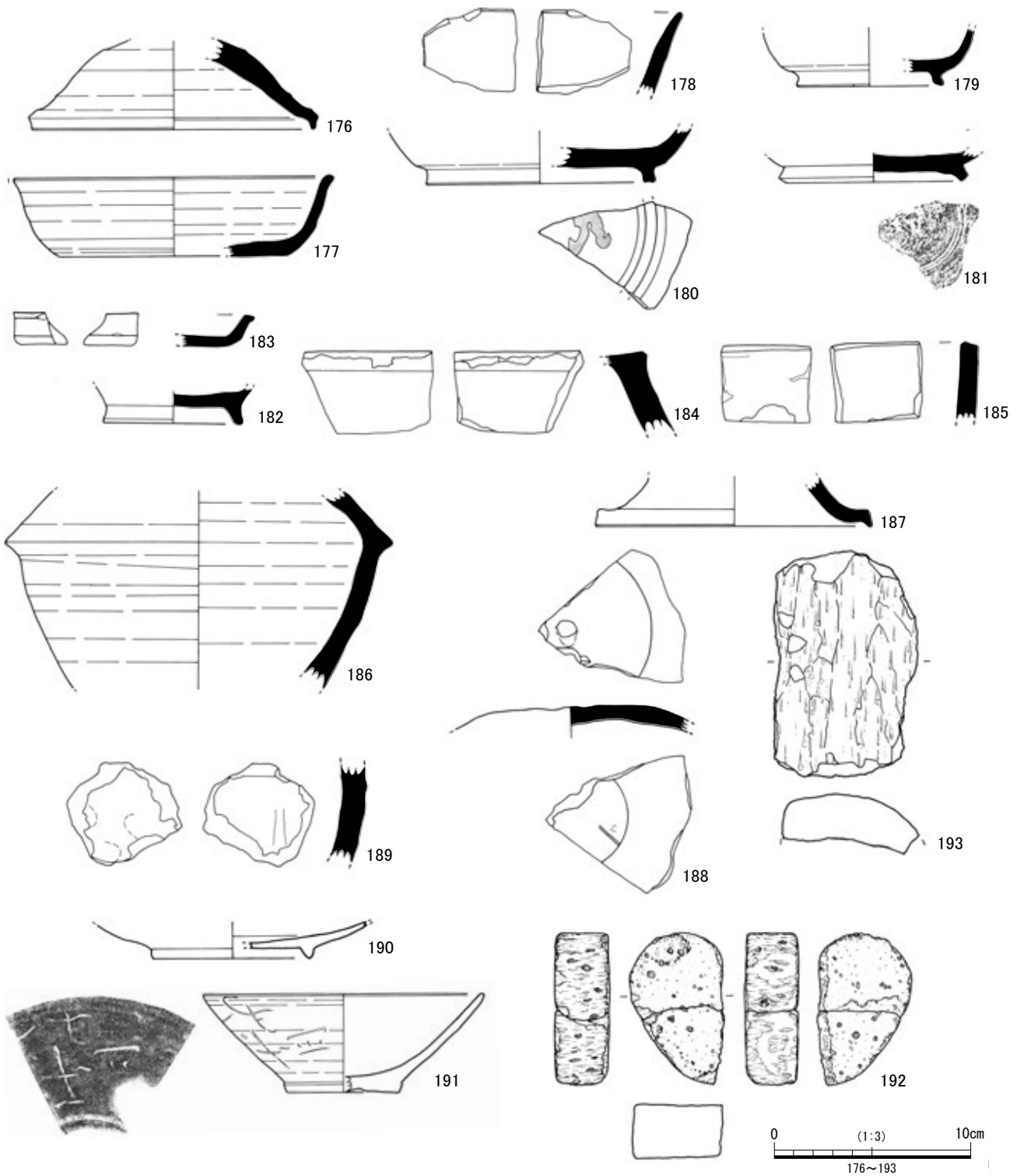
第21図 包含層（II層）遺物出土状況



第22図 古代出土遺物①



第23図 古代出土遺物②



第24図 古代出土遺物③

第5表 古代土製品観察表

挿図 番号	掲載 番号	取上 番号	遺構名・ 出土区	層位	器種	部位	法量				胎土			色調	備考
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石英・長石	角閃石・輝石	小礫		
10	19	一括	SP2	埋土	土鍾	ほぼ完形	3.7	1.1	1.1	3.1	△			浅黄橙 10YR8/4	
	20	一括	SP2	埋土	土鍾	ほぼ完形	4.8	1.7	1.6	13.7	△	□	○	橙 5YR6/6	
12	35	一括	SD2	埋土	土鍾	ほぼ完形	3.7	1.6	1.4	7.7	△	△	○	灰白 7.5YR8/2	
15	62	一括	SK5	埋土	紡錘車	ほぼ完形	6.3	6.3	1.1	42.16	□		△	灰白 7.5YR8/2	
22	165	一括	D-4	I b	紡錘車	-	(5.8)	(1.0)	0.9	14.93	□	□	□	浅黄橙 7.5YR8/6	
	166	一括	C-5	II	土鍾	ほぼ完形	(3.9)	1.7	1.7	6.93	△		△	浅黄橙 7.5YR8/3	

4 中世の調査

(1) 調査の概要

中世の遺構は、溝状遺構1条、土坑1基、ピット1基が検出された。

中世の遺物は、主にI層や攪乱埋土から出土したが若干II層中からの出土も認められた。

(2) 遺構 (第25図)

ア ピット (第28図194)

確実に中世のピットと判断し得たのは、SP37のみであり、掘立柱建物跡として抽出できなかつた。

遺物は1点出土した。194はSP37から出土した滑石製石鍋の口縁部である。鏝が巡るタイプである。穿孔が上下に2つ確認でき、再加工されたものと思われる。また、上の穿孔のすぐ横に未貫通の穿孔が接している。

イ 溝状遺構 SD1 (第26図, 第28図195)

D3区, D4区, C4区で検出された。北-南方向を走行する。断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は長さ10m, 最大幅0.72m, 検出面からの深さは最大で0.28mである。市が行った確認調査の際、2トレンチで検出され溝状遺構と同一遺構の可能性がある。床面のレ

ベルは、各地点ほぼ同レベルである。埋土は、自然堆積で、砂粒の堆積や硬化面は認められなかつた。そのため、用途は水路や道路とは考えにくい。可能性としては、区画溝の用途が考えられる。SD2と切り合い関係にあり、本遺構はSD2より新しい。

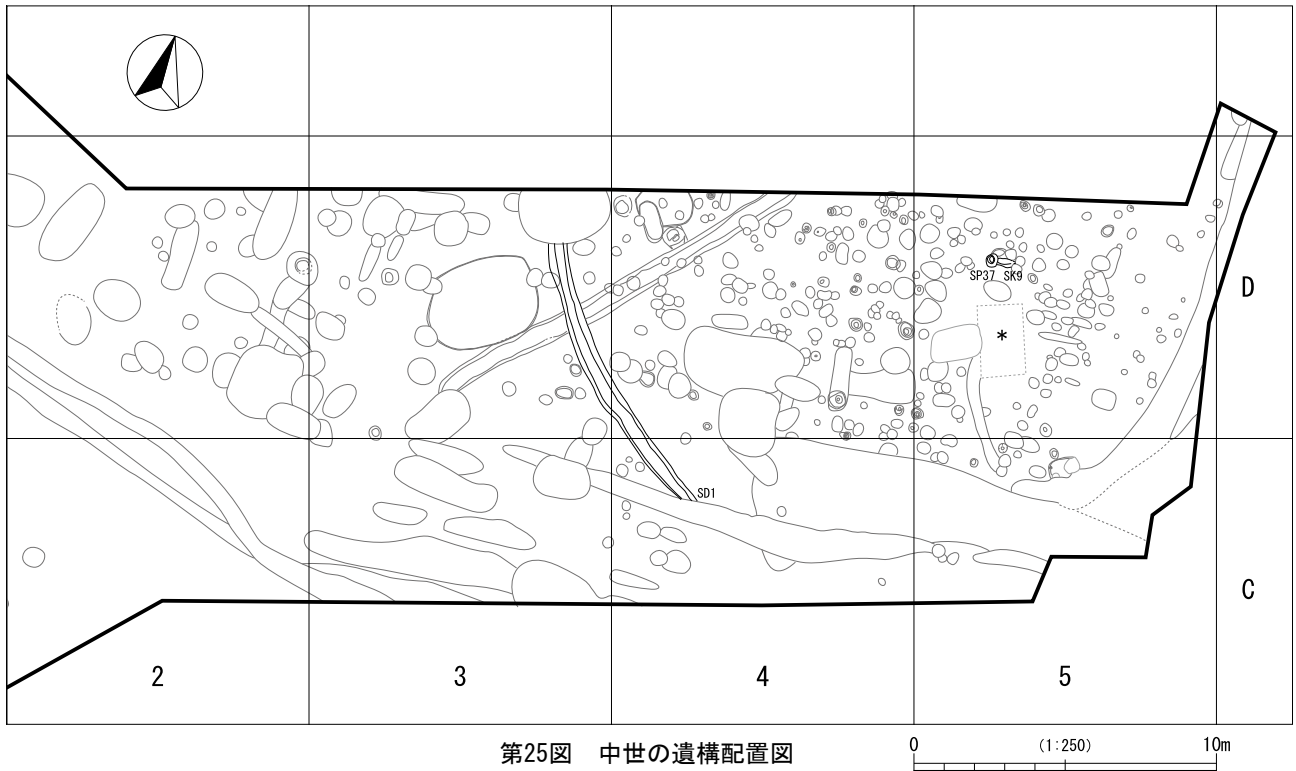
本遺構からは、古代の遺物が多数出土しているが、床面付近から中世の土師器が1点出土したため、当時期に該当する遺構と判断した。

195は土師器坏の底部である。底部からの立ち上がりは丸みを帯びる。切り離しは回転糸切りである。

ウ 土坑 SK9 (第27図, 第28図196)

D5区で、古代の遺構であるSK6を切った状態で検出された。平面形態は不整楕円形、断面形態は箱形を呈する。東側は攪乱により消失している。遺構の規模は長軸残存長0.58m, 短軸残存長0.43m, 検出面からの深さ0.22mである。埋土は、自然堆積である。用途は不明である。

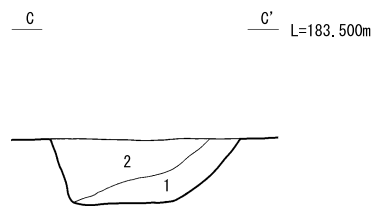
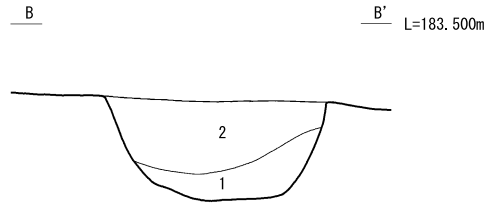
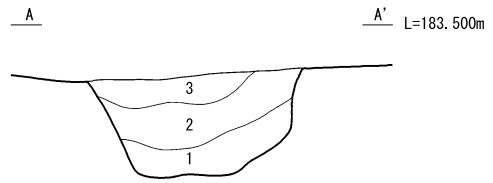
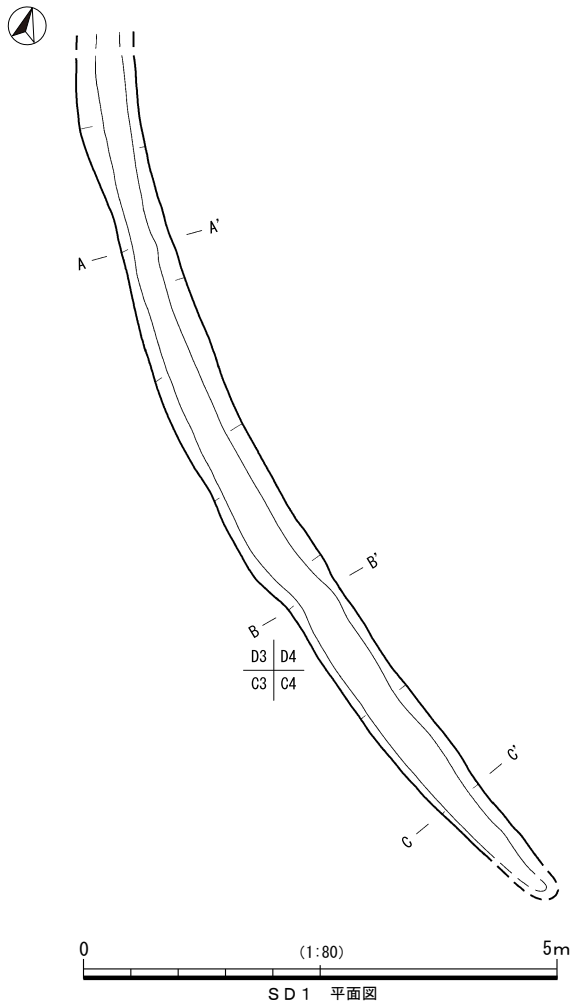
遺物は1点出土した。196は、床面直上から出土した滑石製石鍋の一部である。鏝による加工痕が明瞭に残るものである。



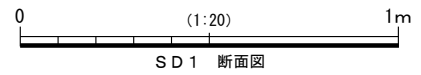
第25図 中世の遺構配置図

第11表 中世遺構内出土遺物観察表

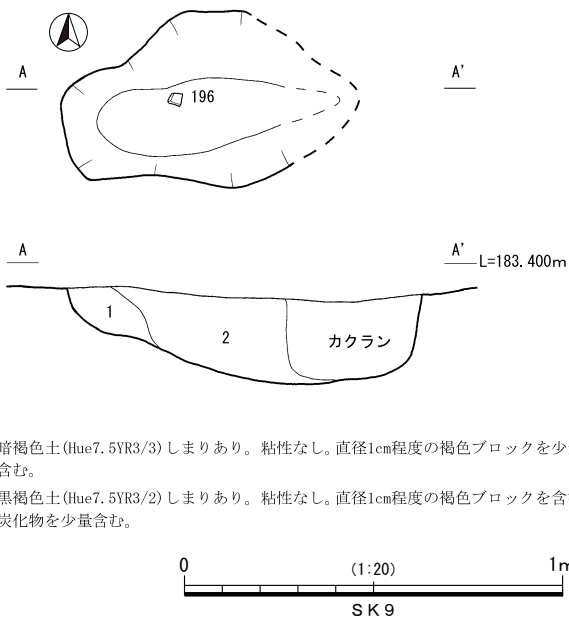
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区遺構名	器種	種別	法量 (cm)			調整		胎土			色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	小礫	外面	内面	
28	195	一括	SD1	坏	土師器	(13.6)	(9.6)	3.1	体:回転ナデ 底:回転ヘラ切り	マメツ	△		○	灰褐(7.5YR4/2)	にふい褐(7.5YR5/4)	
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区遺構名	層位	器種	器種	法量				備考					
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)						
28	194	-	SP37	カクラン	鍋	滑石	3.3	6.1	5.2	37.03						
	196	-	SK9	カクラン	鍋	滑石	4.0	4.4	2.3	45.36						



- 1 暗褐色土(Hue10YR3/3)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを含む。
- 2 暗褐色土(Hue10YR3/3)しまりあり。粘性なし。
- 3 黒褐色土(Hue10YR3/1)しまりあり。粘性なし。直径1~2cm程度の褐色ブロックを含む。

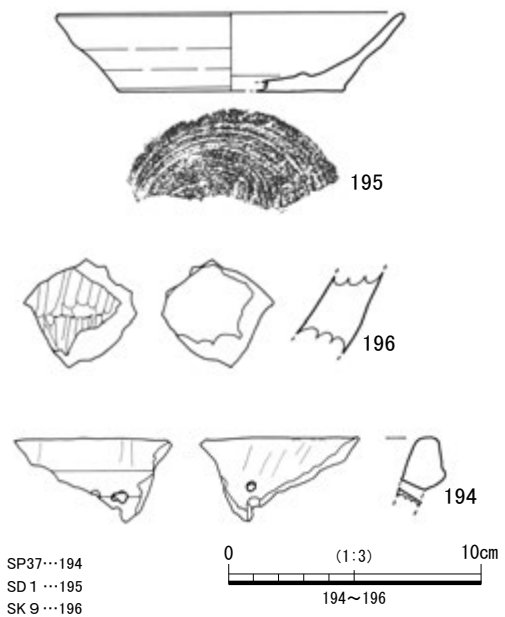


第26図 SD 1



- 1 暗褐色土(Hue7.5YR3/3)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土(Hue7.5YR3/2)しまりあり。粘性なし。直径1cm程度の褐色ブロックを含む。炭化物を少量含む。

第27図 SK 9



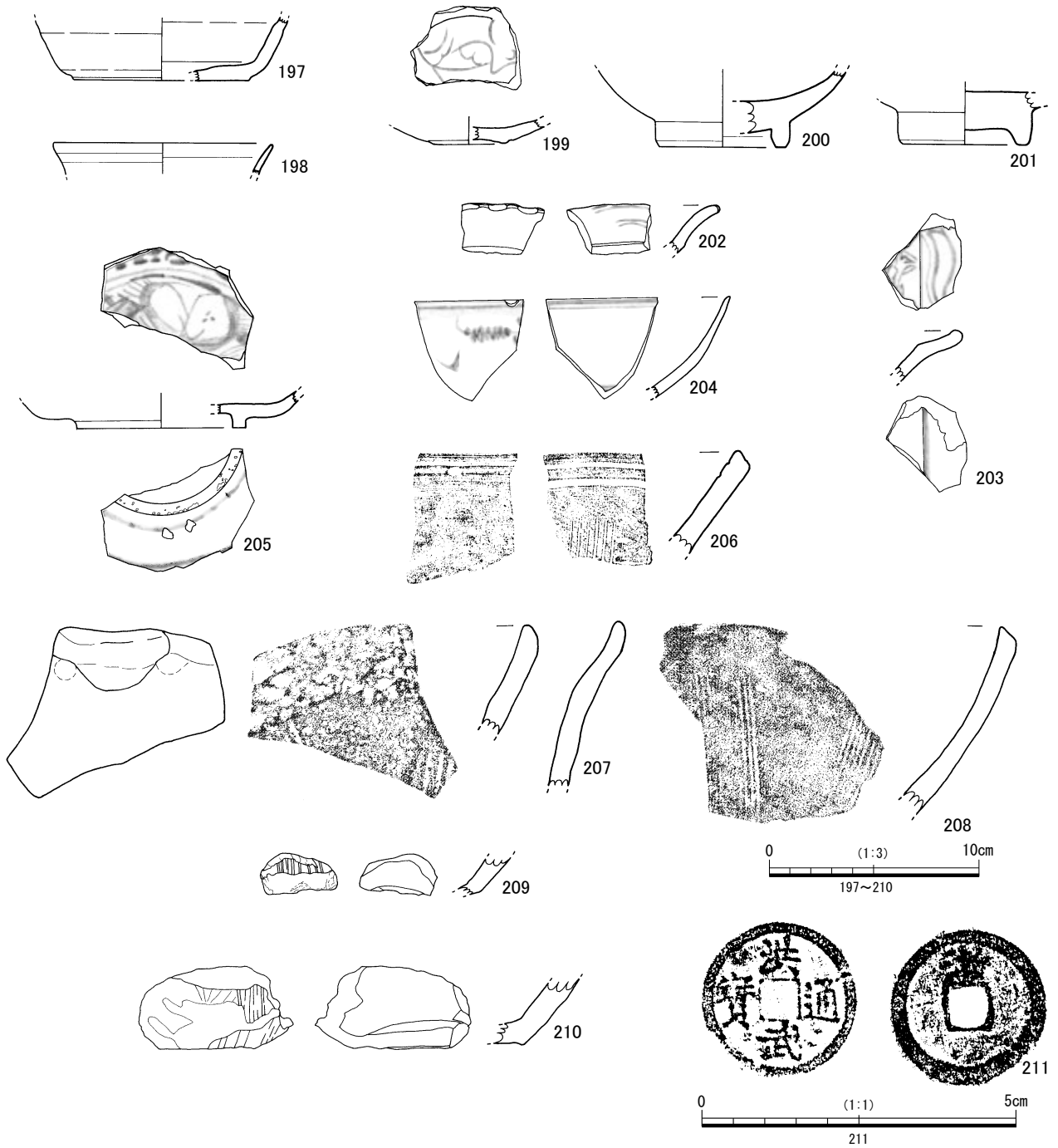
第28図 中世の遺構内出土遺物

(3) 遺物 (第29図)

中世に該当する遺物は、土師器、白磁、青磁、青花、瓦質土器、滑石製石鍋、貨幣などが37点出土した。そのうち15点を図化した。

197は土師器で坏の底部である。底部からの立ち上がりは丸みを帯びる。切り離しは糸切りである。198・199は白磁である。198は口禿げの碗もしくは皿の口縁部である。199は皿の底部である。内面にヘラ描きの草花文が施される。200・201は龍泉窯系青磁の碗である。高台

内面は釉剥ぎされ、201は高台内面に重ね焼きの痕跡が輪状に残る。202・203は龍泉窯系青磁の稜花皿である。204・205は漳州窯系の青花である。204は蓮子碗の口縁部である。205は皿の底部で、高台内は露胎する。206～208は瓦質土器の播鉢である。206は硬質でよく焼き締まっているが、207・208は軟質で播り目も使用により摩滅している。209・210は、滑石製石鍋の一部である。211は銅銭である。洪武通宝で、背上に「浙」の字がみられる。



第29図 中世の出土遺物

5 近世の調査

(1) 調査の概要

近世の遺構はみられなかった。遺物については、全て造成土内及び攪乱箇所に見られた。

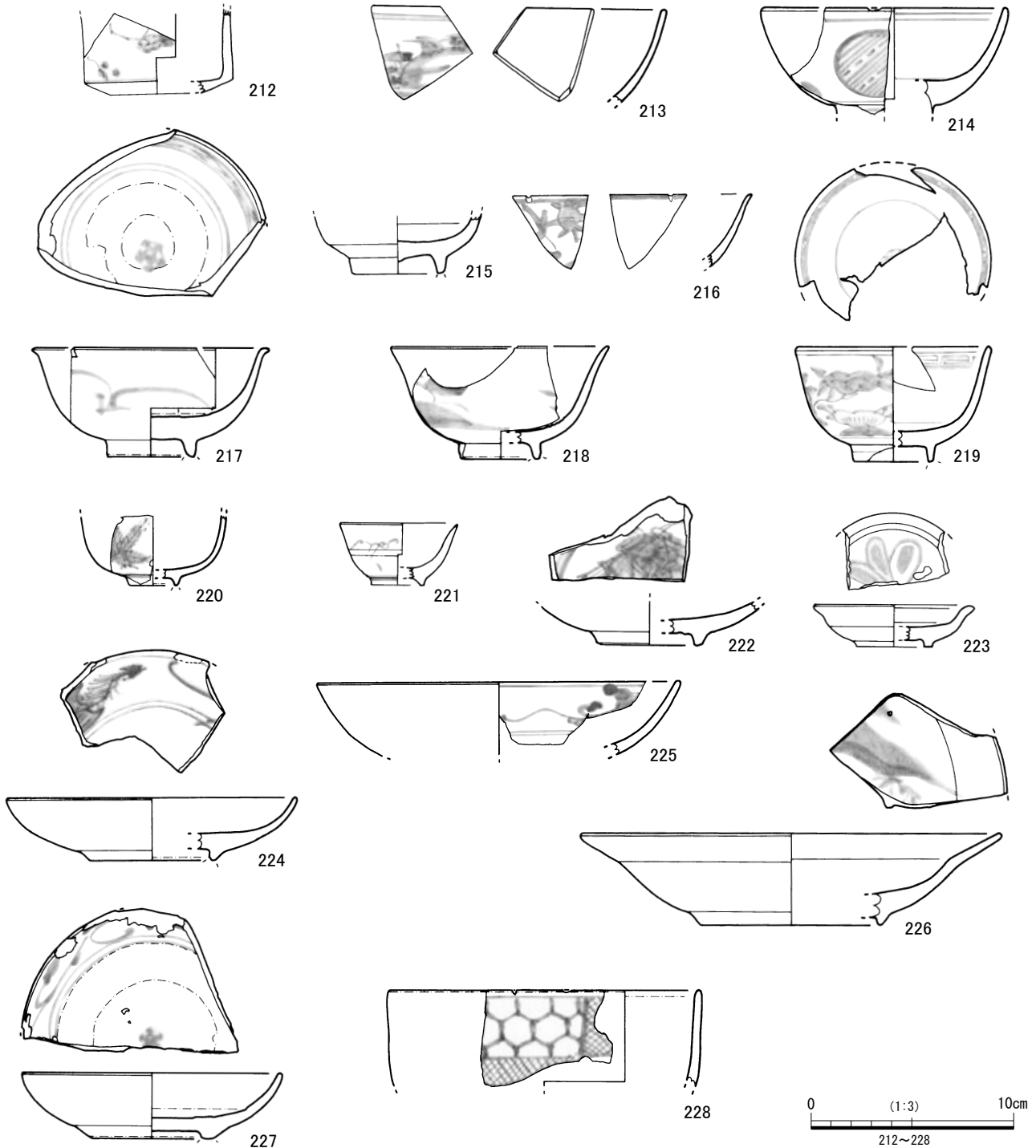
(2) 遺物

近世に該当する出土遺物は、肥前磁器、肥前系の磁器、

薩摩磁器、肥前陶器、薩摩産陶器等が419点出土した。そのうち、59点を図化した。

ア 磁器 (第30・31図)

212～216は肥前磁器の碗である、212は筒形碗である。213は丸碗で、楼閣山水文が描かれる。214はくらわんか碗で、丸文が描かれる。215は白濁した釉がかかる碗の



第30図 近世の出土遺物①

底部である。陶器の可能性もある。216は薄手の端反碗である。217は肥前系のくらわんか碗で、端反碗である。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、その中央に矮小化したコンニャク印判五弁花が見られる。218、219は薩摩磁器である。218の内面には幅広の蛇の目釉剥ぎが残る。219は端反碗である。220は薄手で腰の張った小碗である。221は薩摩磁器と思われる小杯である。呉須で文様が描かれるが、発色が悪い。

222～227は肥前磁器の皿である。222は初期伊万里で高台径が小さい。223は青磁の小皿である。見込みには片切彫りで花文が施される。高台内面は露胎する。226は折縁の大皿である。胎土は灰白色を呈する。227は見込みに蛇の目剥ぎが施され、その中央に矮小化したコンニャク印判五弁花が見られる。

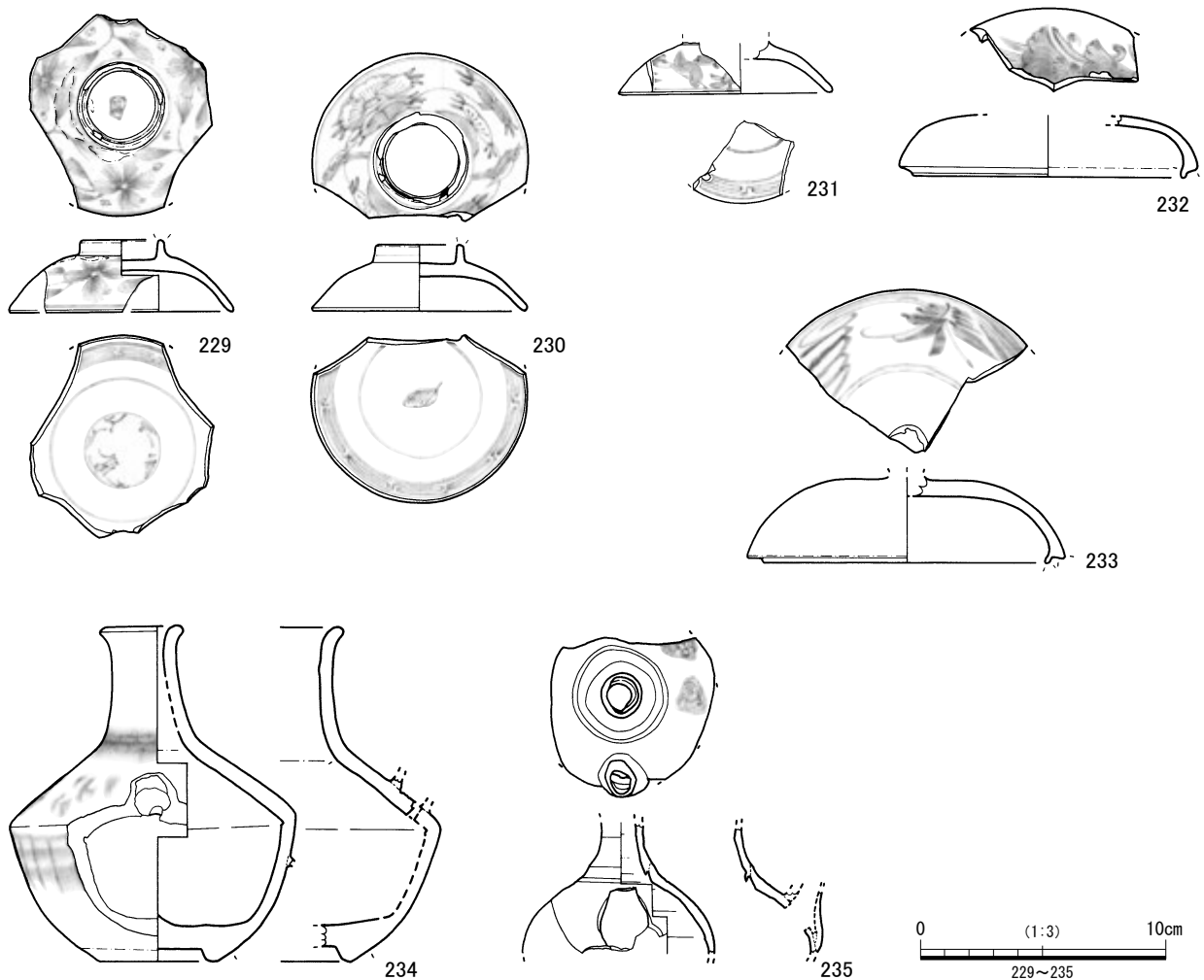
229～233は蓋である。229～231は端反碗の蓋である。3点とも口縁部内面に描かれている文様が類似する。229の内面天井部には、簡略化された松竹梅文が描かれる。230・231は同種類の蓋である。232・233は段重の蓋である。身受け部分は釉剥ぎされる。

234は薩摩磁器の酒器（からから）である。透明釉は青みがかり、呉須は発色が悪い。注口が付くが欠損している。235は小形の瓶である。注口が有り、液体を注ぐために使用された物である。胴部と頸部を別々に作り、接合しており、痕跡が明瞭に観察される。

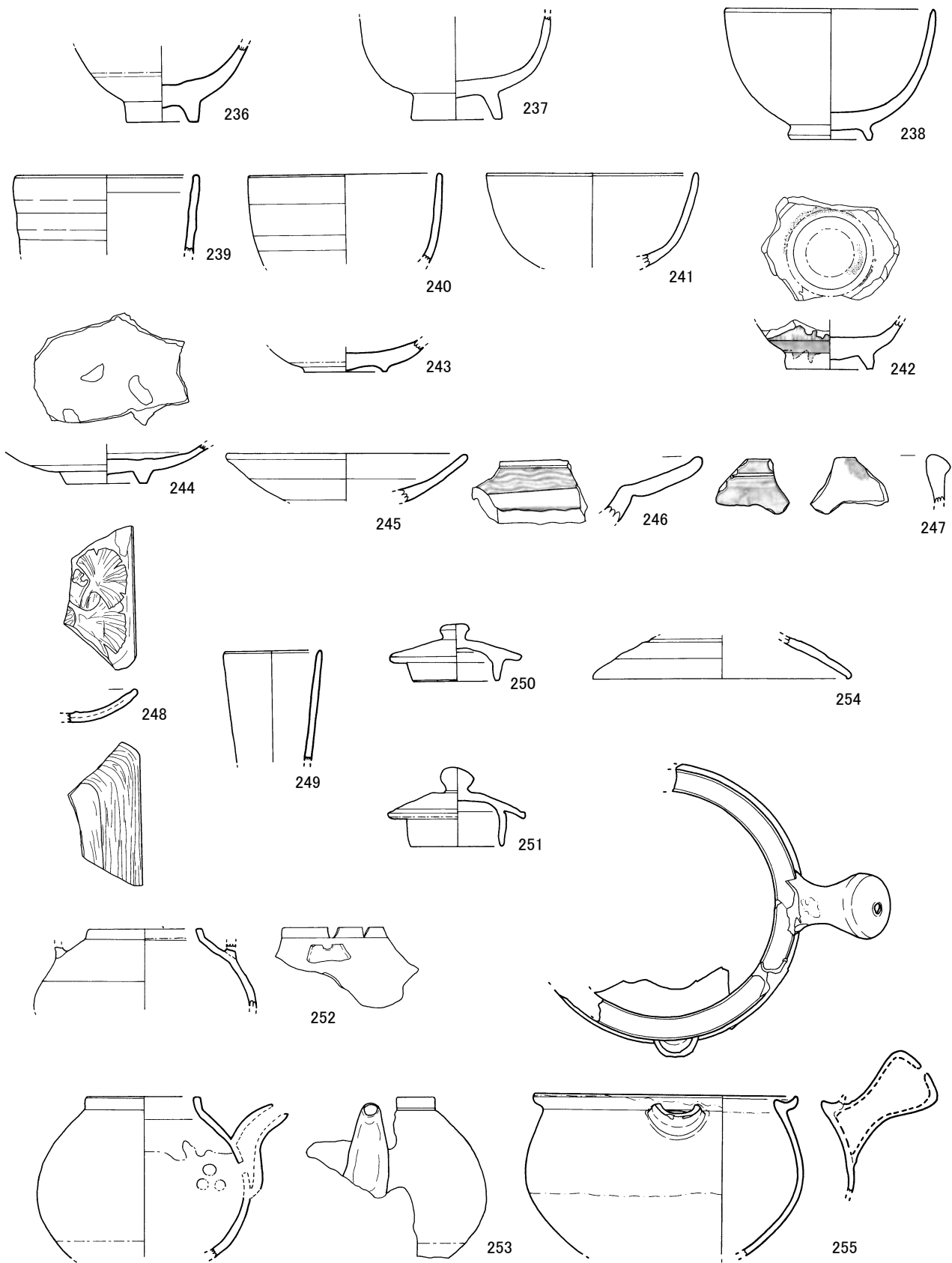
イ 陶器（第32～34図）

236～240は肥前陶器の碗である。236・237は唐津焼で、236は黒褐色の釉が外面腰部までかかる。237は呉器手の碗である。238・239は内野山系の碗で、239は外面に銅緑釉がかかる。240は京焼風陶器の口縁部と思われる。241・242は薩摩焼で龍門司系の碗である。241は口縁部で、黒褐色の飴釉がかかる。242は碗の底部で、白化粧土の上から飛び鉋が施され、褐釉がかけられる。見込みには蛇の目剥ぎが見られる。高台は露胎する。

243は肥前陶器で唐津焼の皿で、高台が低い。244は見込みに砂目の痕跡が残る。245は肥前内野山系の皿である。246は肥前陶器の大皿である。折れ縁部分の上面には、白化粧土による刷毛目が施される。247は薩摩焼で、龍門司焼の三彩である。白化粧土の上から緑釉と褐釉が



第31図 近世の出土遺物②



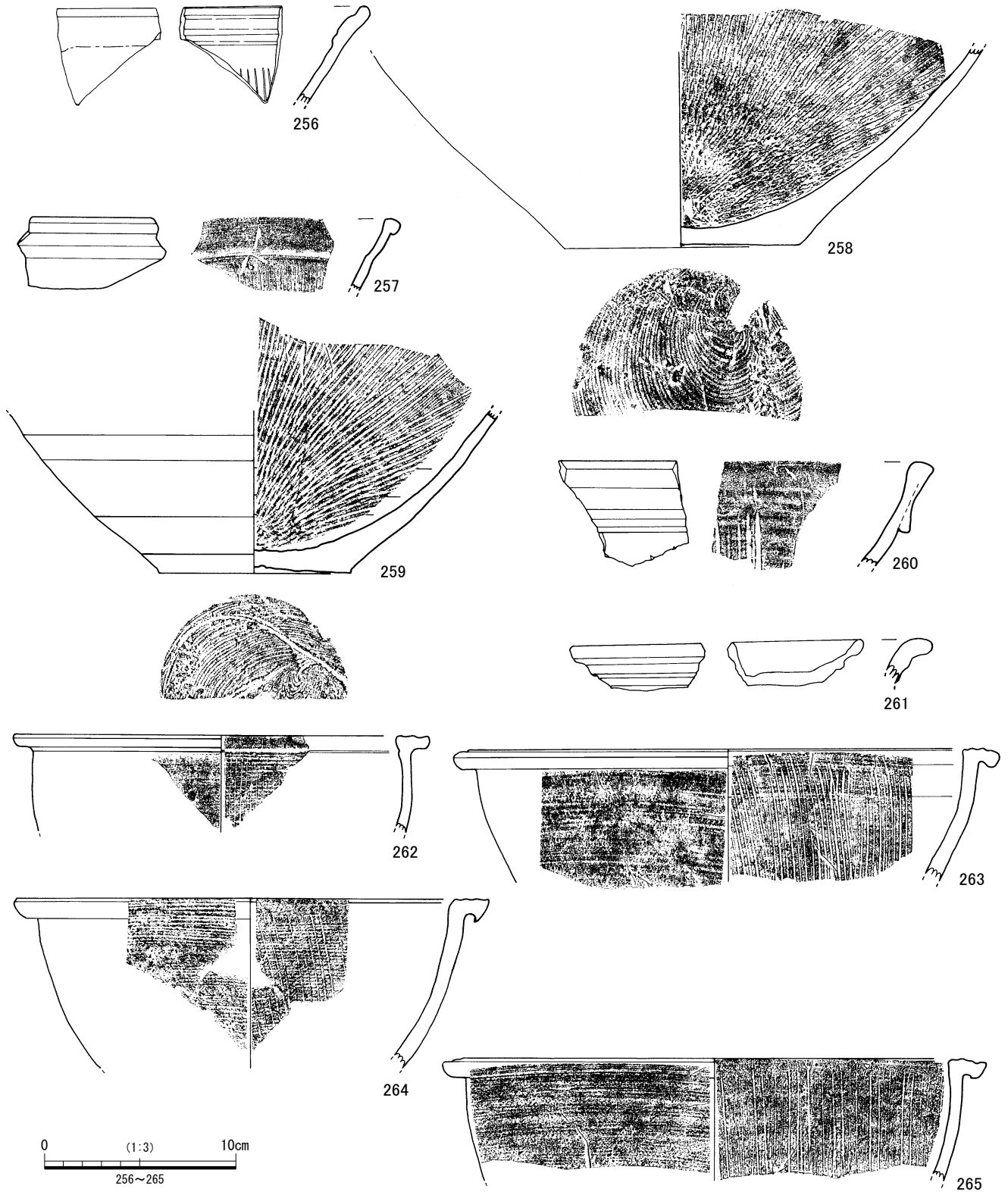
第32図 近世の出土遺物③

かけられる。248は変形皿である。内面は陽刻の松の文様が見られる。外面は細い筋状の調整痕が残る。火を受けており詳細は不明であるが、日用品ではなく特別な日に使用された皿と考えられる。

249は一般的に白薩摩と呼ばれる白色陶胎の資料であ

る。口縁部が筒状を呈する瓶等と思われる。

250～253は苗代川系の資料である。250・251は土瓶蓋で、上面に鉄釉がかかる。252・253は土瓶である。254・255は関西系陶器の蓋と片口鍋である。254の蓋は255とセットになるものと考えられる。255は胴部中位以



第33図 近世の出土遺物④

下が露胎し、煤が付着する。

256～259は肥前陶器の播鉢である。256は褐釉が口縁部上位のみ施釉される。257は口縁部上位に釉薬がかかると思われるが、はっきりとしない。258・259は底部である。底面の切り離しは糸切りである。260～265は薩摩焼で苗代川系の播鉢である。260は薄い釉薬がかかる。初期薩摩焼と考えられる。261は苗代川産の播鉢の口縁部である。262は口縁部が逆L字状を呈する。外面にはへら状工具による横位の調整痕が見られる。263～265はL字状につくられた口縁部の端部がやや下垂する。外面にはへら状工具による横位の調整痕が見られる。

266は蓋としたが、鉢の可能性もある。口唇部に貝目が残る。

267・268は甕の口縁部、269は壺の口縁部である。3点とも堂平窯の製品と考えられる。口唇部には貝目が残る。

270は瓦質土器の火鉢である。内外面とも黒色に燻されており、外面には陽刻が施される。内面はへら状工具による横位の調整痕が残る。

6 近代以降の調査

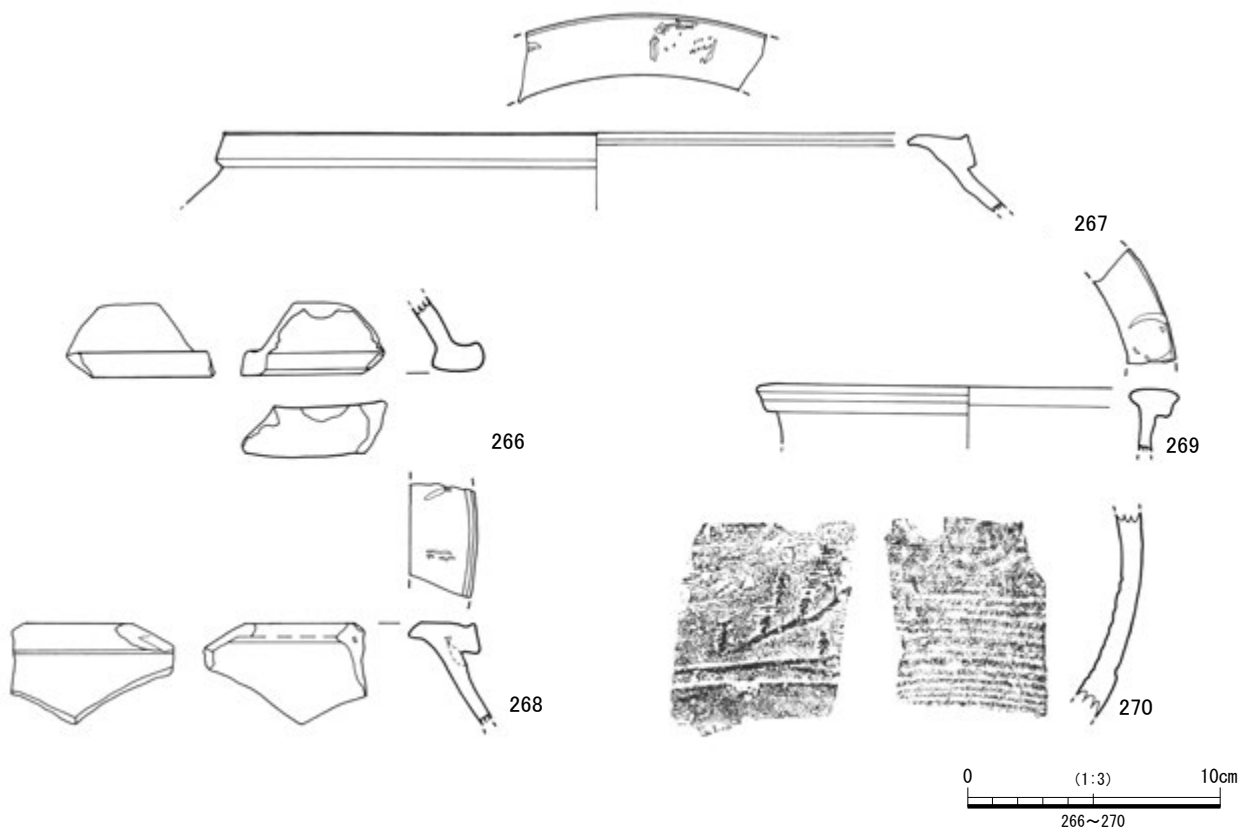
(1) 調査の概要

近代以降の遺構については攪乱として処理し、遺物については残存状況が良いものや、時期の特定ができるものを中心に取り上げを行った。

ア 陶磁器 (第35・36図)

近代以降については、磁器製の碗や皿、馬の尻がい、大甕等が764点出土した。そのうち、29点を図化した。

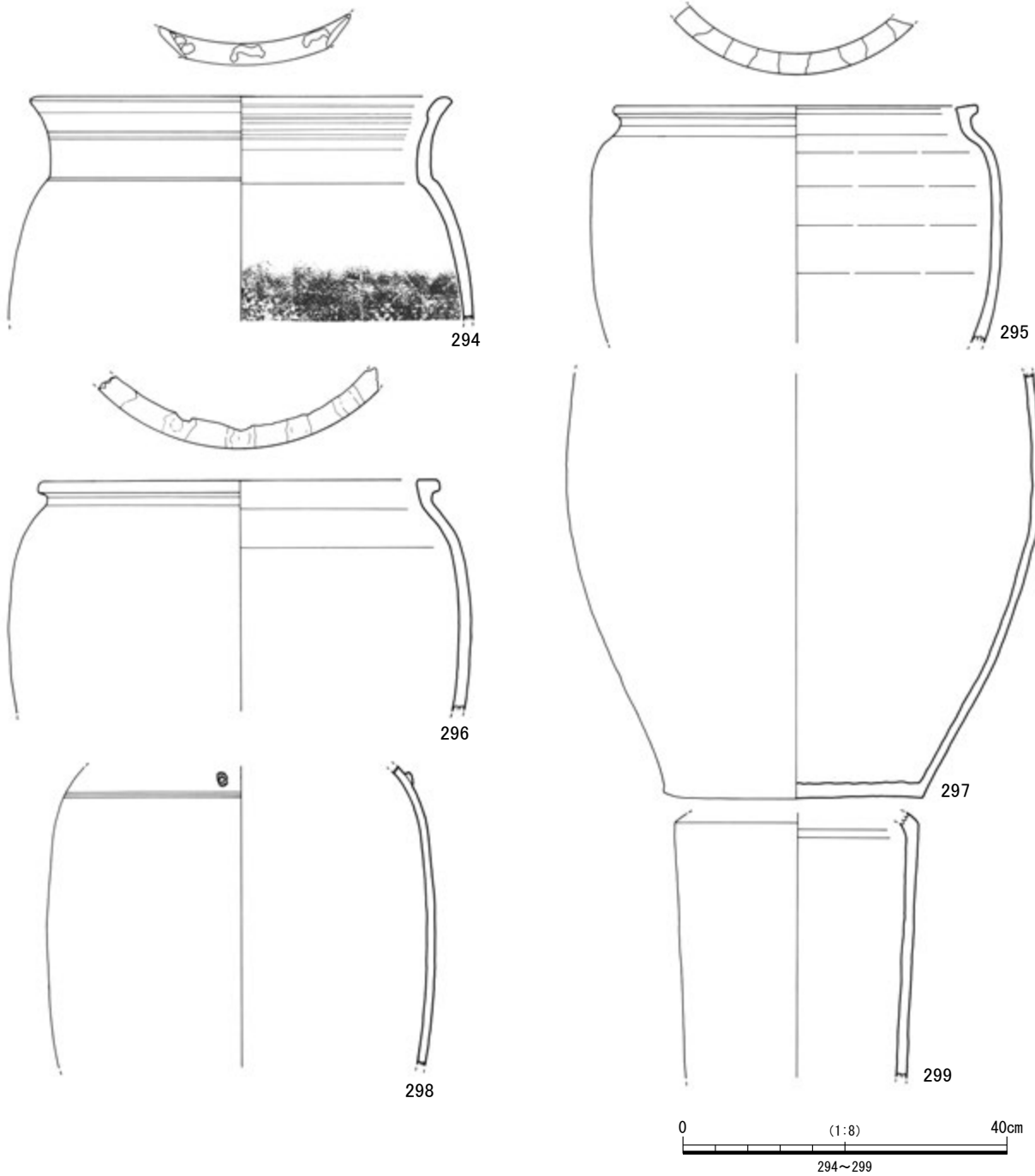
271は銅版転写の碗である。272・273は小碗である。272は色絵、273は戦争に関連した碗である。274・275は瀬戸焼の小杯である。276は磁器で、小片の為に器種は不明である。外面に「〇〇クルゾト勇マシク」の文字がプリントされている。277は大東亜戦争出征記念の小杯である。278・279は銅版転写の皿である。278は蛇の目凹型高台をなす。280は銅版転写の鉢である。蛇の目凹型高台をなす。281は磁器製の極小小杯で、おままごと道具の可能性が考えられる。282～285は細いパイプ状の形状を呈する磁器製品である。馬の尾尻に回した綱に通して、綱が食い込むのを防ぐ為の道具と思われる。283・285は外面が緑色に彩色される。286・287は磁器製の人形である。286は手に日本国旗を持った女学生像である。上絵付けが施されていたと思われるが、剥落している。287は仏像等の頭部と思われる。288～293はメンコである。288～290は内外面に釉薬のかかる陶器を加工したもので、同一個体から作られている。291～293は瓦を加工したものと考えられる。293は燻しが両面に残っているが、291・292は磨られて残っていない。294～297は肥前陶器の大甕である。294～296の口唇部には、窯詰めの際の目跡が残る。



第34図 近世の出土遺物⑤



第35図 近代以降の出土遺物①



第36図 近代以降の出土遺物②

第12表 中世～近代遺物観察表①

挿図番号	掲載番号	出土区	種別	分類	層位	法量				胎土の色調	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
35	282	C-5	磁器	しりがい	カクラン	5.70	1.35	1.35	7.47	灰白	
	283	C-5	磁器	しりがい	カクラン	4.90	1.35	1.30	8.38	白	
	284	C-3	磁器	しりがい	カクラン	4.90	1.36	1.37	7.41	灰白	
	285	D-5	磁器	しりがい	カクラン	4.80	1.20	1.20	6.05	灰白	
挿図番号	掲載番号	出土区	種別	分類	層位	法量				胎土の色調	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
35	288	D-4	陶器	メンコ	I b	2.82	2.58	0.83	8.79	明黄褐	
	289	D-4	陶器	メンコ	I b	2.92	2.75	0.72	7.68	明黄褐	
	290	D-4	陶器	メンコ	I b	2.99	2.3	0.69	7.89	明黄褐	
	291	C-5	瓦	メンコ	I b	4.89	4.95	1.76	43.89	灰白	瓦質
	292	C-4	瓦	メンコ	カクラン	4.29	4.44	1.15	22.93	灰	瓦質
	293	C-5	瓦	メンコ	I b	6.76	6.05	1.64	64.47	灰白	瓦質

イ ガラス製品 (第37図)

I層及び撈乱中から多数のガラス製品が出土した。そのうち、時期がある程度特定でき、かつ近代の可能性のある遺物について報告する。

300は「邑田資生堂」の目薬瓶である。色調はコバルト色半透明である。コルク栓で肩部はいかり肩、胴部横断面は円形を呈する。昭和以降のスポイト一体型ではないため、明治～大正時代の製品と考えられる。301は医療用薬瓶である。色調は無色透明である。コルク栓で肩部はなで肩、胴部横断面が楕円形を呈する。胴部に目盛線及び「竹内醫院」の陽刻がある。302は、同様のタイプだが、病院や医院名の陽刻がない。いずれも昭和前期の製品と考えられる。303は「大日本麦酒」のビール瓶と思われる。破片資料であるが「DAINIPP…」の陽刻が確認できる。大日本麦酒は1906(明治39)年～1949(昭和24)年に操業していた会社であるため、同時代の製品と考えられる。304はホーユー株式会社が製造した「元祿」の染料瓶である。色調は無色透明である。コルク栓で、肩部はなで肩、胴部横断面は円形を呈する。胴部中に「元祿」「定量」、胴部下半に「GENROKU」の陽刻がある。1921(大正10)年に製造を開始し、1960(昭和35)年からプラスチック製に変わったため、その間の製品と考えられる。305は井田京栄堂が製造した「メヌマポマード」の整髪料瓶である。色調は白色不透明である。スクリュー栓で、形態は円筒形を呈する。底部に「メヌマ」の陽刻がある。戦前～戦後の製品である。306は一般用薬瓶である。色調はコバルト色半透明である。扁平で、胴部横断面は楕円形を呈する。胴部に「奥田薬房」の陽刻がある。307は原沢製造株式会社の「ユキワリミン」の化粧水瓶である。色調は青緑色半透明である。スクリュー栓で、肩部はなで肩、胴部横断面は楕円形を呈

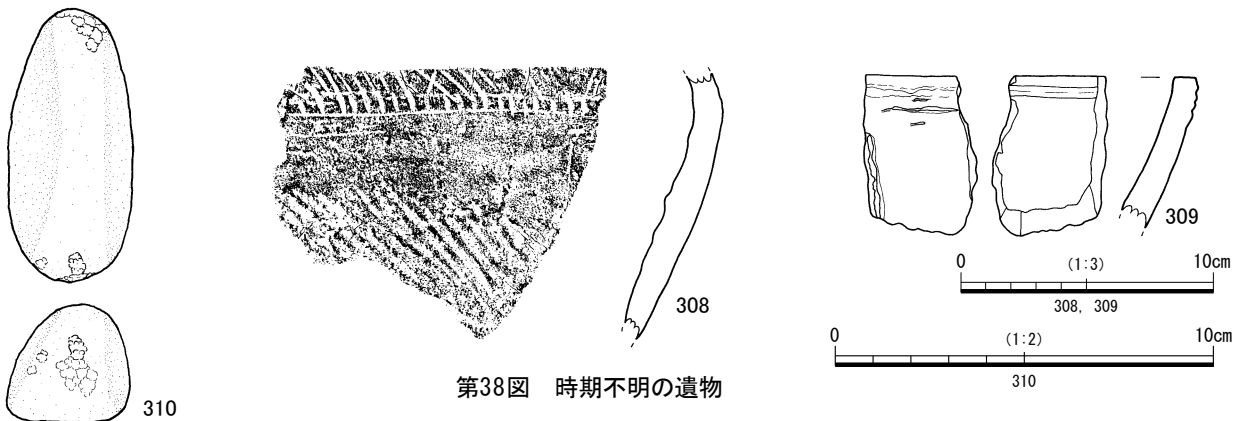
する。胴部に縦ラインが入る。胴部及び底部に「ユキワリミン」の陽刻がある。1934(昭和19)年から販売している。

7 その他 (第38図)

時代不明の遺物のうち、特徴的な遺物を3点報告する。308は器種不明の胴部である。外面をみると、上位に古墳時代の成川式土器の突帯と似た文様をヘラ書きしている。ヘラ書き文様については、始めに横線を引き、その線を下限に左上から右下方向の斜線を約5mm間隔で引き、その上から横線や逆方向の斜線を重ねている。また下位には縄文時代の貝殻条痕と類似する文様が左上から右下方向へ施されている。内面は摩滅が激しい。309は鉢の口縁部で、口唇部及び内面はミガキ調整で、特に口唇部は滑らかに仕上げられている。外面はナデ調整であり、口縁部附近に横位の刺突が施されている。口縁部形態や調整技法は、縄文時代早期の下剥峰式土器や桑ノ丸式土器に類似する一方、外面の文様がはっきりせず、焼きが近代以降の焼き物に似ている。310は敲石である。安山岩製で端部に敲打痕がみられる。



第37図 近代以降の出土遺物③



第38図 時期不明の遺物

第14表 時期不明遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
38	308	一括	C-5	カクラン	不明	胴部	-	-	-	貝殻条痕、ナデ	ナデ、指押さえ	灰赤2.5YR5/2	橙2.5YR6/6	
	309	一括	C-5	1b	不明	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙5YR6/6	明褐灰5YR7/2	
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区 遺構名	層位	器種	石材	法量				備考			
							最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)				
38	310	一括	C-5	カクラン	敲石	安山岩	6.94	3.21	3.95	87.63				

第IV章 自然科学分析

第1節 里町遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

鹿児島国際大学

中園 聡・平川ひろみ・太郎良真妃・若松花帆

1 はじめに

鹿児島県伊佐市大口所在の里町遺跡の発掘調査で出土した古代（平安期）とみられる須恵器について、蛍光X線分析による胎土分析を実施した。

本遺跡のものは、産地試料に対して消費地試料と位置付けられる。今回の分析は、個々の須恵器試料がどこで生産されたものかという産地推定を主目的とした。ここでは分析データを窯跡の産地データと比較することにより、産地推定を試みた結果について述べる。

2 試料と方法

里町遺跡から出土した古代の須恵器のうち、30点が分析に供された（第15表、第39図）。いずれも破片として出土したものである。各試料について一般的な観察と写真撮影を行い、「焼成グレード」（春成・中園ほか2016）も記載した。その後、可能な限り表面を傷めないよう破断面等から分析に必要な適量を採取した。

分析は三辻の方法を基本とした（三辻1983, 2013；三辻ほか2013）。試料表面をモニターで研削し、焼成・埋没環境による付着物や汚染を除去した。タングステンカーバイド乳鉢で微粉碎し、試料は105℃で2時間乾燥させた。リング法（内径20mm、厚さ5mmのPVCリング）で加圧成形（約130kN）した。鹿児島国際大学考古学実験室の波長分散型蛍光X線分析装置（リガク製ZSX100e）を使用し、Rh管球（管球出力3.0kW）、分光結晶RX25、LiF1、真空条件下で、X線出力（50kV、50mA）で8元素（Na、Mg、K、Ca、Ti、Fe、Rb、Sr）を各元素60秒間測定した。各元素のX線強度（Net強度）を、同時に同条件で測定した岩石標準試料JG-1を使った標準化値を分析値として示す（第15表左）。

分析データの解析にあたっては、いわゆる長石系因子としてK、Ca、Rb、Srの4元素について、実績あるK-Ca、Rb-Sr両分布図の視察を行うとともに、他の元素も検討した。さらに多変量解析を行った。後述する比較データと共通する6元素（Na、K、Ca、Fe、Rb、Sr）を用い、主成分分析（PCA）、クラスター分析（標準化ユークリッド距離と群平均法を使用）、マハラノビス距離（ D^2 距離）による2群間判別分析である。判別分析は産地データ間の組み合わせを変えながら繰り返して実施したが、紙幅の都合で一部のみ示す。また、各未知試料（里町遺跡試料）について各産地データの重心からの D^2 距離を求めた。

比較に使用したデータは、九州の古代を中心とする産地データであり、多くは三辻利一博士による分析値（Mg、Tiを除く前記6元素）を使用した。三辻博士と我々の間での分析値の互換性については、共同研究により既に確認済みである。

鹿児島県内では古墳時代の窯跡は未発見であるが古代には存在し、分析により化学特性が判明しているものがある。本遺跡に近い伊佐市菱刈田中に所在する岡野窯跡群は8世紀末～9世紀代とされ、調査された窯のうちⅢ号窯のものが分析されている（三辻1983）。薩摩国分寺の瓦を供給した薩摩川内市の鶴峯窯跡群でも瓦窯のほか須恵器窯も検出されている。8世紀前半とされるやや古いものである。未分析のため薩摩国分寺跡の瓦のデータで代用するが、4試料しかないため詳細な検討は将来に委ねる。また、南さつま市にある平安期中岳山麓窯跡群の分析データも使用するが、三辻の方法で分析されたデータは多くなく、窯跡群全域をカバーできない点に留意する必要がある。

鹿児島県内では以上の3か所が知られているのみである。なお、大隅国分寺の瓦を供給した始良市の宮田ヶ岡瓦窯跡では須恵器生産はないようであるが、ここでは瓦のデータを用いて参考までに比較する。

熊本県（肥後）では、多くの須恵器窯が知られている。北部の荒尾窯跡群、中部の宇城窯跡群、下益城窯跡群^{注1}、南部の球磨窯跡群のデータを用いる。

福岡県北部（筑前）の牛頸窯跡群は、陶邑を除く古墳時代西日本における大規模生産地であるが、平安時代には生産がかなり縮小するため本遺跡にある可能性は低いと思われる、参考として比較するにとどめる。時期による基本的な化学特性の変動は小さいが、ここではより近い時期のデータとして奈良時代のもので代用する。福岡県南部（筑後）の八女窯跡群のデータも用いる。ただし、6世紀半ばから8世紀までとされ、本遺跡のものより基本的に古いと思われる。

宮崎県内（日向）は、北部の苺田窯跡群、宮崎市の松ヶ迫窯跡群、下村窯跡群の各窯跡データと比較する。なお、福岡県東北部～大分県北部（豊前）には天観寺窯跡群とその周辺の窯跡群や、伊藤田窯跡群などがあるが、時期的条件や分析値から本遺跡試料に含まれる可能性は低いと判断した。また、念のため南島須恵器のカムイヤキのデータとも比較したが、Fe値の高さなど特徴ある化学特性に合致するものはなかった。

注1) 宇城地方の窯跡群の区分名称は学史的に一定しない。ここでは三辻博士のデータ上の名称「下益城窯跡群」（萩尾大溜池窯跡、八ノ瀬戸窯跡、善助山窯跡）を用いる。

第15表 試料と分析結果一覧

分析No.	No.	グリッド	層	取上No.	器種	外面	内面	事前所見	焼成グレード*	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti
luk16-0558	1	D5	I b	一括	甕	平行	ナデ?		須恵質B~C	0.391	0.271	1.53	0.787	0.394	0.132	0.931	4.06
luk16-0559	2	D4	I b	一括	甕	平行	平行		須恵質B~C	0.398	0.142	1.56	0.492	0.479	0.271	0.793	3.41
luk16-0560	3	D4	I b	一括	甕	平行	平行		須恵質B~C	0.661	0.204	1.32	0.618	0.833	0.547	0.759	2.48
luk16-0561	4	D3	I b	一括	甕	平行	同心円	5と同一個体か	須恵質B~C	0.482	0.249	2.09	0.643	0.506	0.300	0.868	3.10
luk16-0562	5	D4	攪乱	一括	甕	平行	同心円	4と同一個体か	須恵質B~C	0.491	0.237	2.08	0.643	0.500	0.306	0.900	3.11
luk16-0563	6	C4	II	3	甕	平行	同心円		須恵質A	0.331	0.138	2.34	0.519	0.355	0.197	0.960	3.94
luk16-0564	7	D5	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質A	0.315	0.401	1.78	0.500	0.526	0.281	0.763	3.36
luk16-0565	8	D4	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質A	0.328	0.431	1.83	0.525	0.555	0.304	0.692	3.27
luk16-0566	9	C4	II	156	甕	格子目	同心円		須恵質B~C	0.414	0.328	2.46	0.456	0.558	0.382	1.063	3.24
luk16-0567	10	C4	I b	一括	甕	格子目	平行		須恵質B~C	0.414	0.139	1.59	0.485	0.543	0.255	0.666	3.28
luk16-0568	11	C5	攪乱	一括	甕	格子目	平行		須恵質A~須恵質B	0.371	0.118	1.63	0.455	0.345	0.234	0.714	3.56
luk16-0569	12	D3	攪乱	一括	甕	格子目	平行? のちナデ		須恵質A	0.393	0.301	1.72	0.507	0.493	0.303	0.762	2.96
luk16-0570	13	C4	II	23	杯身	回転ナデ	回転ナデ		須恵質B~C	0.414	0.264	2.56	0.513	0.536	0.305	0.897	3.30
luk16-0571	14	C4	II	一括	杯身	回転ナデ	回転ナデ		須恵質B~C	0.385	0.076	2.05	0.408	0.222	0.192	0.728	4.17
luk16-0572	15	C4	II	一括	杯身	回転ナデ	回転ナデ		須恵質B~C	0.451	0.120	2.89	0.577	0.264	0.112	1.046	4.48
luk16-0578	16	D4	I b	一括	甕	格子目	平行	20と同一個体か	須恵質B~C	0.443	0.242	1.42	0.528	0.626	0.263	0.845	2.96
luk16-0579	17	D4	I b	一括	甕	格子目	平行		須恵質B	0.468	0.239	1.36	0.564	0.427	0.276	0.874	3.44
luk16-0580	18	C4	攪乱	一括	甕	格子目	平行		須恵質B~C	0.353	0.168	1.98	0.408	0.412	0.261	0.541	4.55
luk16-0581	19	D3	I b	一括	甕	格子目	平行		須恵質A~B	0.337	0.148	1.59	0.446	0.415	0.188	0.777	3.81
luk16-0582	20	C4	I b	一括	甕	格子目	平行	16と同一個体か	須恵質B~C	0.429	0.243	1.44	0.512	0.608	0.278	0.801	2.97
luk16-0583	21	D5	I b	一括	甕	格子目	平行		須恵質C	0.509	0.122	1.60	0.543	0.329	0.303	0.679	3.28
luk16-0584	22	C5	II	111	甕	格子目	同心円		須恵質B~C	0.441	0.139	1.52	0.511	0.625	0.274	0.709	3.19
luk16-0585	23	C4	II	一括	甕	格子目	同心円 +平行		須恵質B~C	0.428	0.159	1.55	0.503	0.580	0.275	0.667	3.17
luk16-0586	24	C4	II	88	甕	格子目	平行		須恵質B~C	0.446	0.140	1.55	0.518	0.611	0.279	0.713	3.19
luk16-0587	25	D5	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質B	0.617	0.218	1.67	0.860	0.475	0.413	1.122	2.95
luk16-0588	26	D3	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質B~C	0.457	0.148	1.56	0.524	0.629	0.284	0.728	3.15
luk16-0589	27	D3	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質C	0.443	0.236	1.33	0.486	0.747	0.343	0.762	2.95
luk16-0590	28	D4	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質B~C	0.419	0.139	2.92	0.567	0.293	0.194	0.856	4.15
luk16-0591	29	D4	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質B~C	0.453	0.141	1.54	0.537	0.650	0.286	0.737	3.10
luk16-0592	30	D4	I b	一括	甕	格子目	同心円		須恵質A	0.401	0.118	1.53	0.476	0.922	0.192	0.894	3.62

*春成・中国ほか(2016)に準拠 境界値 Critical Distance (p=0.05) D²(X) <

3 結果と考察

K-Ca, Rb-Sr両分布図に、本遺跡試料のプロットと産地データの領域を重ねて示した(第40図)。この図から、里町遺跡の試料は分布が散漫で、かついくつかのまとまりがあることが視認でき、複数の産地があることが示唆される。そこで、九州内の産地データとの比較を試みた。両分布図の視察、各分析値の検討(第41図)のほか、主成分分析(第42図)、クラスター分析(第43図)、2群間判別分析およびその際に計算された里町遺跡の各試料と各産地データの重心からのD²距離(第15表右)を総合し所見を記述する。なお、クラスター分析はその特性から過信できないため参考程度とする。

4 第1段階の産地推定

まず、基本的に分析値に基づき、産地推定を試みる。

1は、K値がやや低めでRb値が高いというやや特異な値をとり、今のところ該当する産地データはない。Rb-Sr値が球磨領域(下り山窯跡群等)に近いが、K値が同領域より小さいため別産地と考えられ、産地不明とせざるをえない。クラスター分析で結合距離が長いこともそれを支持する。

2は、下益城群と荒尾群のいずれの重心からもD²距離が非常に近い(えほぼ同じ)であるため、どちらが産地か判別できない。下益城産か荒尾産としておく。

3は、両分布図で中岳領域に含まれる。ただし、本試料はNa値が試料中で最も高く、Na値がやや高い中岳群と比較しても若干ではあるが高い。そのため中岳群の重心からのD²距離はやや遠いが、中岳窯跡群全体のデータが把握されていない現状では、十分にありえる差といえる。他の元素も中岳群と同様の挙動をとる。主成分分析の布置やクラスター分析からも中岳産とみるのが妥当である。

4・5は、分析値が全元素にわたってよく似ており、主成分分析の布置やクラスター分析の結合距離も近い。同一個体の可能性を示唆する類似度である。外面タタキ痕や色調の類似性も勘案すると、その可能性は十分あり、少なくとも同一窯と見なせる。両試料は、D²距離が複数の窯と近いが、両試料をペアとしてとらえれば下益城群か八女群と判断でき、より可能性が高いのは下益城群である。分析値においては、八女群より下益城群とするほうが妥当とみられることから、下益城産の可能性がより高いと判断しておきたい。

D ² (岡野)	D ² (中岳)	D ² (宮田ヶ岡)	D ² (下り山)	D ² (宇城)	D ² (下益城)	D ² (荒尾)	D ² (八女)	D ² (牛頭)	第1段階推定結果	第2段階推定結果
256.4	145.3	114.8	149.7	166.5	45.5	60.3	80.9	299.0	産地不明	産地不明
94.8	44.6	81.2	32.3	28.5	5.0	5.0	20.3	23.0	下益城産か荒尾産	下益城産か荒尾産(岡野産の可能性)
1673.5	33.1	341.9	316.4	304.5	76.7	63.6	355.0	79.5	中岳産	中岳産
151.9	45.9	57.0	19.2	35.4	7.3	16.8	10.1	42.7	下益城産	下益城産(岡野産の可能性), 5と同一個体?
152.7	56.8	60.9	16.7	28.5	6.5	15.8	11.9	36.2	下益城産	下益城産(岡野産の可能性), 4と同一個体?
176.7	80.9	30.8	33.3	5.9	15.8	25.6	13.3	39.3	宇城産	宇城産(岡野産の可能性)
121.4	451.9	16.4	101.8	292.6	57.1	88.7	45.3	232.5	産地不明	産地不明, 8と同一窯?
151.0	516.4	17.2	114.7	344.3	62.5	99.9	46.2	251.6	産地不明	産地不明, 7と同一窯?
330.8	280.1	74.2	72.2	108.7	22.8	28.6	20.8	43.7	産地不明	産地不明
331.8	21.9	102.5	52.4	60.6	12.8	12.5	42.4	18.8	荒尾産(あるいは下益城産)	荒尾産(あるいは下益城産)
26.4	98.2	81.2	34.1	10.8	9.3	4.0	11.1	53.6	荒尾産(あるいは宇城産, 下益城産)	荒尾産(あるいは宇城産, 下益城産)→岡野産の可能性大
39.4	127.0	35.7	48.9	87.9	22.3	32.0	8.9	101.9	産地不明(八女産?)	産地不明(八女産?)(岡野産の可能性)
418.4	87.5	63.7	46.6	54.7	6.4	18.2	18.6	18.4	下益城産	下益城産
196.4	173.2	98.4	83.8	38.8	22.0	8.5	20.3	77.1	荒尾産	荒尾産
481.4	239.3	62.9	79.0	35.6	23.4	33.4	7.9	38.9	産地不明(八女産?)	産地不明(八女産?)
474.0	65.2	87.8	57.3	88.5	15.5	13.9	40.7	24.8	荒尾産(あるいは下益城産)	荒尾産(あるいは下益城産), 20と同一個体? 同一窯?
43.7	54.3	65.3	53.4	45.3	15.6	27.0	6.2	107.2	八女産	八女産(岡野産の可能性)
44.5	51.1	69.2	38.9	10.0	10.4	4.3	14.4	40.7	荒尾産?(あるいは宇城産, 下益城産)	荒尾産?(あるいは宇城産, 下益城産)(岡野産の可能性)
26.2	39.9	71.8	16.9	10.3	8.3	7.6	13.8	42.8	荒尾産?(あるいは宇城産)	荒尾産?(あるいは宇城産)→岡野産の可能性大
392.1	74.1	82.8	53.1	75.6	12.3	12.5	34.8	25.4	荒尾産(あるいは下益城産)	荒尾産(あるいは下益城産), 16と同一個体? 同一窯?
113.5	272.0	104.1	67.6	60.4	9.2	6.2	17.4	77.5	荒尾産(あるいは下益城産)	荒尾産(あるいは下益城産)(岡野産の可能性)
707.9	15.6	132.5	100.3	117.7	30.9	28.3	79.0	28.2	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る)	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る) 24と同一個体?
427.4	18.6	105.1	62.2	70.0	14.9	13.0	50.0	15.9	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る)	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る) 22・24と同一窯?
624.2	15.8	125.3	90.0	105.7	27.1	24.6	73.9	23.8	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る)	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る) 22と同一個体?
260.8	598.5	154.2	27.5	71.8	31.8	59.0	45.3	103.9	球磨産	球磨産
703.4	12.8	130.1	97.2	113.1	29.9	25.9	81.8	23.8	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る)	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る) 29と同一個体?
1250.0	155.1	162.5	154.0	164.5	34.6	28.5	109.4	24.6	産地不明	産地不明
518.2	191.2	65.7	74.2	17.5	16.7	43.3	10.2	41.3	産地不明(八女産?)	産地不明(八女産?)
829.1	13.8	134.6	117.4	135.3	40.0	35.2	90.4	31.3	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る)	荒尾産(あるいは下益城産, 中岳産の可能性も残る) 26と同一個体?
4325.1	227.9	361.9	544.9	602.9	226.4	204.0	279.3	310.3	産地不明	産地不明
28.6	30.8	18.3	18.0	15.6	14.8	16.4	16.0	13.3		

6は、D²距離からみて宇城市群に近く、八女群にもやや近い。分析値は宇城市群にほぼ一致し、主成分分析やクラスター分析の結果も矛盾しない。一方、八女領域よりK値がやや低く領域のごく周辺に位置する。したがって、宇城産の可能性が高いと考える。

7・8は、赤みの強い胎土で分析値もほぼ似ているが、同一個体というより同一窯の製品とみるのが適当であろう。D²距離は宮田ヶ岡群から比較的近いが、境界値 critical distance (p=0.05)に近い。また、両分布図で宮田ヶ岡領域の周辺～外側に位置するほか、Fe値が低すぎるなど合致せず、主成分分析やクラスター分析でも異なる。いまは産地不明としておきたい。

9は、D²距離が八女群、下益城市群、荒尾群に相対的に近いが境界値を超えており、分析値もそれらの領域の周辺部に位置するため、産地不明とせざるをえない。

10は、荒尾群、下益城市群からのD²距離が近く、中岳群とも比較的近いが、各元素の分析値との比較では中岳領域からやや外れる。そのため荒尾産か下益城産とみられるが、分析値は荒尾群の範囲に比較的良好に収まり(第41図)、荒尾産の可能性が高いと考える。

11は、D²距離が荒尾群に非常に近く、下益城市群、宇城

群、八女群にも近い。岡野群にもやや近く、多くの窯との類似性を示す。各元素の分析値は岡野群にもある程度近いが現状の岡野領域からずれ、八女群からもずれる。分析値は荒尾群をはじめ、宇城市群、下益城市群に近い。以上から、可能性が最も高いのは荒尾産で、あるいは宇城産、下益城産の可能性も考えられる。

12は、D²距離が八女群に近い。ただし、八女群の産地データは領域が広く、本試料は八女領域の主体からずれて布置される。したがって統計的・確率的には八女群に近いが、八女産と即断するのは危険である。八女産の可能性を残しつつ産地不明としておく。

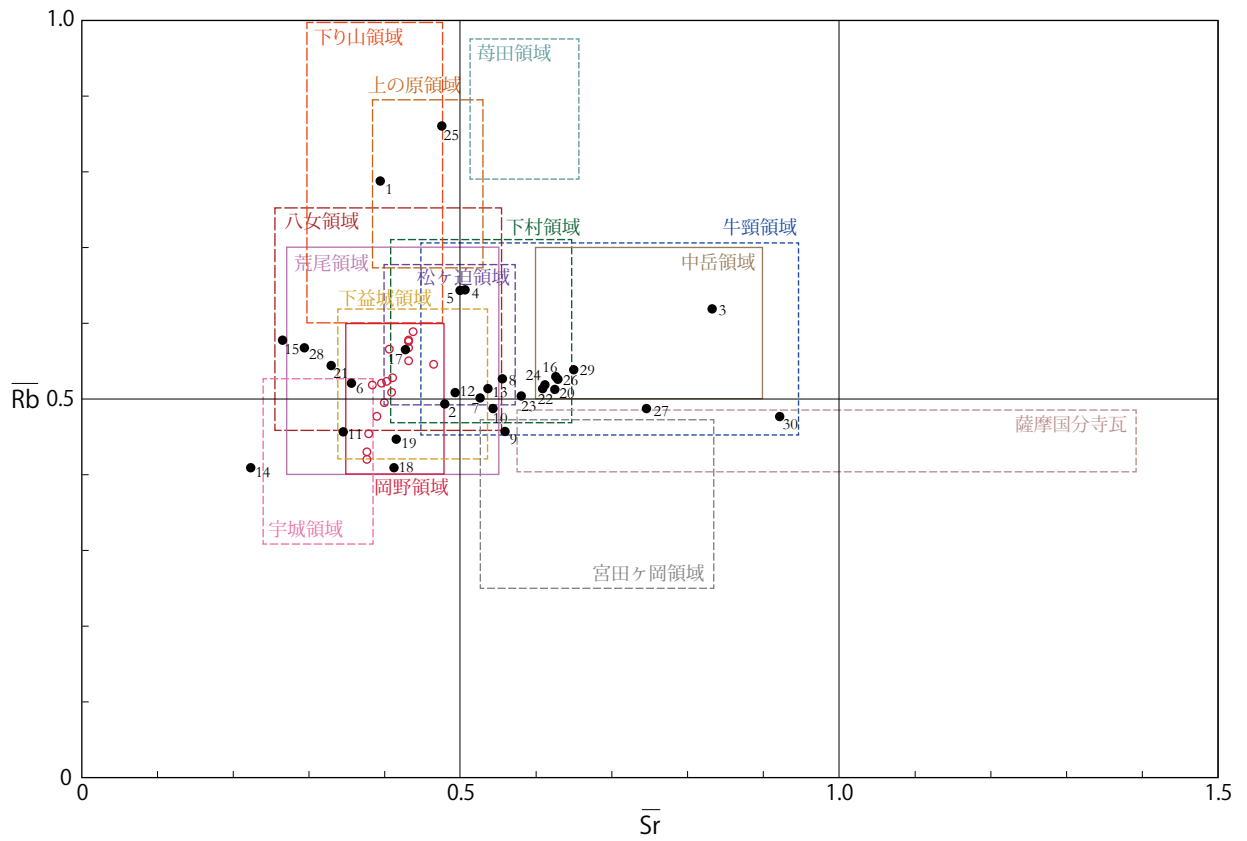
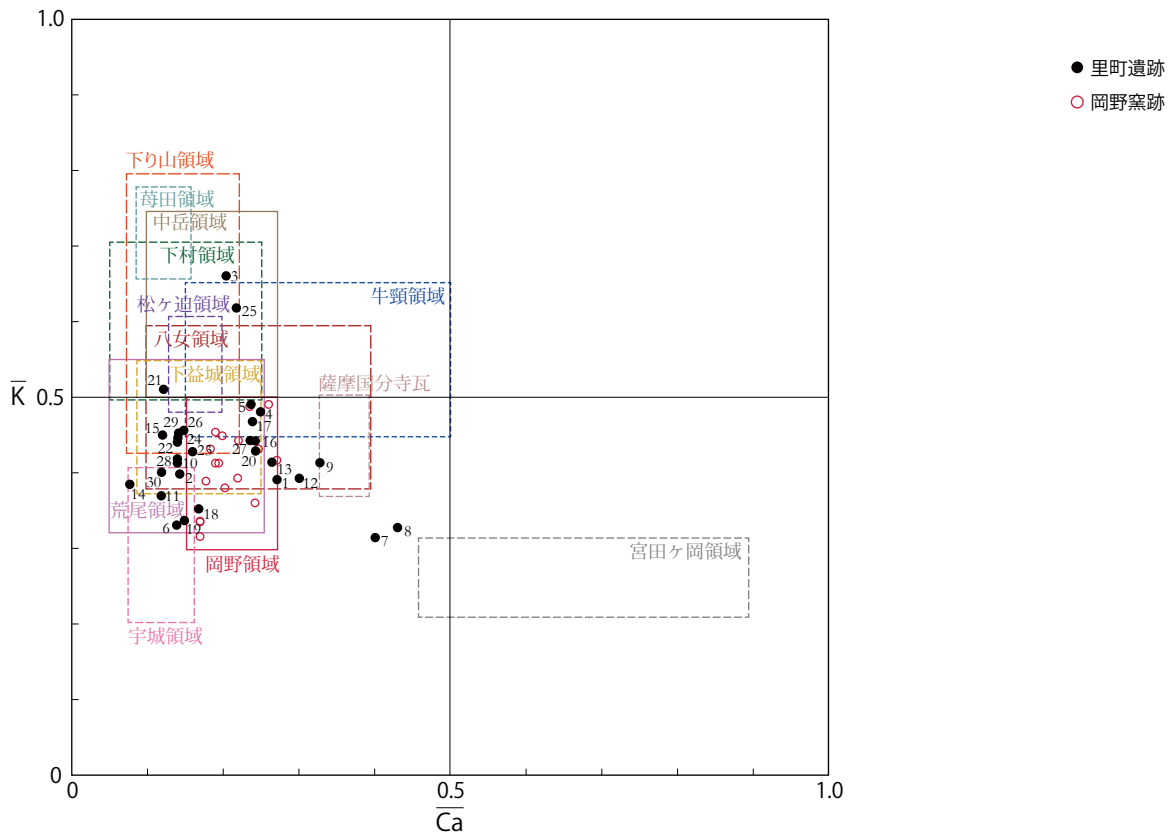
13は、D²距離が下益城市群に近い。荒尾群、八女群、牛頭群にも相対的に近いが、境界値を超えてしまっている。分析値で比較的良好に合うのも下益城市群であり、ここでは下益城産と判断しておく。

14は、D²距離が荒尾群に近い。両分布図でも荒尾領域と重なっており、各元素の分析値は荒尾群の範囲内としてよいと思われる。荒尾産と判断する。

15は、D²距離が八女群に近い。各元素の値は概ね八女領域と重なるか近い値を示すが主体から外れ、主成分分析では八女群と離れて布置される。12と同様、八女産の

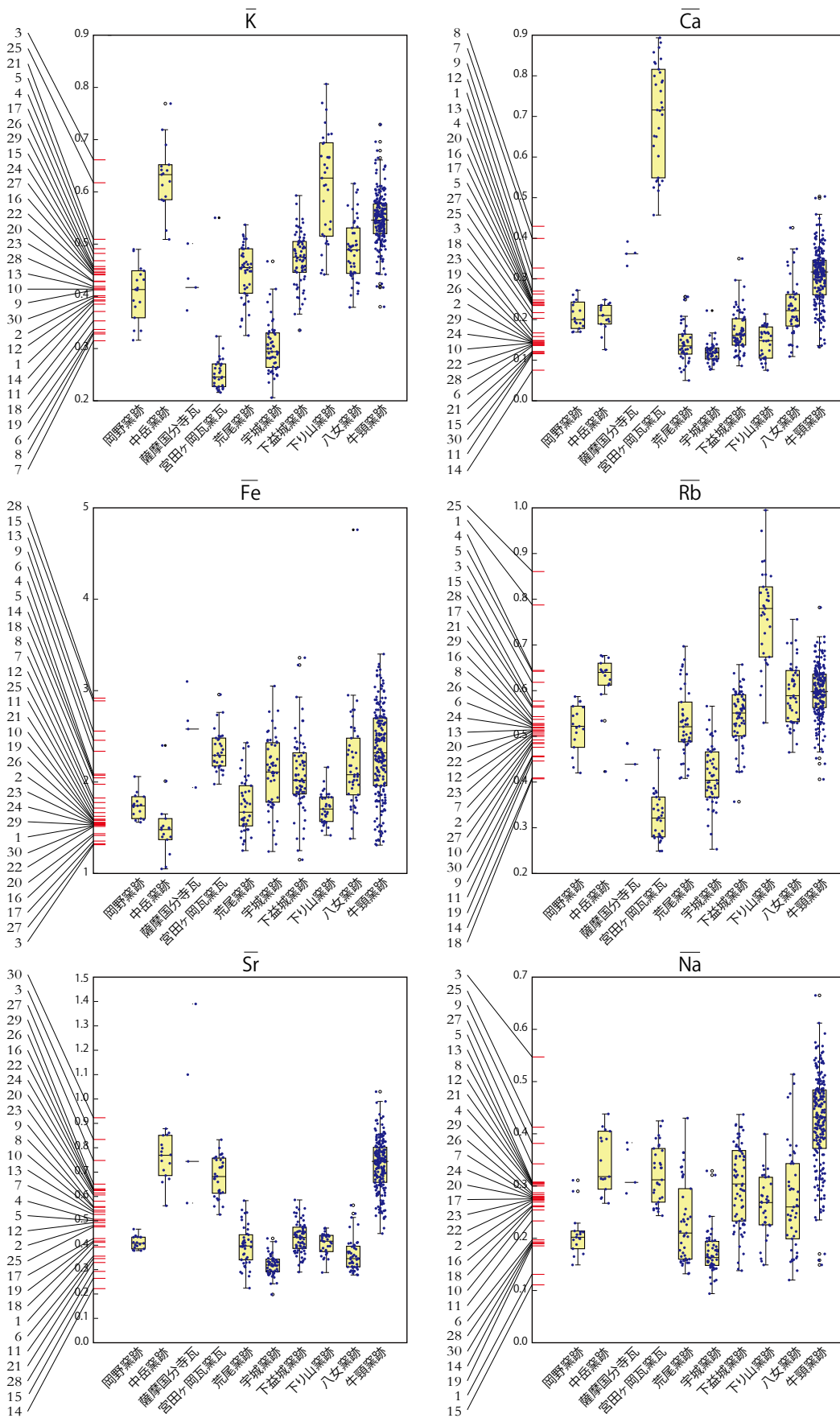


各破片から適量の試料を採取した。
 第39図 分析に用いた須恵器片



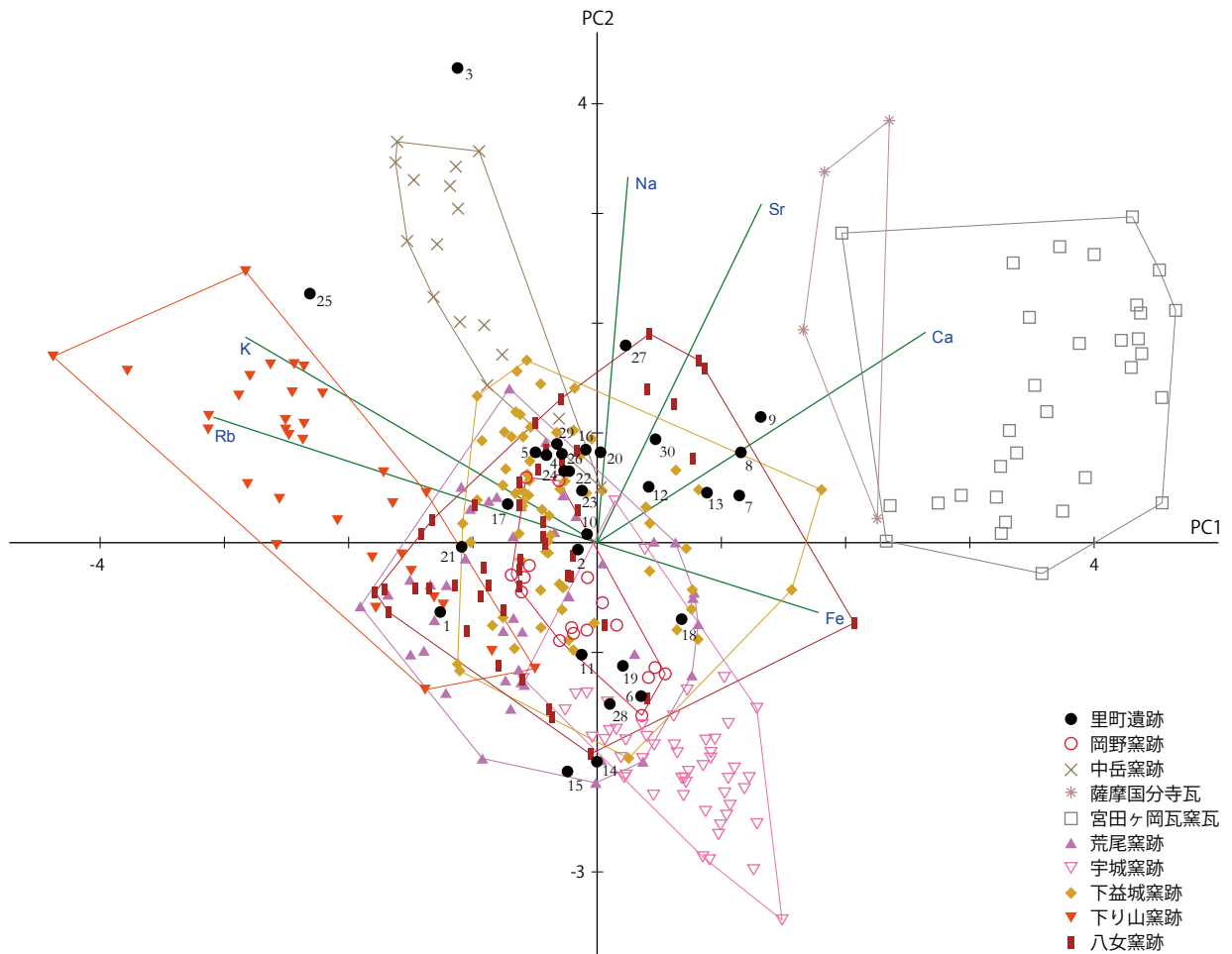
矩形で各産地領域を表示。黒丸は里町遺跡の試料、赤丸は岡野窯跡群Ⅲ号窯の試料の布置。
薩摩国分寺瓦の領域は、特にサンプル数が少ないため参考として表示。

第40図 K-Ca, Rb-Sr 分布図



各図に里町遺跡の各試料の分析値を赤線で表示し、左端に試料番号を付した。薩摩国分寺瓦はドットと平均のみ表示。

第41図 元素ごとの各産地との比較



第42図 主成分分析結果

可能性を残しつつ産地不明としておく。

16・20は、分析値が全元素にわたってよく類似し、諸特徴も似ている。小片のため、同一個体か、別個体で同一窯の製品かは判断できないが、主成分分析、クラスタ分析も両者の類似度の高さを示す。D²距離は荒尾群と下益城群に近いが、16は下益城群の境界値をわずかに超え、20は範囲内だが周辺である。荒尾群と下益城群の2群間判別分析では重複領域が大きく、本来判別が難しい。以上を考慮して荒尾産（あるいは下益城産）としておく。

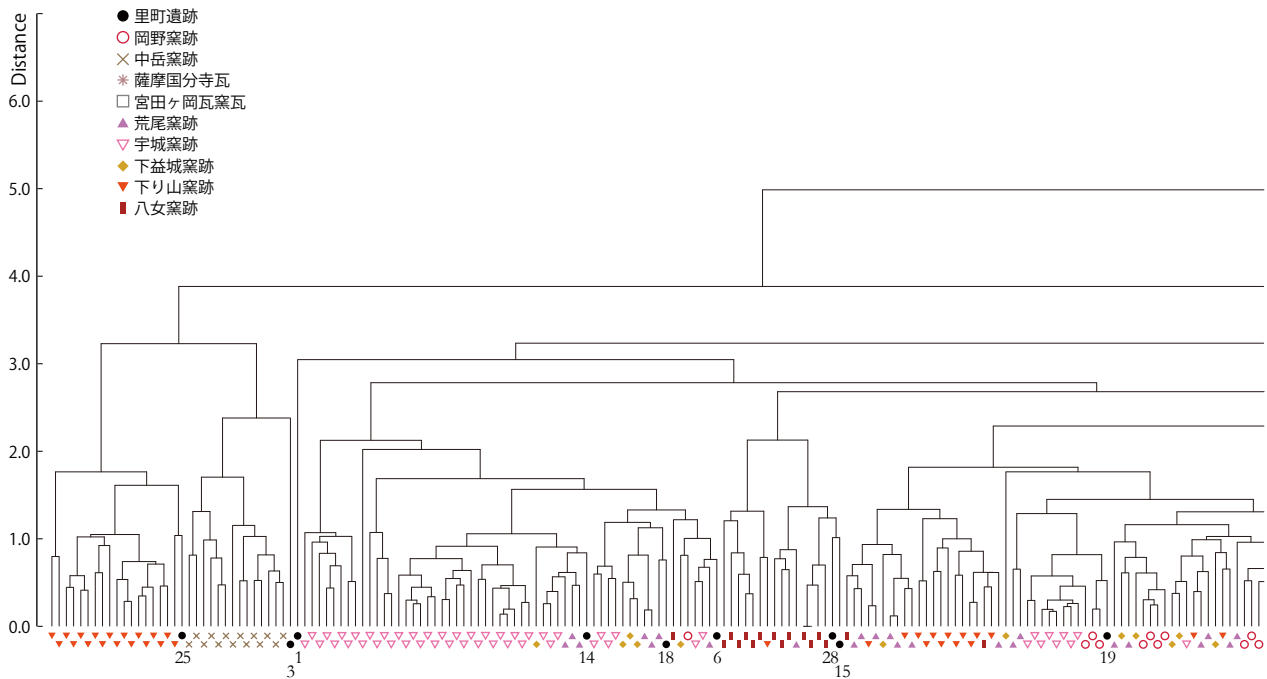
17は、D²距離が八女群に近い。分析値もほとんどの元素が八女の領域内であるが、Fe値が八女群のほぼ最小値にあたる。なお、下益城群のD²距離も比較的近く、次の候補になるが、下益城群の境界値をわずかに超えている。クラスタ分析では岡野群の一部と組み合わさるが、以上より八女産と考える。

18は、D²距離が荒尾群と非常に近く、宇城市群、下益城群、八女群にも近い。分析値ではRb値が八女群の最小値より低い。これらの産地候補のうち荒尾領域は矛盾がなく、可能性が最も高いとみられるが、宇城、下益城が産地である可能性は否定できない。

19は、D²距離が最も近いのが荒尾群であるが、宇城市群、下益城群、八女群にも近く、下り山群や岡野群にもやや近い。このように類似を示すものが多く、産地候補が多い。両分布図では下益城と八女領域からやや外れ、宇城領域のごく周辺に布置されている。下り山領域とは明らかに布置が異なるが、岡野領域には近いところに布置される。最も可能性の高い荒尾群との比較でも、K、Rb値が低めで、荒尾領域でも分布密度が低い周辺部にあたり、にわかには荒尾産とすることはできない。以上より、荒尾産の可能性が高いと考えるが、候補のうち宇城産の可能性もあると判断する。

21は、D²距離が荒尾群にかなり近く、下益城群にも近い。両分布図ではどちらの群にも含まれるが、各元素の分析値は荒尾群と矛盾せず、下益城群は概ねよいがFe値がやや低い。ここでは、荒尾産の可能性が高いが下益城産の可能性も残ると判断する。

22・23・24の3片は分析値が類似しており、特に22と24の類似度は同一個体としてよいほどである。少なくとも、いずれも同一窯と見なせる。主成分分析、クラスタ分析の結果もそれを支持する。いずれも色調が類似し、細かな格子目タタキであることも共通する。当て具



第43図 クラスタ分析結果

痕は22が同心円，24が並行で異なるが，23は両者が共存しており，本来2種類の当て具痕をもつ個体である可能性が考えられる。D²距離は共通して中岳群に近いが，わずかに分析値が異なる23は荒尾群が最も近く，下益城群にも近い。このように分析値のわずかな差による影響が大きく，判断が難しい。中岳と荒尾間の判別図を確認すると，22・24は中岳群に判別されたがごく周辺部であり，23は荒尾群との重複領域に入る。両分布図上の布置の視察では，中岳領域のごく周辺か，外れるようにも見える。中岳窯跡群全体の化学特性が把握されていない現状では，中岳産の可能性はあるとすべきだが，各元素の分析値は中岳領域からやや外れ，荒尾群に近く，次いで下益城群に近い（第41図）。よって，中岳産の可能性も残るが荒尾産の可能性が高く，次いで下益城産と考える。

25は，D²距離からみていずれとも異なるが，下り山群と相対的に近い。主成分分析，クラスタ分析でも下り山群に近い。K，Rb値が高い点など下り山窯跡群を包括する球磨窯跡群と類似するが，下り山群よりCa，Sr値がやや高く，球磨窯跡群の上の原窯跡群にむしろ類似すると思われる（三辻・山本1982）。ここでは球磨産と判断しておく。

26・29は，分析値が類似しており同一個体の可能性もある。少なくとも同一窯とみてよい。主成分分析，クラスタ分析の結果もそれを支持する。D²距離は中岳群に近い。分析値では，中岳群にある程度類似した化学特性をもつことが理解できるが，K，Rb，Feなどが中岳群の最小値付近あるいはそれを逸脱するという難点がある。

分析値はむしろ荒尾群に近く，次いで下益城群に近い（第41図）。中岳産の可能性も残るが，荒尾産の可能性が高く，次いで下益城産と考える。

27は，Sr値が高いなど特徴があるが，分析値もD²距離も合致するものがなく，産地不明である。

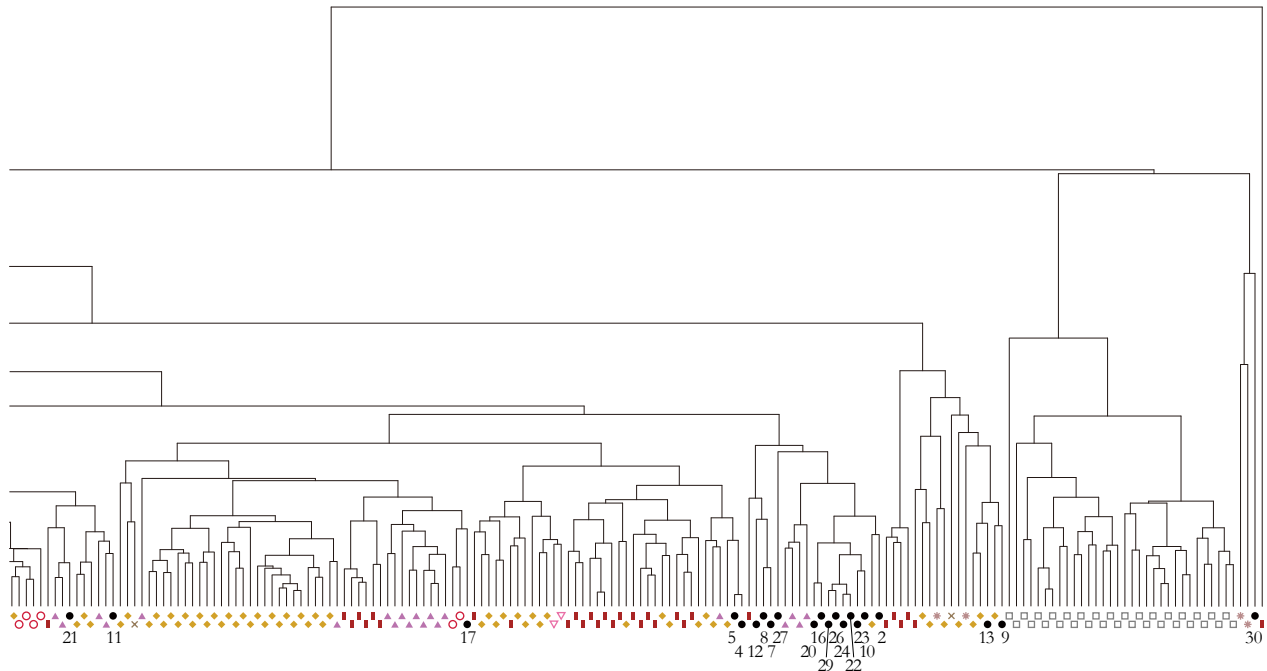
28は，D²距離が八女群に近い。宇城群，下益城群からもやや近いが，境界値を超えている。分析値は八女群のごく周辺部にあたるものが多く，八女産と見なすのは躊躇する。今のところ産地不明とし，八女産の可能性があるとこの程度に考えておく。

30は，Ca値が小さくSr値が大きい特徴をもち，分布図の視察でもD²距離でも該当なしである。クラスタ分析の結合距離もかなり長い。産地不明である。

以上のうち，10，22・23・24と26・29は全元素にわたり類似することから，同一産地と考える。中岳産の可能性も残すが荒尾産の可能性が高く，あるいは下益城産とも考えられたものがある。これらはクラスタ分析で密接なサブクラスターを形成しており，同一個体を含みつついずれも同一産地であることを示唆する。なお，中岳群とはクラスターが異なり，これらを集団としてとらえると，今のところ中岳産よりも荒尾産，あるいは下益城産の可能性が高いと思われる。

5 第2段階の産地推定

以上では，里町遺跡のコンテクストを抜きにして定性・定量的に産地推定を行った。本遺跡は薩摩，大隅，肥後が境を接する地域にあり，日向とも一部を接する。本遺跡に最も近い須恵器窯跡は岡野窯跡群であり，本遺



跡から東南東へ直線距離で約6kmという近さである。また、本分析に関係する主要なものとして、南西約75kmに中岳山麓窯跡群、北東約30kmに肥後（熊本県）南部の球磨窯跡群（下り山窯跡まで約26km）などがあるが、本遺跡と大臼盆地を共有する岡野窯跡群は、地理的にみて本遺跡に供給された須恵器産地の第一候補と考えるのが自然であろう。

ところが、以上の解析からは意外にも、高確度で岡野産と推定できるものはなかった。ただし現段階で、ないと断じるのは困難である。岡野の分析値はばらつきが小さいうえ、熊本県諸窯等の化学特性と類似点があるという特性に起因する可能性があるからである。分析値のばらつきの小ささは、Ⅲ号窯しか分析されておらず、それ以外の窯や他の地点のデータが含まれていないことに起因する疑いがある。Ⅲ号窯の群から西へ約500mの地点でも窯が発見されており、岡野窯跡群一帯にはさらに未発見の窯が存在する可能性が十分あると考える。それらを分析すれば化学特性はⅢ号窯のものと類似するであろうが、全体としての岡野領域は現状より多少広がると予想される。

ここではそのような観点から、あくまで予測ではあるが、長石系4因子による両分布図（第40図）と分析値に戻って可能性を再検討してみる。第40図に矩形で示した岡野領域のすぐ外側に布置されるのは2, 4, 5, 6, 11, 12, 17, 18, 19, 21である。これらは将来、岡野産と判断される可能性のある候補と考えておく。11と19は現状でもD²距離が境界値以内であり、中でも可能性が高いと思われる。将来の検討を俟ちたい。

すると、本遺跡の試料中で岡野産は、最大で見積もれ

ばこれら10点、同一個体の可能性を考慮すれば9個体であり、全個体の3割5分程度、産地不明の個体を除く5割強程度ということになる。逆に最も少なく見積もれば、上記の可能性の高いものを入れてもわずか2個体のみとなり、約1割ということになる。実際はその幅のどこかということになる。以上が第2段階の産地推定の結果であり、第15表右端に示した。

福岡県牛頸窯跡群（奈良時代）と別途比較したが、試料中に化学特性が一致するものはなかった。福岡県南部の八女窯跡群は、第15表右に示したようにD²距離が近いものが含まれ、八女窯跡群の近辺か化学特性が近い別の窯のものと考えられる。それらは鹿児島県内の窯とは類似していないが、球磨窯跡群以外の熊本県北部～中部の窯跡とは、ある程度の類似性が看取できるため、産地データがなくここで用いなかった窯や未発見の窯などの製品の可能性も残ると思われる。また、それら熊本県北部・中部の窯跡間では化学的傾向が概ね類似するという特徴がある。判別分析で重複領域に分布してしまうものも多少はあるため、相互判別は必ずしも明瞭ではない。各産地の窯跡は未調査のものも多く、今後の分析で推定産地が絞られたり異同が生じたりする可能性がある。現段階では個別の産地の追及だけでなく、マクロな視点で荒尾、下益城、宇城窯跡群の製品を胎土分析から、「熊本県北部～中部諸窯」として包括的にとらえてみるのもよからう。その際、福岡県南部が含まれることも留意しておくべきである。

すると本遺跡試料のうち熊本県北部・中部諸窯産は15個体、最も少なく見積もって（岡野の可能性が多少とも考えられるものを除いて）7個体になる。産地推定がで

きたもののうち、最大で約9割、最も少なくとも約4割が熊本県北部・中部諸窯産ということになる。なお、熊本県南部の球磨産とみられる化学特性を示すものは1個であった。また、薩摩半島西部の中岳産は、可能性のあるものを含めて最大4個体、うち、ほぼ確実とみられるものが1個体であった。産地推定できたもののうち中岳産は、最大でも2割強、少なく見積もると1割にも満たないということになる。岡野産と合わせて鹿児島県内に産地が求められるものは、最大でも7割程度で、その場合熊本県北部・中部諸窯産が2割程度である。また、少なく見積もれば「岡野産の可能性大」としたものを含めても鹿児島県内産が2割弱で、その場合熊本県北部・中部諸窯産が7割5分程度に達する。球磨産を加えて2割5分～8割程度が県外産（ほぼ熊本県）ということになる。

以上で推定した割合は上限～下限の幅が広く、その間に落ち着くとしても、かなりの高率で熊本県内諸窯の製品があることになる。熊本県（肥後）地方は、9世紀代には九州の須恵器生産の中心地であったと考えられ（石木2007）、そのことと本遺跡が熊本県に近いという地理的位置に関係するといえるかもしれない。なお、試料中に宮崎県内の製品はなかった。北薩内陸部にある本遺跡のそのような状況に対し、薩摩半島西部の南さつま市にある上水流遺跡では、同様の蛍光X線分析の結果、地元の中岳産須恵器が多くを占めることがわかっている（三辻2008）。中岳窯跡群と1km以内という非常に近い距離にあり、特に密接な関係が考えられよう。こうした遺跡間の差が地域間の差としてとらえられるのか、何を反映するのかについては、今後の課題といえる。

そうした重要な課題に因應するためにも、岡野窯跡群についてⅢ号窯以外の窯についても分析し産地データの整備をすることが望まれる。また、岡野窯跡群の全体的な分布を押さえる必要もあろう。そして他の産地を含む基本的な産地データが整備された後、本遺跡のデータはあらためて比較されるべきである。

では、岡野窯跡の製品はどこに供給・流通したのであろうか。これまで、胎土の化学特性から岡野窯跡群の製品の可能性が推定されたものとして、霧島市横川町の中尾田遺跡出土例のほか（三辻1983）、既分析データ中に可能性を示唆するものがごくわずかあるだけである。本遺跡では確定するには至らなかったが、可能性が考えられるものを追加できたことになる。いずれにせよ岡野産の出土例は極めて少数にとどまっており、解明が俟たれる。その主因は上述の産地データの問題だけでなく、消費地遺跡での分析例の少なさにもあるとみられ、今後の計画的な分析が必要である。

6 おわりに

以上、里町遺跡出土古代須恵器の蛍光X線分析結果について記した。述べてきたように基礎データとなる産地データの整備をはじめとする課題があり、さらに分析を継続する必要がある。なお、鹿児島県は古代の須恵器窯跡が少ない地域であるが、このことは須恵器の生産・流通・消費に関する実態を比較的把握しやすいことを意味している（三辻ほか2015）。当地の歴史的特性を把握する一方で、そうした実態を胎土分析から明らかにするモデルケースとしての役割を果たすことも期待されよう。

謝 辞

鹿児島県立埋蔵文化財センターの藤島伸一郎氏には分析にあたりご教示とご配慮をいただいた。三辻利一博士には分析データをご提供いただくとともにご教示を得た。記して感謝いたします。

本分析の一部はJSPS科研費・基盤研究（B）（26284124）による。

参考文献

- 石木秀啓（2007）「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制—8世紀以降を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』134：299-353。
- 春成秀爾／中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・若松花帆（2016）「岡山県造山・作山・宿寺山古墳の埴輪の産地研究」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』8：49-81。
- 三辻利一（1983）「岡野Ⅲ号窯，および，その周辺の遺跡から出土した須恵器の胎土分析」『岡野古窯跡群』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書1，pp.31-36，鹿児島県菱刈町教育委員会。
- 三辻利一（2008）「鹿児島県内の窯跡および消費地遺跡出土須恵器，瓦の蛍光X線分析」『上水流遺跡2 古墳時代から近世編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書121，pp.219-221，鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 三辻利一（2013）『新しい土器の考古学』同成社。
- 三辻利一・中園聡・平川ひろみ（2013）「土器遺物の考古学的研究」『分析化学』62（2）：73-87。
- 三辻利一・中園聡ほか（2015）「鹿児島県内の平安時代の須恵器の産地問題—中岳山麓窯跡群，荒尾窯跡群，岡野窯跡群出土須恵器の相互識別と，その供給先—」『情報考古学』21（1・2）：1-10。
- 三辻利一・山本成顕（1982）「元素分析による古代土器の産地推定の実例（4）—熊本県内窯跡出土須恵器—」『古文化財教育研究報告』11：19-25。

第2節 里町遺跡出土土師器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

伊佐市大口に所在する里町遺跡では、これまでの発掘調査により、平安時代とされる土師器などの遺物が出土している。本報告では、出土した土師器の胎土の特性を明らかにすることにより、土師器の製作に関わる資料を作成する。分析では特に土師器表面の色の違いに注目し、色の異なるそれぞれの部位について、蛍光X線分析および薄片作製観察を実施し、その違いの有無を明らかにする。

1 試料

試料は、里町遺跡から出土した土師器片5点である。器種はいずれも壺とされており、高台のついた底部が4点、口縁部が1点である。ここでは便宜上各試料に試料番号1～5までの試料番号を付す。これらのうち、口縁部は試料番号4である。各試料の出土地点、層位などは一覧にして第16表に示す。また、試料の外観は第48図右に示す。

5点の試料のうち、底部の試料4点は、いずれも高台部分とその周縁が赤褐色を呈しており、口縁部の試料は口縁部分が赤褐色を呈している。ここでは、赤褐色を呈する部分を「赤色部」、胎土本来の色調を呈する部分を「肌色部」として、それぞれの部位を分析の対象とする。各試料の分析対象部位は第48図右に示す。

第16表 分析試料一覧

試料番号	出土地点	地区	層位	遺物番号	種類	備考
1		D-4区	一括		土師器 壺 底部	
2		D-5区	I b層		土師器 壺 底部	
3	No.26	C-4区	II層	①	土師器 壺 底部	
4		D-4区	I b層	②	土師器 壺 口縁部	9T
5	No.170	C-5区	II層	③	土師器 壺 底部	

2 分析方法

(1) 蛍光X線分析

材質調査に用いた装置はセイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (SEA2120L) である。本装置は、下面照射型の装置であり、X線管球はRh、コリメーターサイズは10mmφである。測定にあたっては、図版1に示した赤色部および肌色部においてスペクトル測定を実施し、両箇所における検出元素および検出強度を比較することにより、赤色部に特徴的に含まれる成分を特定する。なお、測定条件の詳細は結果図中に個別に記しているので、そちらを参照されたい。

(2) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕

微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

なお、5点の試料のうち、試料番号3～5の3点はいずれも、赤色部と肌色部の境界は比較的明瞭であり、薄片作製の際に生じた切断面を観察したところ、色調の異なる土を貼り合わせている状況が肉眼観察からも確認できた。一方、試料番号1と2の2点は、赤色部と肌色部との境界はやや不明瞭であったために、薄片作製の際には、粘土の貼り合わせという認識ができずに、表面の色に従って切断面を作製した。したがって試料番号1と2の薄片観察では、それぞれ異なる粘土も合わせて砂分の計数を行っている。

3 結果

(1) 蛍光X線分析

蛍光X線定性スペクトルを第44～46図に示す。スペクトル上段(A)が赤色部、中段(B)が肌色部、下段(A-B)が両者の差スペクトルである。なお、差スペクトルを用いて赤色部と肌色部の特徴を評価するには、本来は試料面が均質かつ平滑であることを前提条件とした上で、照射面積および管電流値を一定とした条件で測定を行う必要があるが、不定形な土師器片ではこの条件を満たすことは出来ない。したがって、今回の調査では、それぞれの測定において最適な管電流値を自動設定とし、差スペクトルはあくまでも顕著な差異を捉えるための図示法であることに留意されたい。

検出された元素は、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Y(イットリウム)、Zr(ジルコニウム)、Ba(バリウム)である。

5点の試料にはいずれも、肌色部に比べて赤色部は鉄が多く、相対的に珪酸分が少ない特徴が認められる。なお、赤色顔料として用いられる朱や鉛丹の構成元素である水銀や鉛は検出されていない。

(2) 薄片作製観察

観察結果を第17表、第47・48図に示す。以下に各試料の観察結果を述べる。

ア 試料番号1

胎土中に含まれる砂粒の種類は、赤色部と肌色部とで顕著な差異は認められない。どちらも火山ガラスが比較的多く含まれ、次いで斜長石の鉱物片と石英の鉱物片が少量含まれ、変質岩や流紋岩・デイサイトなどの岩石片が微量含まれる。火山ガラスの形態は、平板状のバブル型が主体であり、発泡した軽石型も含まれる。

砂の粒径組成は、赤色部と肌色部ともに細粒砂が最も多いが、赤色部では細粒砂に次いで極細粒砂が多く、肌色部では細粒砂に次いで中粒砂が多いという違いが認められる。碎屑物の割合は、赤色部で15%程度、肌色部は若干低い10%程度を示す。

赤色部の薄片試料では、基質が淡褐色の部分と赤褐色の部分とが認められ、両者の境界は明瞭であるが、含まれる碎屑片は両者とも同じものである。赤色部試料における赤褐色部分は、基質の粘土が酸化すると共に、炭質物も酸化して、褐色となっている。また赤褐色部分の基質に点在する酸化鉄は、赤みが強くなっている。赤色部に認められた酸化角閃石の存在から、土師器は800℃程度の焼成を受けたと推測される。

イ 試料番号2

胎土中に含まれる砂粒の種類は、赤色部と肌色部とで顕著な差異は認められない。どちらも火山ガラスが比較的多く含まれ、次いで斜長石の鉱物片と石英の鉱物片が少量含まれる。他に雲母類の鉱物片やチャート、頁岩などの堆積岩類の岩石片が極めて微量ながらも含まれている。火山ガラスの形態は、試料番号1と同様に平板状のバブル型が主体であり、発泡した軽石型も含まれる。

砂の粒径組成は、赤色部と肌色部ともに中粒砂、細粒砂、極細粒砂が同量程度で多くを占める。碎屑物の割合は、赤色部も肌色部も15%程度を示す。

赤色部の薄片試料では、基質が淡褐色の部分と褐色の部分とが認められ、両者の境界は漸移的である。両者に含まれる碎屑片は共通しているが、褐色部では基質の粘土や炭質物が酸化することにより褐色化している。また、褐色部に認められる角閃石は弱酸化していることから、土師器は800℃近い温度で焼成を受けた可能性があると考えられる。

ウ 試料番号3

胎土中に含まれる砂粒の種類は、赤色部と肌色部とで顕著な差異は認められない。どちらも火山ガラスと斜長

石の鉱物片が比較的多く含まれ、次いで石英の鉱物片や変質岩が少量含まれ、安山岩や流紋岩・デイサイトなどの岩石片が微量含まれる。火山ガラスの形態は、平板状のバブル型が主体であり、発泡した軽石型も微量または少量含まれる。

粒径組成は、赤色部では中粒砂が最も多く、粗粒砂や細粒砂も同量程度に多いが、肌色部では細粒砂と極細粒砂が多いという違いが認められる。碎屑物の割合は、赤色部で15%程度、肌色部はそれよりも有意に低い5%程度を示す。

赤色部の赤い色調は、基質の粘土に含まれる酸化鉄に起因する。また、赤色部には酸化角閃石が認められることから、土師器は800℃程度の焼成を受けたと推測される。

エ 試料番号4

胎土中に含まれる砂粒の種類は、赤色部と肌色部とで顕著な差異は認められない。どちらも斜長石の鉱物片、流紋岩・デイサイトと変質岩の岩石片および火山ガラスが比較的多く含まれ、次いで石英や斜方輝石の鉱物片などが微量含まれる。また、赤色部では酸化鉄塊も比較的多く含まれる。火山ガラスの形態は、他の試料と同様に平板状のバブル型が主体であり、発泡した軽石型も含まれる。

粒径組成は、赤色部では粗粒砂が最も多く、次いで細粒砂が多い組成であるが、肌色部は中粒砂が最も多く、次いで極細粒砂が多い。碎屑物の割合は、赤色部が約10%であり、肌色部はそれよりも数%程度低い。

赤色部の薄片試料では、基質粘土が褐色を呈し、酸化鉄も多く含まれる。また、赤色部に認められた酸化角閃石により、土師器は800℃程度の焼成を受けたと推測される。

オ 試料番号5

胎土中に含まれる砂粒の種類は、赤色部と肌色部とで顕著な差異は認められない。どちらも斜長石の鉱物片、変質岩の岩石片および火山ガラスが比較的多く含まれ、次いで石英の鉱物片や凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩などの岩石片が微量含まれる。火山ガラスの形態は、他の試料と同様に平板状のバブル型が主体であり、発泡した軽石型も含まれる。

粒径組成は、赤色部では中粒砂が最も多く、次いで細粒砂が多い組成であるが、肌色部は細粒砂が最も多く、次いで中粒砂と極細粒砂が多い。碎屑物の割合は、赤色部が約10%であり、肌色部はそれよりも低い5%程度である。

赤色部の薄片試料では、基質粘土が褐色を呈し、酸化鉄の赤味も強いことが観察された。また、赤色部には酸化角閃石が認められることから、土師器は800℃程度の焼成を受けたと推測される。

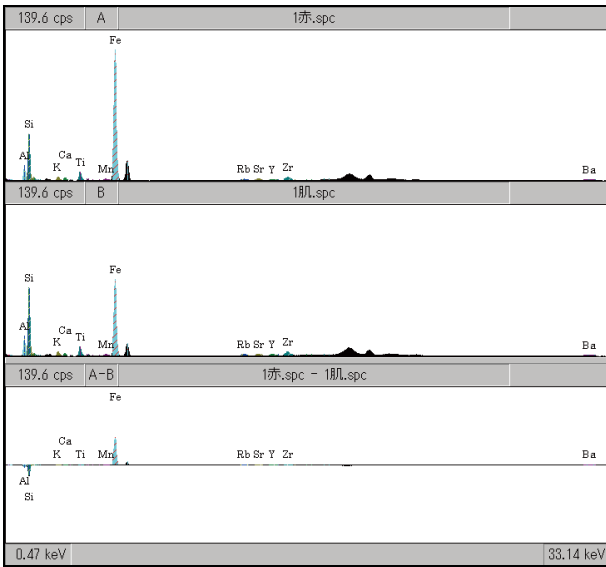
[測定条件]

測定条件	A	B
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	216	219
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50	50
管電流(μA)	9	12
フィルタ	なし	なし
マイラー	OFF	OFF
コメント	試料番号1 赤色部	試料番号1 肌色部

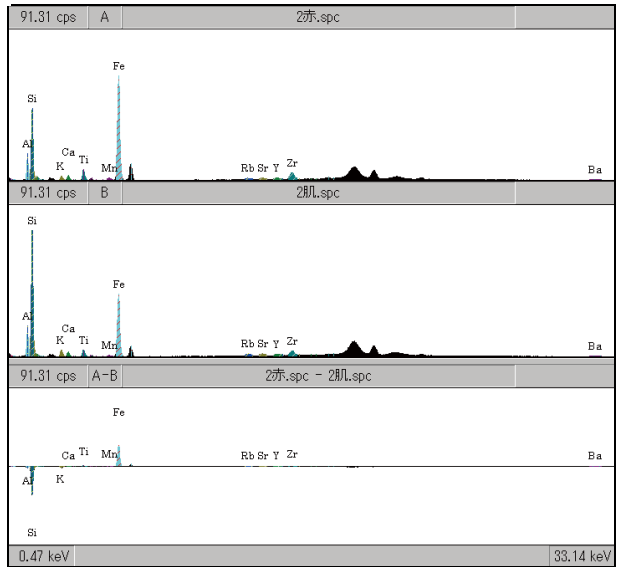
[測定条件]

測定条件	A	B
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	222	219
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50	50
管電流(μA)	9	10
フィルタ	なし	なし
マイラー	OFF	OFF
コメント	試料番号2 赤色部	試料番号2 肌色部

[スペクトル]



[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	A-B(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	77.374	107.773	-30.399	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	252.893	366.538	-113.645	1.63- 1.85
19	K	カリウム	Kα	21.437	27.971	-6.533	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	20.628	17.974	2.654	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	57.690	63.377	-5.687	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	15.042	17.693	-2.651	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	974.962	568.067	406.896	6.25- 6.55
37	Rb	ルビジウム	Kα	18.151	24.706	-6.555	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	Kα	22.155	25.959	-3.804	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	Kα	19.465	24.870	-5.405	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	Kα	41.314	54.218	-12.903	15.53-15.96
56	Ba	バリウム	Kα	17.361	15.704	1.657	31.76-32.36

試料番号1

[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	A-B(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	92.752	107.178	-14.427	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	254.476	448.157	-193.681	1.63- 1.85
19	K	カリウム	Kα	17.733	30.947	-13.214	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	20.934	22.240	-1.306	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	48.500	33.136	15.364	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	16.757	9.673	7.085	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	510.106	304.066	206.040	6.25- 6.55
37	Rb	ルビジウム	Kα	22.048	27.813	-5.765	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	Kα	24.645	30.253	-5.608	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	Kα	25.762	29.381	-3.619	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	Kα	66.224	56.099	10.125	15.53-15.96
56	Ba	バリウム	Kα	15.464	16.089	-0.625	31.76-32.36

試料番号2

第44図 蛍光X線定性スペクトル1

4 考察

(1) 色の違いについて

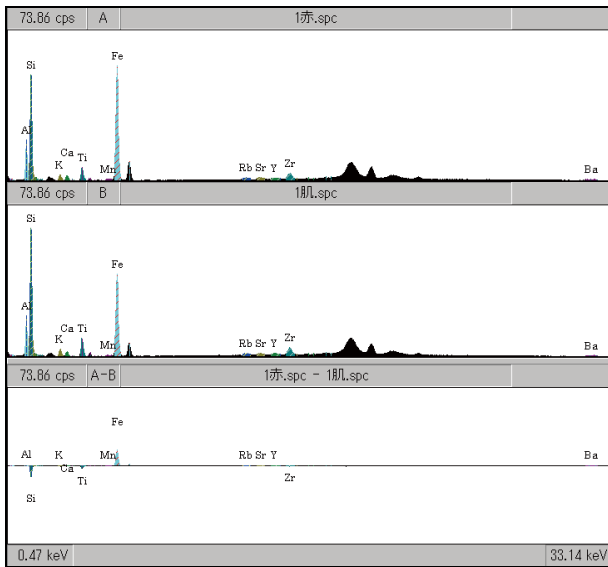
今回の試料は、5点ともに色調の異なる粘土を貼り合わせている状態が認められた。さらに薄片観察により、赤色部の色調は、土器の表面に顔料などが塗布されたも

のではなく、胎土を構成する粘土の色調に由来することが確認された。3点の試料のうち、試料番号3~5の3点については、赤色部と肌色部とでは、砂粒を構成する鉱物や岩石の種類構成に顕著な差異はないものの、それらの粒径組成と含有量とに有意な差が認められた。3点

[測定条件]

測定条件	A	B
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	218	221
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50	50
管電流(μA)	11	13
フィルタ	なし	なし
マイラー	OFF	OFF
コメント	試料番号3 赤色部	試料番号3 肌色部

[スペクトル]



[結果]

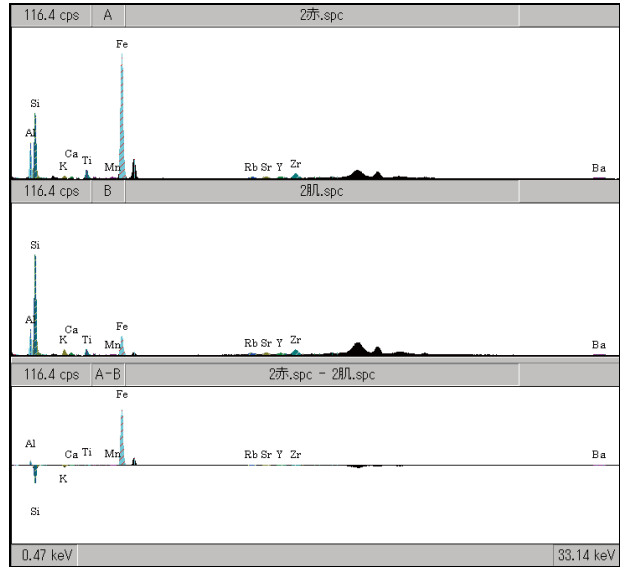
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	A-B(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	118.332	114.367	3.964	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	307.104	364.145	-57.041	1.63- 1.85
19	K	カリウム	Kα	21.284	26.342	-5.058	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	19.823	19.240	0.583	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	48.369	67.062	-18.693	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	10.292	8.802	1.490	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	450.319	327.544	122.775	6.25- 6.55
37	Rb	ルビジウム	Kα	24.629	26.391	-1.762	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	Kα	28.538	27.780	0.758	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	Kα	26.341	27.854	-1.513	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	Kα	53.009	61.421	-8.412	15.53-15.96
56	Ba	バリウム	Kα	16.984	14.738	2.246	31.76-32.36

試料番号3

[測定条件]

測定条件	A	B
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	220	222
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50	50
管電流(μA)	9	9
フィルタ	なし	なし
マイラー	OFF	OFF
コメント	試料番号4 赤色部	試料番号4 肌色部

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	A-B(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	158.980	113.311	45.668	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	288.769	449.063	-160.293	1.63- 1.85
19	K	カリウム	Kα	13.108	31.691	-18.583	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	11.212	16.414	-5.202	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	50.692	35.451	15.242	4.37- 4.65
25	Mn	マンガン	Kα	13.939	7.666	6.274	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	Kα	761.984	121.450	640.534	6.25- 6.55
37	Rb	ルビジウム	Kα	18.407	28.657	-10.250	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	Kα	20.737	32.334	-11.596	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	Kα	21.285	30.886	-9.601	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	Kα	53.169	63.397	-10.227	15.53-15.96
56	Ba	バリウム	Kα	12.662	15.935	-3.273	31.76-32.36

試料番号4

第45図 蛍光X線定性スペクトル2

の試料のいずれにおいても、赤色部の砂の粒径組成は肌色部に比べて粗い径の砂粒が多い傾向を示し、赤色部の碎屑物の割合は肌色部のそれよりも高いことが示されている。これらのことから、赤色部の土も肌色部の土も、共通の地質学的背景を有する地域内の堆積物が材料とし

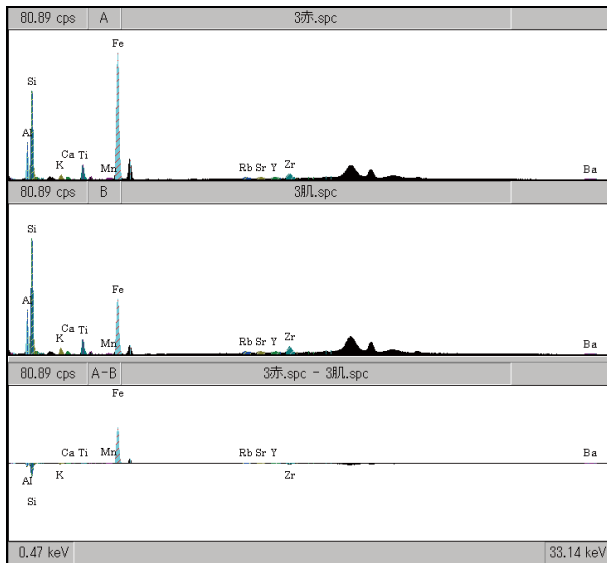
て使用されているが、素地土の調整段階で、混ぜる砂の粗さや量が異なっていたことが推定される。

なお、試料番号1と2については、赤色部と肌色部との間で上述した3点に認められたような差異が不明瞭である。これは、前述したように赤色の粘土と肌色の粘土の

[測定条件]

測定条件	A	B
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	222	220
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50	50
管電流(μA)	11	12
フィルタ	なし	なし
マイラー	OFF	OFF
コメント	試料番号5 赤色部	試料番号5 肌色部

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	A-B(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	113.394	134.604	-21.211	1.38-1.59
14	Si	ケイ素	Kα	278.817	365.299	-86.481	1.63-1.85
19	K	カリウム	Kα	19.120	24.642	-5.522	3.19-3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	13.104	14.836	-1.732	3.56-3.82
22	Ti	チタン	Kα	59.770	62.602	-2.832	4.37-4.65
25	Mn	マンガン	Kα	10.872	8.836	2.036	5.75-6.05
26	Fe	鉄	Kα	546.434	243.862	302.572	6.25-6.55
37	Rb	ルビジウム	Kα	22.104	27.498	-5.394	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	Kα	24.123	30.442	-6.319	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	Kα	24.689	30.863	-6.174	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	Kα	50.196	63.342	-13.146	15.53-15.96
56	Ba	バリウム	Kα	13.942	15.616	-1.673	31.76-32.36

試料番号5

第46図 蛍光X線定性スペクトル3

それぞれの砂粒を計数した結果ではなく、両者を合わせて計数したことによる。それでも碎屑物の量比は、赤色部の方が高い傾向は示されている。

さらに、蛍光X線分析により、5点ともに赤色部には鉄の含有量の多い傾向が捉えられたことから、赤色部を構成する土については、元々酸化鉄分を多く含む褐色系統の色調を呈する粘土が使用されたか、あるいは調整段階で酸化鉄粒が多く混ぜられた可能性がある。おそらく、こうした調整を行った粘土は焼成後に赤色を呈することが確かめられた後に、器の装飾的な効果を考慮して素地土を貼り合わせるという作業が行われたと考えられる。

(2) 胎土について

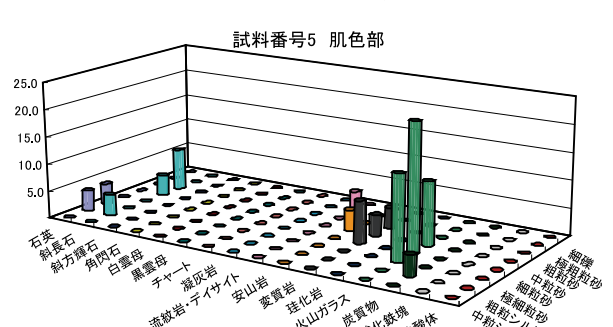
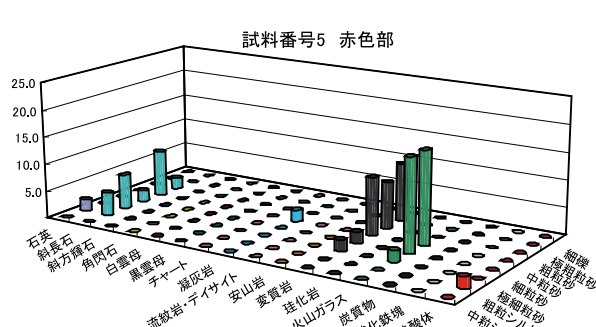
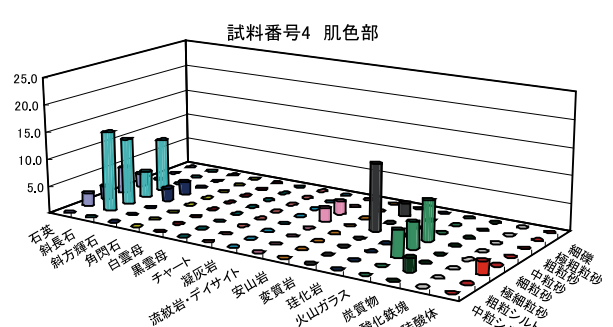
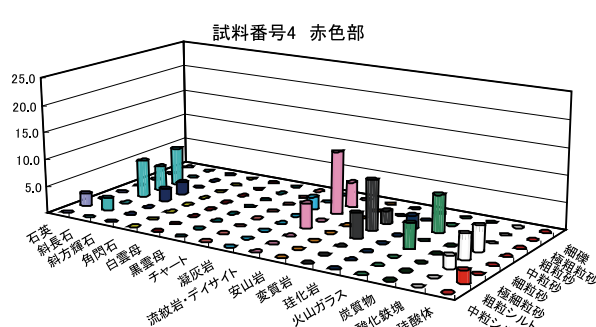
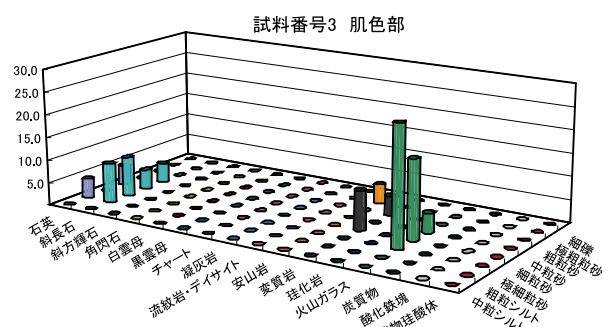
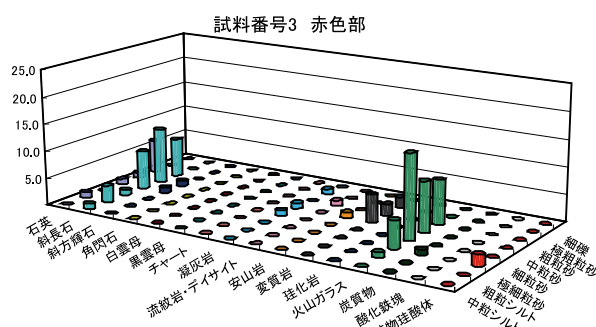
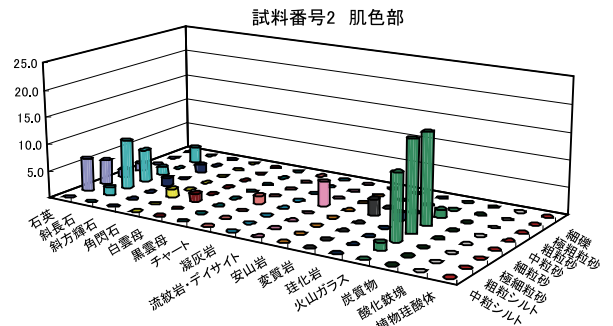
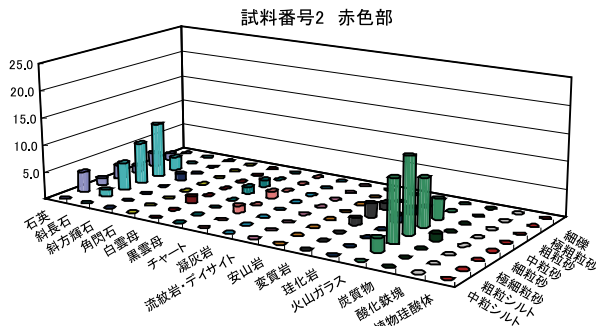
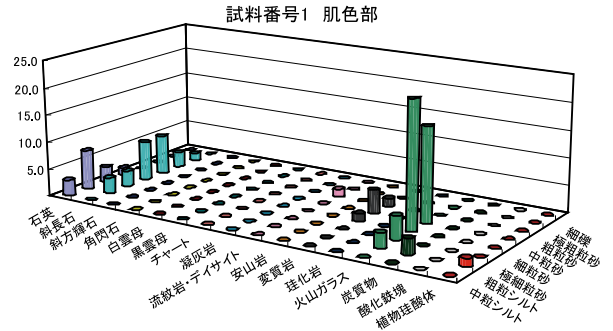
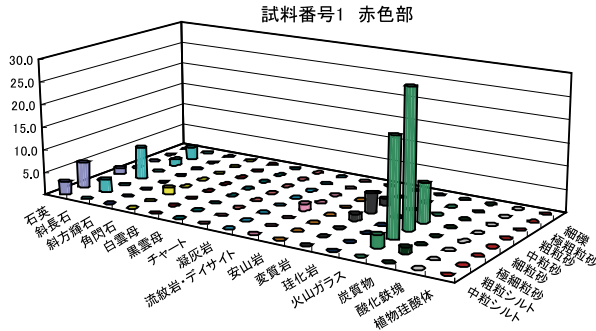
5点の試料はいずれもバブル型を主体とする火山ガラスを胎土中に多量に含むことが特徴である。この火山ガラスは、その形態的特徴から、里町遺跡が立地する大口盆地内に分布するいわゆるシラス台地を構成する火砕流堆積物に由来すると考えられる。おそらく、5点の土師器は、大口盆地内の堆積物が材料として使用されている可能性が高いと考えられる。

また、極めて微量ではあるが、各試料には凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩などの岩石片が含まれ、試料番号2と4では堆積岩類も認められる。凝灰岩、流紋岩・デイサイトおよび安山岩などとそれらの変質岩の岩石片は、上述したシラス台地を構成する火砕流堆積物に由来する可能性がある。一方で堆積岩類は、大口盆地の北西方の紫尾山地を構成する四万十層群（鹿児島県, 1990）に由来する可能性がある。

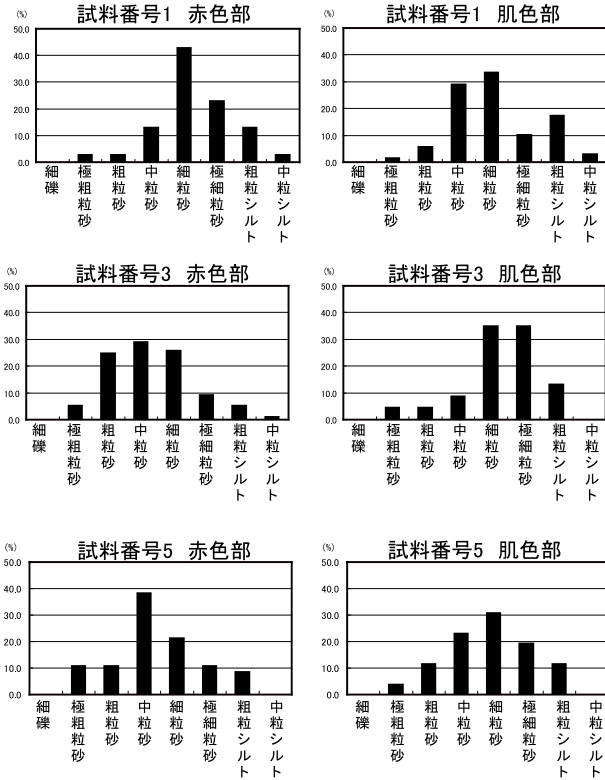
現時点では、各試料の材料採取地がどの程度離れた位置関係にあるかは不明であるが、今後、大口盆地内各地の分析事例が蓄積されれば、盆地内での材料採取地の違いも推定することができるかも知れない。

引用文献

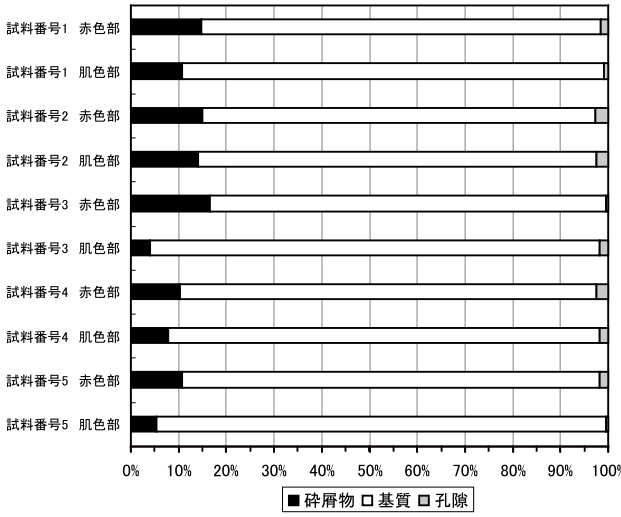
- 鹿児島県地質図編集委員会, 1990, 鹿児島県地質図 縮尺 10万分の1. 鹿児島県.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.



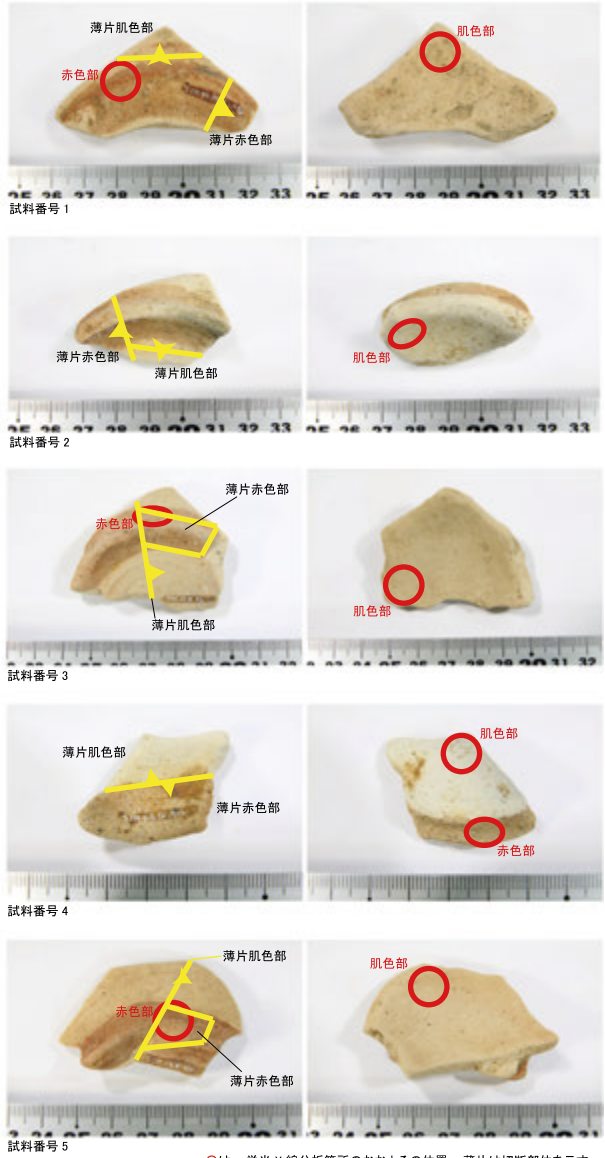
第47図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



胎土中の砂の粒径組成

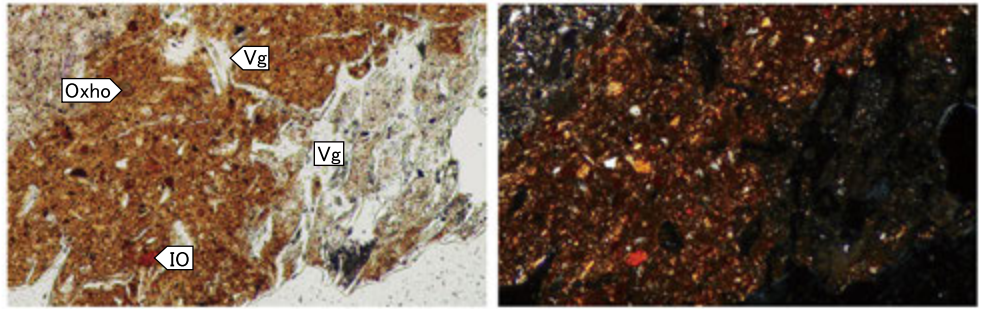


碎屑物・基質・孔隙の割合

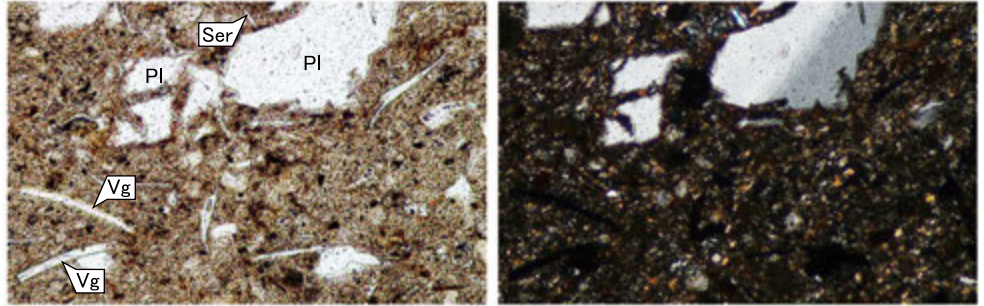


試料および分析部位

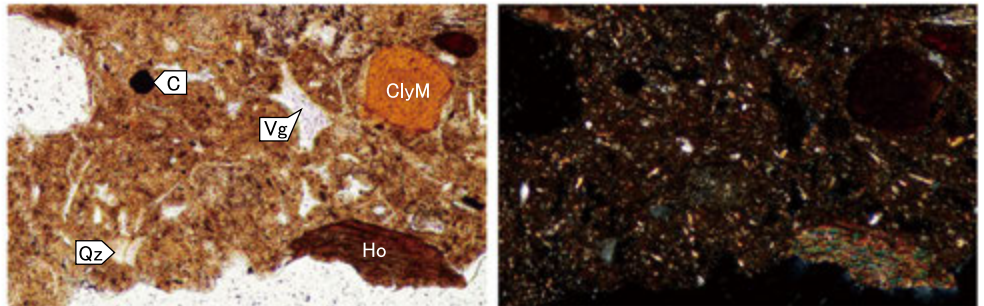
第48図 胎土中の砂の粒径組成, 碎屑物・基質・孔隙の割合, 各粒度階における鉱物



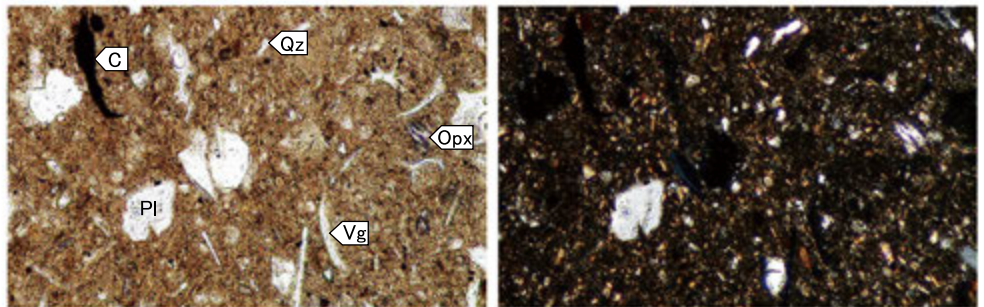
1.試料番号1(D-4区一括 碗): 赤色部



2.試料番号1(D-4区一括 碗): 肌色部



3.試料番号2(D-5区 I b層 碗): 赤色部

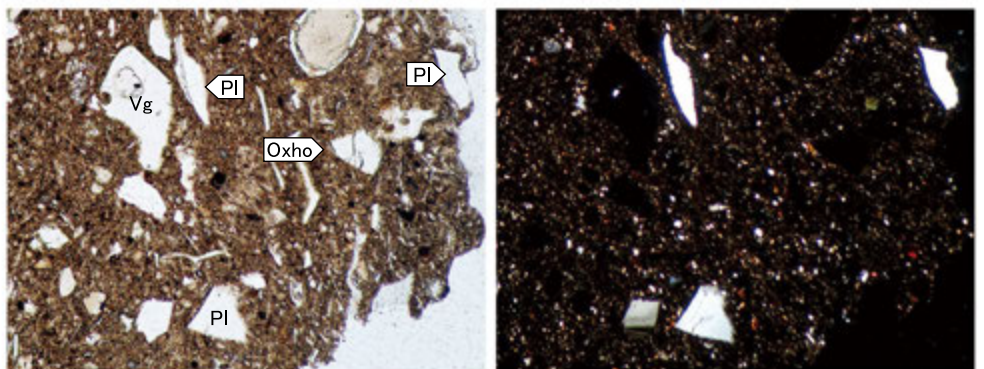


4.試料番号2(D-5区 I b層 碗): 肌色部

0.2mm (1~4)

- Qz: 石英
- Pl: 斜長石
- Opx: 斜方輝石
- Ho: 角閃石(弱酸化)
- Oxho: 酸化角閃石
- Vg: 火山ガラス
- Ser: セリサイト
- IO: 酸化鉄
- ClyM: 粘土塊
- C: 炭質物
- IM: 酸化鉄塊
- P: 孔隙

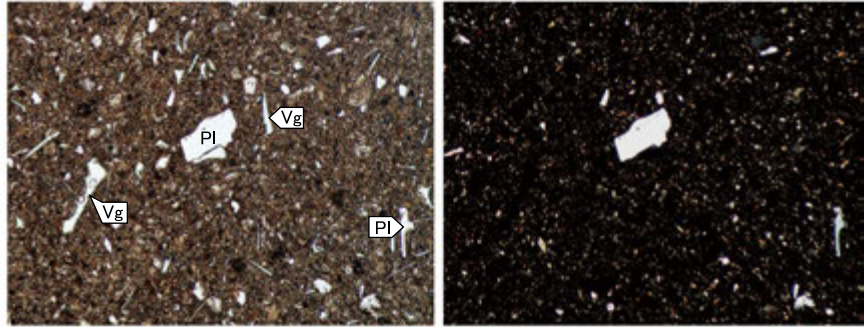
写真左列
 下方ポーラー
 写真右列
 直交ポーラー下



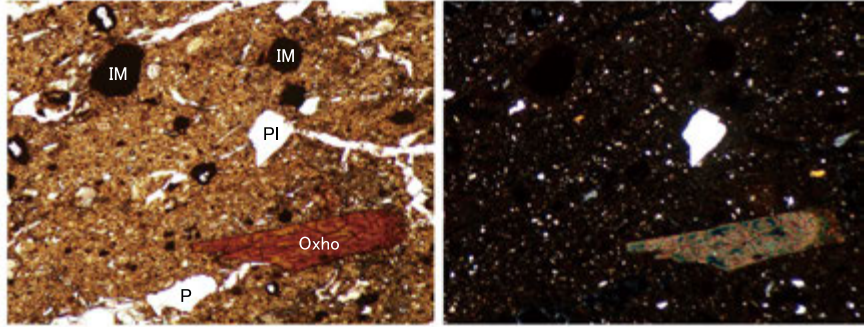
5.試料番号3(No.26地点 C-4区 II層 土器碗底部): 赤色部

0.5mm (5)

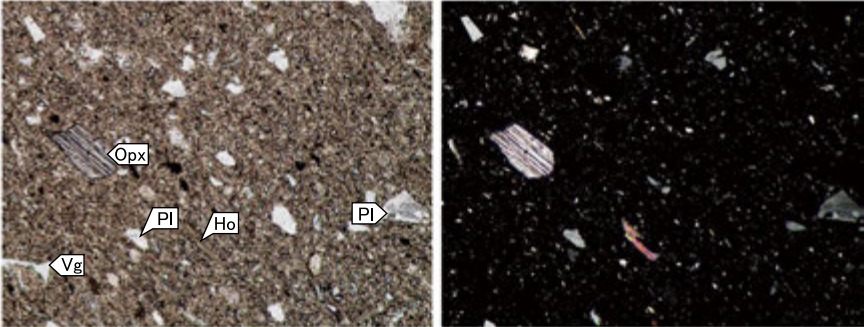
第49図 胎土薄片①



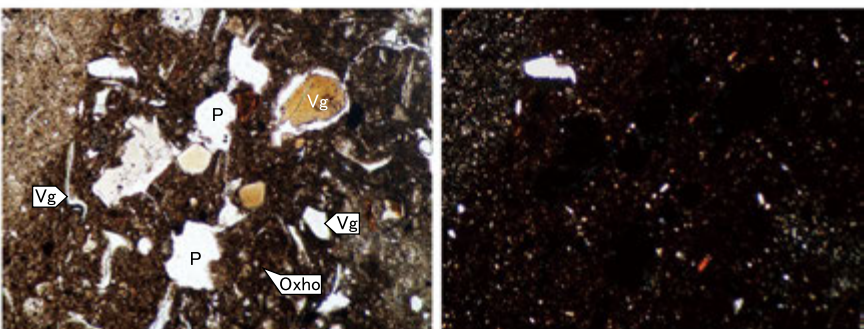
6.試料番号3(No.26地点 C-4区II層 土師器碗底部):肌色部



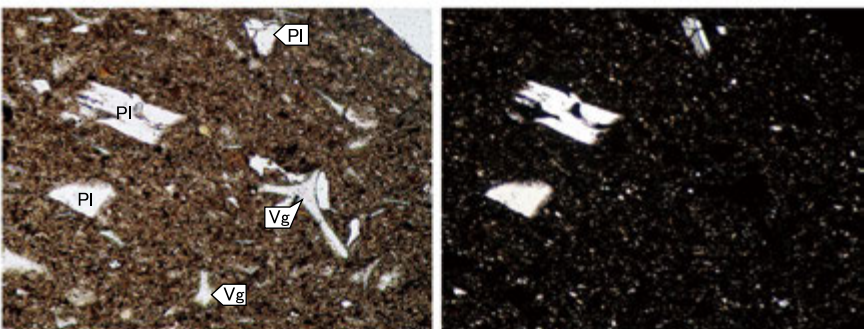
7.試料番号4(D-4区I b層 土師器碗口縁部 9T):赤色部



8.試料番号4(D-4区I b層 土師器碗口縁部 9T):肌色部



9.試料番号5(No.170地点 C-5区II層 土師器碗底部):赤色部



10.試料番号5(No.170地点 C-5区II層 土師器碗底部):肌色部

0.5mm

Pl:斜長石
Opx:斜方輝石
Ho:角閃石
Oxho:酸化角閃石
Vg:火山ガラス
P:孔隙
IM:酸化鉄塊

写真左列
下方ポーラー

写真右列
直交ポーラー下

第50図 胎土薄片②

第V章 総括

第1節 縄文・古墳時代

縄文時代の遺物は、上加世田式土器と考えられる土器（1）や石鏃（3・4）などが出土しているが、遺構は検出されず、遺物量も少ない。古墳時代の遺物は甕の口縁部形態や壺の底部形態から中津野式土器段階と考えられる土器が出土しているが、遺構は検出されず、遺物量も少ない。よって、本遺跡での当該期の利用期間は極めて限定的であることが分かる。また、本遺跡は、集落本体ではなく、周縁域にあたるのが想定される。

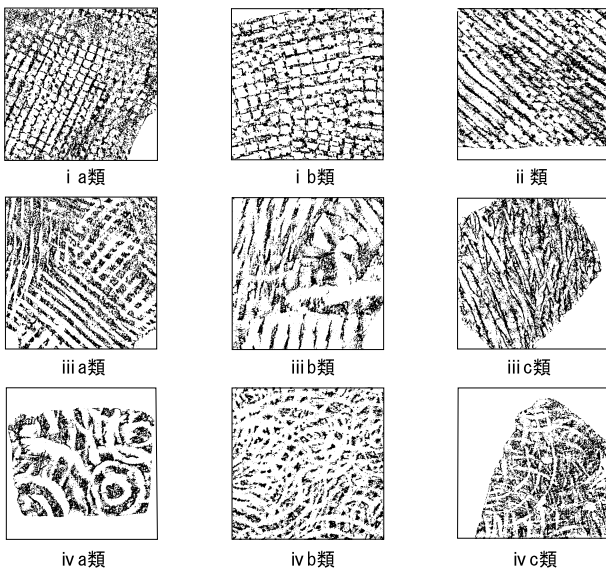
なお、近隣には古墳時代の地下式板石積墓が発見された「大田地下式横穴^(註1)」があり、こうした墓を造る集団の集落が本遺跡周辺に存在する可能性もあるが、両者の年代的検証が必要である。

第2節 古代

1 出土遺物の年代と変遷について

遺構内遺物の年代観については、器形等の分析可能な土師器について検討を行った。なお、土師器の年代観については、高篠編年（松田2004）、深野編年（深野2012）を参考にした。

いわゆる「充実高台」をもつ坏や底部が円盤状に突出する坏がSD2（31）・SK5（53・54・56・57）・SK8（85～97）から出土しており、高篠編年のⅢ期（9世紀後半～10世紀前半）にあたる。また、高篠編年の黒色土器坩1類に類似する土師器坩がSK3（39）・SK6（63・64）・SK8（103）、黒色土器坩2類（29）に類似する土師器坩がSD2で出土しており、高篠編年のⅡ・Ⅲ期（9世紀前半～10世紀前半）にあたる。よって、年代的検討のできた本遺跡検出の古代の遺構は、9世紀前半～10世紀前半に



第51図 須恵器甕叩き目当て具痕の分類

収まるものと考えられる。

次に遺構外の遺物の年代的検討を行う。土師器は遺構内同様、いわゆる「充実高台」をもつ坏、底部が円盤状に突出する坏（130～132）、黒色土器坩1類に類似する土師器坩（133）などが出土しており、高篠編年のⅡ・Ⅲ期（9世紀前半～10世紀前半）に該当する遺物が主体を占める。ただし、底径が大きく低い高台のつく坩（144）や口縁端部を短く下方へ垂下させ、かえりの名残をもつ蓋（155・156）など深野編年の8世紀前葉～中葉にあたる資料もわずかながら出土していることも注目される。須恵器は、口縁端部を短く下方へ垂下させ、天井部にヘラケズリを行う蓋（176）や高台が底部端より内側につく坩（179・180）が牛頸窯編年のⅦA～ⅦB期（8世紀初頭～8世紀後半）の資料（舟山2008）に類似し、底径が大きく、体部下位にヘラケズリを行い、口縁端部がわずかに外反する（177）や突帯付長頸壺（186）が8世紀後半の荒尾産須恵器（網田2003）に類似するなど8世紀代の資料が一定量存在する。一方、牛頸編年のⅧ期（8世紀末～9世紀前半）にあたる資料は、高台が底部端に付けられる碗（181・182）が該当するが、その量は少ない。越州窯青磁は太宰府編年の碗Ⅰ1a類であり、年代は8世紀末～9世紀中頃とされる（山本1999）。よって、遺構外遺物からみた本遺跡の供膳具の変遷は、8世紀が須恵器主体で一部土師器や陶磁器が含まれ、9世紀～10世紀前半に土師器主体に移ったと想定される。

2 須恵器の産地について

本遺跡で出土した須恵器について産地特定を試みた。本遺跡で出土した須恵器のうち、最も多く出土した甕に

第18表 里町遺跡出土須恵器甕分類表

大分類	小分類	特徴
格子目	i a類	格子が3×3mm程度の正方形のもの
	i b類	格子が2×4mm程度の長方形のもの
擬格子	ii類	
平行	iii a類	幅が2～3mm程度のもの
	iii b類	幅が約4～5mm程度のもの
	iii c類	縄目状のもの
同心円	iv a類	半径2cm程度、幅4mm程度のもの
	iv b類	半径3cm程度、約4mm程度のもの
	iv c類	半径3cm程度、幅2mm程度のもの

第19表 里町遺跡・岡野窯出土須恵器分類結果
【里町遺跡（n=60）】

		内面					
		iii a	iii b	iii c	iv a	iv b	iv c
外面	i a	1	7(1)	1	3	5(1)	
	i b		2(1)	4	3	5	(1)
	ii			1		1	
	iii a	5	7	1	4	6	2

【岡野窯（n=38）】

		内面					
		iii a	iii b	iii c	iv a	iv b	iv c
外面	i a	15	6(2)		8(2)		
	i b		1(1)		5(1)		

※括弧内は内面に複数の当て具痕をもつものの遺物数である。

ついて、叩き目と当て具痕に着目し、分類を行った(第51図、第18表)。その分類結果と本遺跡から距離的に最も近い須恵器窯である岡野窯出土の資料の分類結果の比較を行った(注2)。比較の結果、本遺跡出土の須恵器甕のうち、岡野窯と類似する資料は60点中21点(35%)であった(第19表)。また、第IV章第1節で須恵器の胎土分析結果を掲載したが、岡野産の可能性のあるものは最大で35%程度、最小で10%程度という結果が得られている。よって、叩き目と当て具痕に着目した分類結果と胎土分析の結果は、ほぼ同様の結論となったといえよう。なお、胎土分析の結果から、産地推定ができた須恵器はほぼ熊本県産という結論が得られている。

3 越州窯青磁について

本遺跡では、越州窯青磁が1点出土したが、「七月」と「●時力」(注3)の記銘がある珍しい製品(191)であった。この時期で、記銘があるものは少なく、中でも壺などに多いため、碗に記銘があるものは稀である(注4)。

4 赤色高台をもつ土器器塚の整形技法について

これまで、高台の赤色化の原因について触れたものとして、黒川忠広氏の研究(黒川2006)がある。黒川氏は、X線分析装置による成分分析を行った結果、体部より高台部がわずかに多く鉄分が混入しているが、測定値の誤差値ともとれる程度の変化であり、結論を導き出すには至らなかったとしている。

そこで、第IV章第2節においてこれらの蛍光X線分析と薄片作成観察を行った。蛍光X線分析の結果、赤色高台には鉄分の含有量が多く、元々酸化鉄分を多く含む粘土が使用されたか、調整段階で酸化鉄粒が多く混ぜられた可能性があることが分かった。また、薄片観察により、高台部、体部いずれも共通の地質学的背景を有する地域内の堆積物が材料として使用されているが、素地土の調整段階で、混ぜる砂の粗さや量が異なっていることが推定されている。今後このような分析事例が増えていくことにより、古代土器製作技術の一端がより解明されていくものと思われる。

5 古代における里町遺跡の位置づけについて

本遺跡では、記銘をもつ越州窯青磁(191)や防長系の緑釉陶器(190)、転用硯(188)など特異な遺物が出土している。これらの遺物が出土した背景としてまず考えられるのは、官衙の存在である。本遺跡では、その根拠を示す具体的な遺構は検出されていない。しかし、本遺跡の近接した地域に「郡山」という地名があり、大水郷の郷家の所在地を示す可能性が指摘されている(繁昌2004)。このことから、貴重品が搬入された背景として本遺跡近辺に郷家が存在することが考えられる。

次に考えられるのは古代官道の存在である。大水駅を本遺跡が所在する伊佐市大口に比定する説があることや近世大口筋が本遺跡東側を通る現在の国道267号線に推

定されている(鹿児島県教育委員会文化課(編)1994)。よって、貴重品が搬入された背景として本遺跡が古代官道に近接している可能性があることも十分考えられる。いずれにせよ推測の域は出ないが、今後周辺地域の調査が行われ、解明されることに期待したい。

第3節 中世・近世

1 中世の出土遺物について

本遺跡における中世の出土遺物は少ないが、中世後期、14世紀から16世紀に比定される遺物が出土している。注目される遺物としては、洪武通宝が挙げられる。背面に「浙」の文字が見られ、浙江省で铸造したものである。始铸年代から、1368年以降の資料であり、出土したほかの中世遺物の年代観とも一致する。

2 近世・近代の遺物の出土状況について

鹿児島県内における近世陶磁器の出土傾向にほぼ適合する。中世末から江戸初期にかけて、肥前陶器と中国青花が見られ、その後肥前陶器が流入し、18世紀に入り肥前磁器が流入してくる。18世紀後半からは在地の陶器が入り始め、19世紀になると端反碗など薩摩磁器が多く見られるようになる。近代になると、瀬戸産の資料も入ってきている。全体的な出土量は少ないが、本遺跡には、肥前や瀬戸、薩摩藩内の苗代川や龍門司、平佐等の窯場から陶磁器が持ち込まれている。前述したように、本遺跡近くを大口筋が通ることから、これらの陶磁器を入手しやすい位置にあったと考えられる。

注釈

- (1) 遺跡名である。
- (2) 岡野窯の資料については実見できた資料のみ検討した。
- (3) 永山修一氏(ラ・サール学園教諭)の御教示による。
- (4) 山本信夫氏(早稲田大学理工学術院客員教授)の御教示による。

参考文献

- 網田龍生 2003 「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会
- 鹿児島県教育委員会文化課(編)1994 『大口筋・加久藤筋・日向筋』歴史の道調査報告書第二集 鹿児島県教育委員会
- 黒川忠広 2006 「赤色高台を有する黒色土器」『大河』第8号 大河同人
- 繁昌正幸 2004 「古代官衙の立地」『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 深野信之 2012 「薩摩・大隅国における8世紀の土器器」『菟原II—森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原刊行会
- 舟山良一 2008 「V. 出土遺物の検討」『牛頸窯跡群』大野城市文化財調査報告書第77集 大野城市教育委員会
- 松田朝由 2004 「第1節 土器の製作技術と土器様相」『九養岡遺跡 踊場遺跡 高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書71 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 山本信夫 1999 「太宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 国立歴史民俗博物館

写真図版



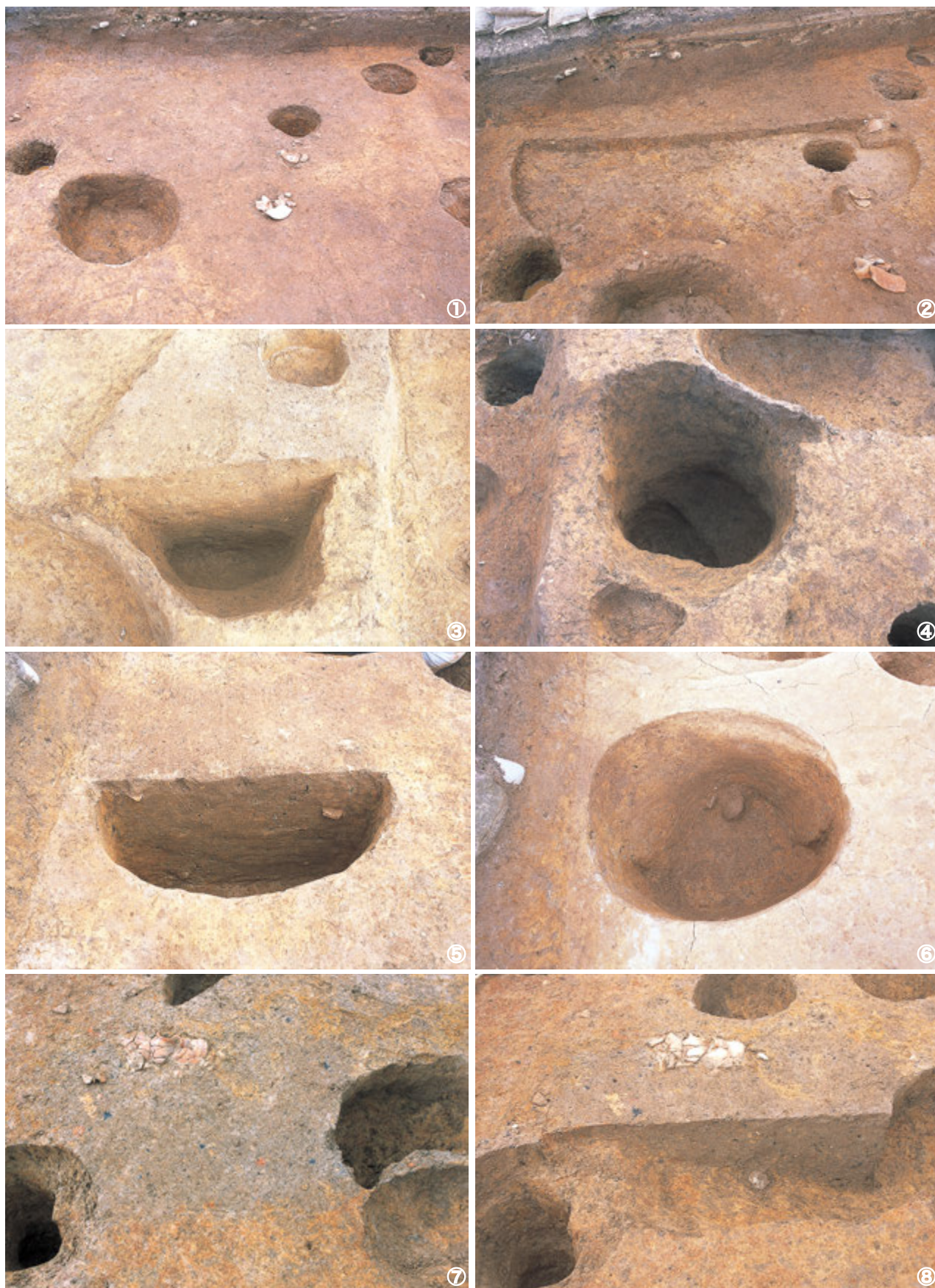
①里町遺跡遺構検出状況全景 ②C4区Ⅱ層残存箇所土層断面 ③5トレンチ土層断面 ④9トレンチ土層断面
遺構検出状況及び基本土層

写真図版 2



①SD2完掘状況 ②SD2埋土堆積状況(A-A') ③SD2埋土堆積状況(C-C') ④SK1検出状況 ⑤SK1完掘状況
⑥SK2検出状況 ⑦SK2埋土堆積状況

SD 2, SK 1・2 調査状況



①SK3検出状況 ②SK3埋土堆積状況 ③SK4埋土堆積状況 ④SK4完掘状況 ⑤SK5埋土堆積状況 ⑥SK5完掘状況
⑦SK6・9検出状況 ⑧SK6・9埋土堆積状況

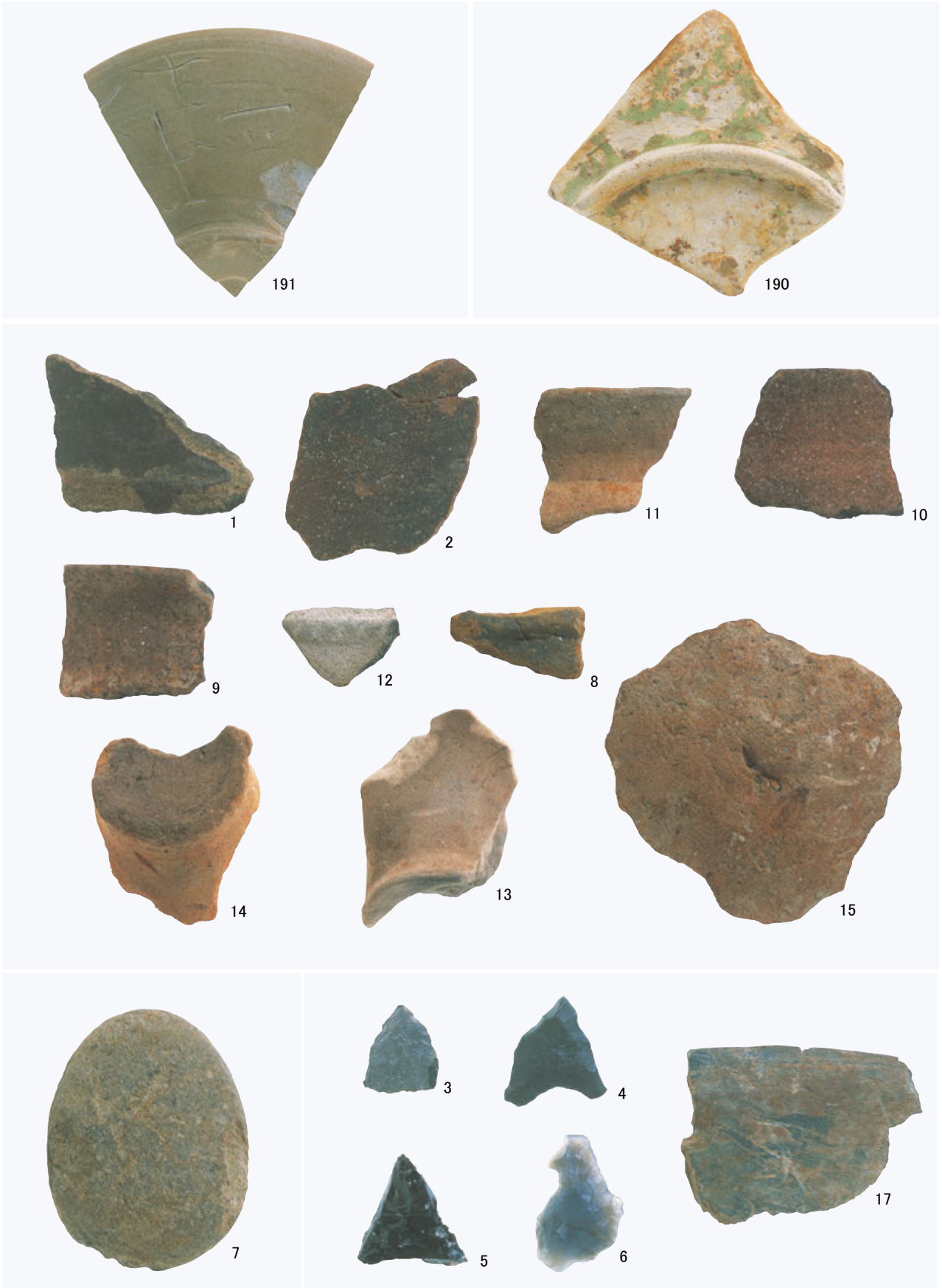
SK 3 ~ 6, SK 9 調査状況

写真図版 4



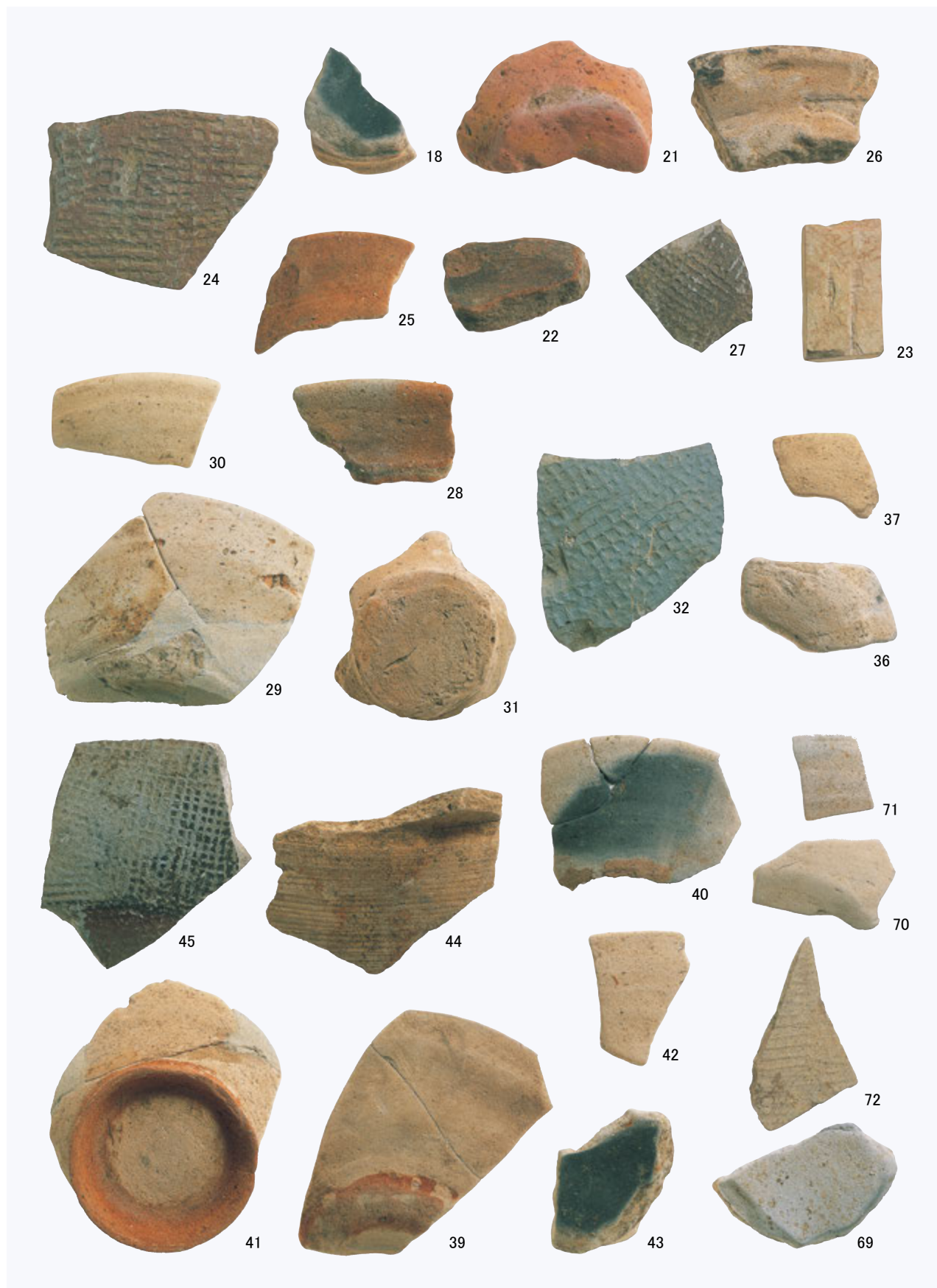
①SK7埋土堆積状況 ②SK7完掘状況 ③SK8遺物出土状況 ④SK8完掘状況 ⑤SD1完掘状況 ⑥SD1埋土堆積状況(B-B')
⑦SD1埋土堆積状況(C-C')

SK7・8, SD1 調査状況



縄文～古代遺物

写真図版6



古代出土遺物①



古代出土遺物②

写真図版 8



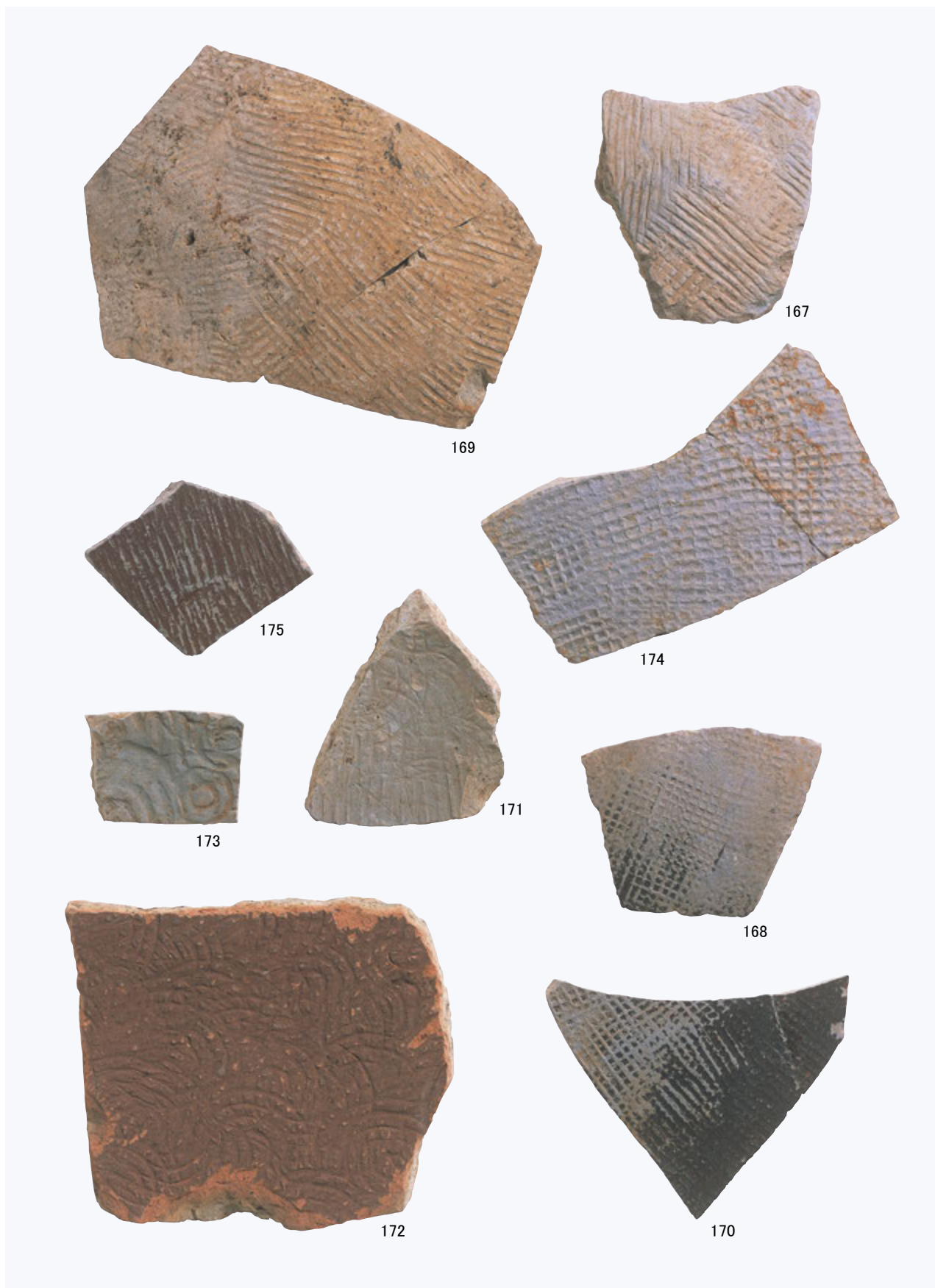
古代出土遺物③



古代出土遺物④



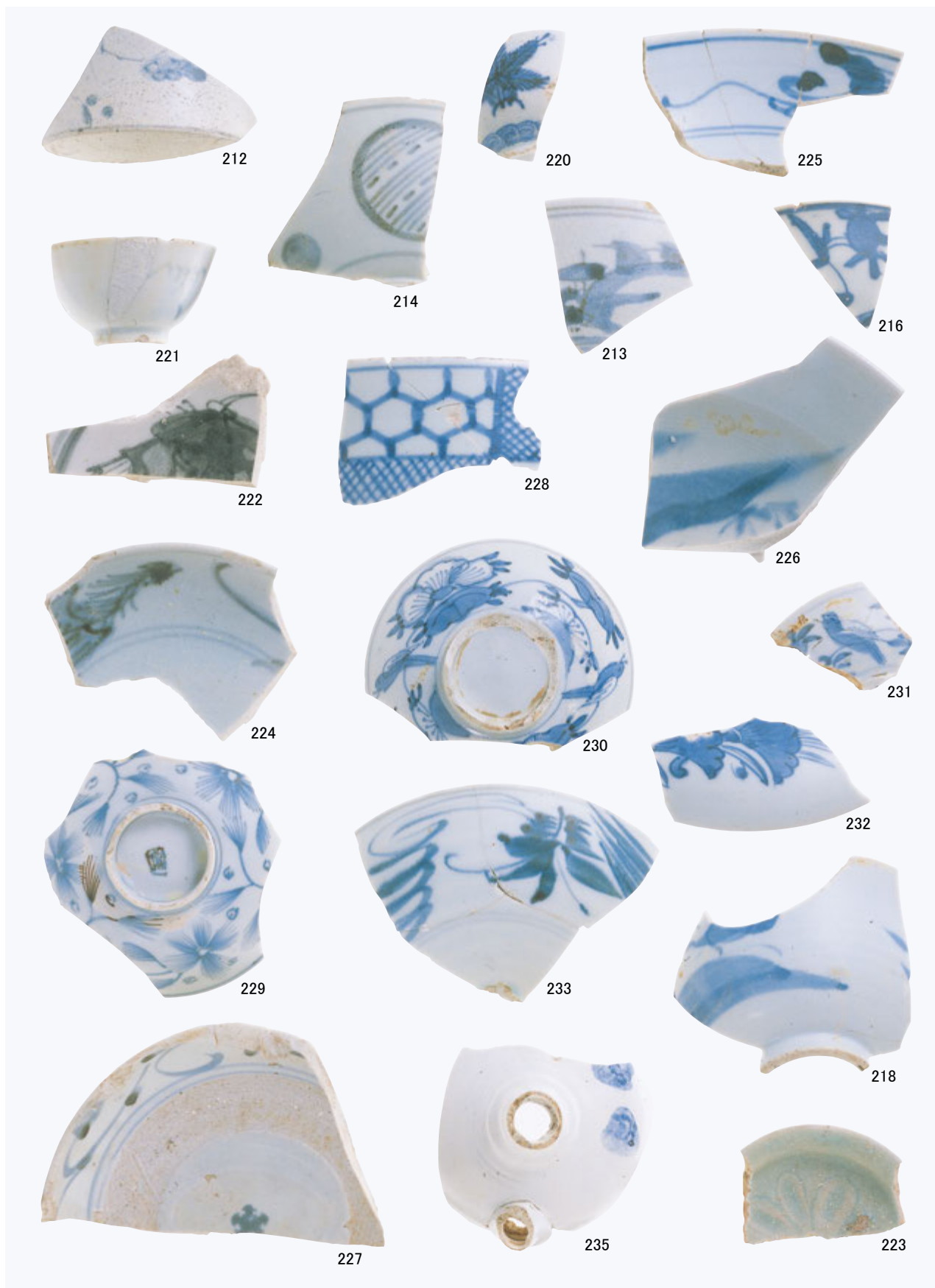
古代出土遺物⑤



古代出土遺物⑥



中世出土遺物



近世出土遺物①

写真図版 14



近世出土遺物②



近世・近代出土遺物

写真図版 16



近代出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(191)

国道267号線(木ノ氏バイパス)道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

里 町 遺 跡

発行年月日 2017年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811

印刷 日進印刷株式会社
〒892-0846
鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県